

昭和六十年九月十五日

原爆被爆四十周年記念

志
れ
な
革

第七号

旧長崎医科大学原爆犠牲者遺族会

目

次

口絵写真

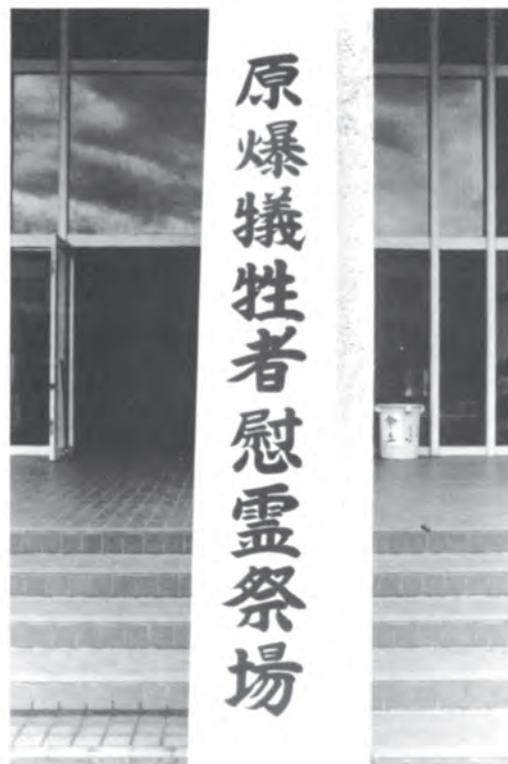
- 一、慰靈祭の祭壇
- 二、原爆記念講堂玄関に立てた慰靈祭場の看板
- 三、慰靈祭場に敬供された供花群
- 四、同右
- 五、土山秀夫医学部長の挨拶
- 六、読経に耳を傾ける遺族たち
- 七、調来助遺族会長の挨拶
- 八、調遺族会長の焼香
- 九、原爆記念講堂のロビーに安置された銅板名碑
- 一〇、慰靈祭にお詣りした遺族たち(一)
- 一一、同右(二)

一二、原爆で潰滅に帰した大学病院と基礎教室の配置図

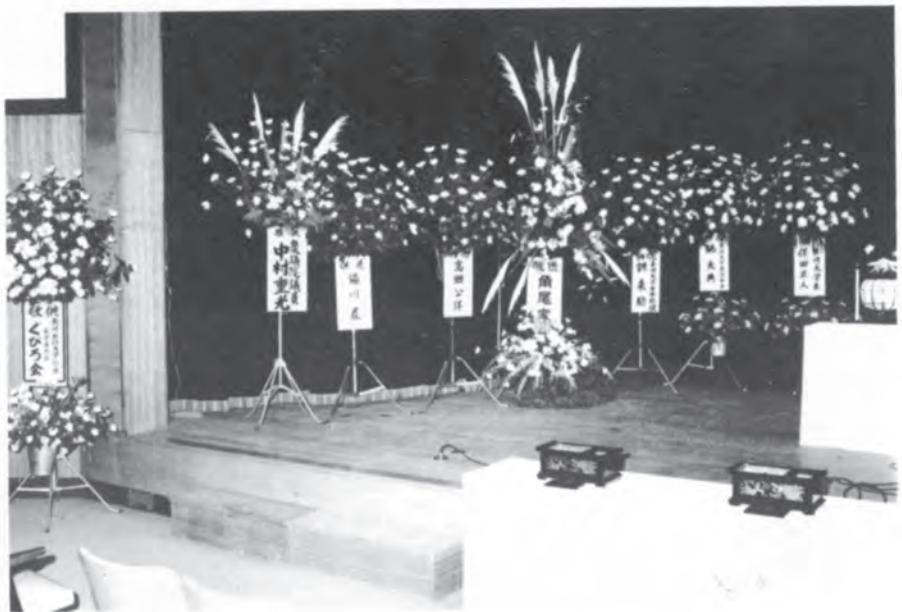
本誌の刊行に当つて	土山秀夫	一
偶 感	調 来 助	一
旧長崎医科大学原爆犠牲学徒遺族会の今昔	二	二
報告書	援護法適用の請願	六
銅板名碑の建立	原爆犠牲学徒の叙勲	七
「忘れな草」の出版	昭和六十年の慰靈祭	八
教官の遺族の手記		九
医学部・医専・薬専の学生遺族の手記		一六
看護婦・事務職員遺族の手記		七一
編 集 後 記	調 来 助	八五



1. 慰靈祭の祭壇



2. 原爆記念講堂の玄関に立てられた看板



3. 慰靈祭場に飾られた供花群



4. 同上



5. 土山医学部長の挨拶



6. 僧侶の読経に耳を傾ける遺族者たち



7. 調遺族会長の挨拶



8. 調遺族会長の焼香



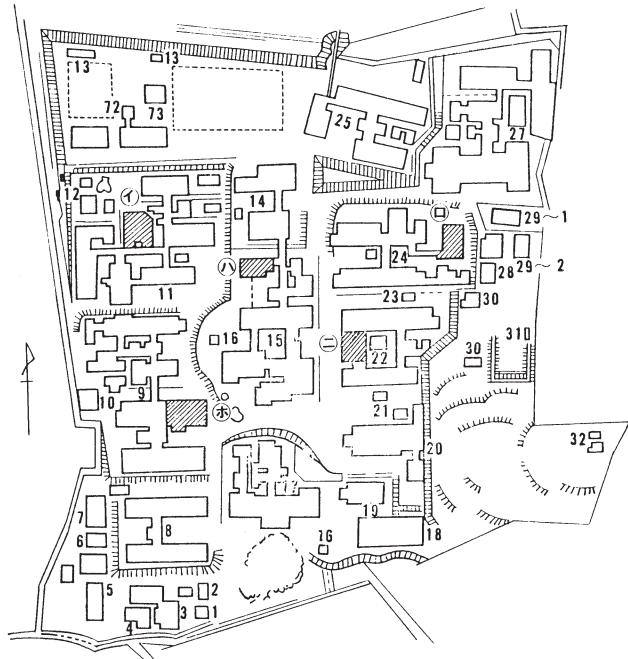
9. 原爆犠牲者たちの名を刻んだ銅板名碑



10. 慰靈祭にお詣りした遺族たち(1)



11. 慽靈祭にお詣りした遺族たち(2)



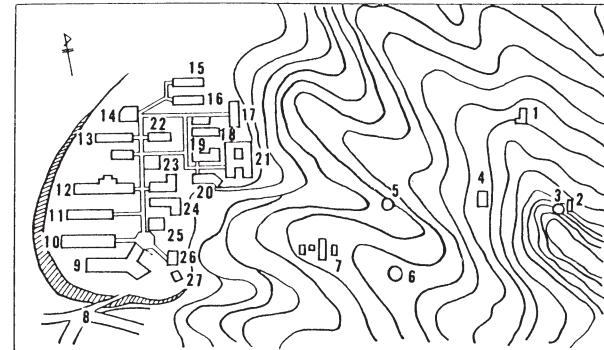
旧長崎医科大学基礎教室の配置図

- | | | |
|---------------|----------------|----------------|
| 1. 門 諸 所 | 15. 物置、便所及び脱衣所 | 25. 菜 園 学 数 室 |
| 2. 自 動 車 収 庫 | 14. 細 菌 学 教 室 | 26. 温 |
| 3. 配 電 室 | 15. 卫 生 学 教 室 | 27. 菜 園 専 門 部 |
| 4. 学 生 会 議 室 | 16. 洞 像 | 28. 水槽及ポンプ室 |
| 5. 柔 刺 道 場 | 17. 本 備 墓 | 29~1 統 器 |
| 6. 物 貯 場 | 18. 雨 天 体 操 場 | 29~2 生 徒 控 場 所 |
| 7. 機 械 工 室 | 19. 学 生 集 会 所 | 30. 大 弓 場 |
| 8. 法 医 学 教 室 | 20. 図 書 館 | 31. 射 的 場 |
| 9. 病 理 学 教 室 | 21. 大 講 堂 | 32. 睡 合 ハ 講 室 |
| 10. 土 藏 | 22. 生 理 学 教 室 | 72. 医 学 専 門 部 |
| 11. 解 剖 学 教 室 | 23. 蓄 電 室 | 73. 生 徒 控 場 所 |
| 12. 燃 却 場 | 24. 生 化 学 教 室 | |

備考: 斜線は多数の学生が遭難した講堂を示す。

亜 解剖学講堂(医專1年第1小隊)

ハ 卫生学講堂(医專2年生) ニ 生理学講堂(学部1年生) ハ 病理学講堂(学部2年生)



旧長崎医科大学附属病院及び東側丘陵の見取地図

1. 丘の中腹の民家
倒壊したが焼けず、この家より米と金を持ち出し
握り飯を作って被災者に配給した。
2. 六弘法の茶店
倒壊、焼けず。
3. 六弘法(様)
人口は幅55cm、高さ145cm、奥行は約3×3mの
広さを有する祠窟で、奥に弘法大師が祀られてい
る。一般の信仰が厚い。
4. 六弘法寺
小さいが构造なりわ寺であった。真言宗、原爆の際
倒壊。但し火災は起らなかつた。
5. 放射線科の台所パラックの所在地で、私(調)は
8月9日の夜ここで一夜を過した。
6. 角屋字長及び高木附属医専部長が9日夜野宿され
たところ。
7. 保健婦養生所
古い木造建物、原爆発後間もなく発火炎上。
8. 外来本館前の坂道
この坂道には人、馬などの死体が無数に見られ
た。
9. 外来本館: コンクリート建、地下1階、地上
3階、全焼。
10. 内科病棟: 地下1階、地上3階
11. 耳鼻咽喉科病棟: 2階
12. 外科病棟: 3階
13. 産婦人科病棟: 3階
14. 北講堂: 階段教室
15. 小児科病棟: 2階
16. 眼科病棟: 2階
17. 精神科病棟: 2階
18. 皮膚泌尿器科病棟: 2階
19. 高北(伝染病棟): 2階
20. 高南(結核病棟): 地下1階、地上2階
21. 産婆婦寄宿舎: 木造2階
22. 産婦人科手術室: 2階
23. 古屋野外科手術室: 2階
24. 調外科手術室: 2階
25. 南講堂: 1階平面、2階蔵段
26. 清理部: 2階
27. 亮體室: 2階

本誌の刊行に当たつて

長崎大学医学部長

土 山 秀 夫

旧長崎医科大学原爆犠牲学徒遺族会々長

長崎大学名誉教授 調 来 助

偶 感

昭和二十年八月九日、ここ長崎の地に原子爆弾が投下されてから、今年で被爆四十周年を迎えることとなりました。

このひとつの筋目ともいうべき年に、本学としても、何か記録めいたものを後の世代に残して置くべきではないかと考えました。幸い本学関係の

被爆記録としては、長崎大学名誉教授の調来助先生の大変な御努力によつて、これまで「忘れな草」（全六冊）として、被爆者の方々の証言集が立派に刊行されています。そこで今回は若干視点を変えて、御遺族の皆様に、原爆のために亡くなられた肉親にまつわる思い出話や、故人の面影を胸に懐きつつ生き抜いてこられた、戦後四十年の御感想などを、書いていただくことにしては如何かと考えました。

調先生に御相談申し上げましたところ、先生もこの趣旨に御賛同下さり、全面的な御支援を賜わることができました。副題として「忘れな草」の名を付けさせていただきましたのも、こうした理由に他なりません。そして当時の学徒関係の御遺族につきましては調先生に御担当いただき、本学教職員、事務職員、及び看護婦の御遺族につきましては、私共医学部が分担して玉稿をお寄せ願いました。

私共はここに盛られました一編一編に、御遺族の皆様の切々たるお気持ちと、永遠の平和を祈られる御熱意の程を感じる思いがいたします。この記録が今後末永く本学の書庫に収められ、後輩へのよき語り継ぎとなることを信じて疑いません。

最後に、改めて御遺族の皆様の今後の御健勝をお祈り申し上げます。

私も徒らに馬齢を重ね、今年八十六才になりましたので、今回が最後の思い出となりましょう。皆様の御健祥をお祈り致します。

風化するかと思われた原爆問題が、被爆四十周年を迎えて、又盛んに論議されるようになりました。それは原爆の恐ろしさが、一般の人にもよく解つて来たからであります。

長崎に投下された小さな原爆でも、数万人の民衆を一瞬のうちに斃し、数十万人の人体に障害を与え、しかもその悪い影響が子孫にまで及ぶとされています。今では昔の原爆より百倍も千倍も威力のある原爆や水爆が作られているそうですから、もしそのようない強力な核兵器が無制限に使用されたら、全人類が破滅に陥るばかりでなく、地球上の生物がことごとく死滅するであります。世界中の人が恐れるのは、全くそのためであります。

長崎医学同窓会では、昭和三十年に「追憶」という証言集を発行し、我が遺族会でも四十三年から五十二年までの九年間に、六冊の「忘れな草」を刊行しましたが、この度は両方の会が一緒になって、大学全体の遺族の皆様から手記を集め、「被爆四十周年記念号」として発刊することに致しました。

この小冊子が永く後世に伝えられ、二度とこのような悲惨な災禍が起らないように防止することが出来ましたら、私共としても此上の喜びはありません。

私も徒らに馬齢を重ね、今年八十六才になりましたので、今回が最後の思い出となりましょう。皆様の御健祥をお祈り致します。

旧長崎医科技大学

原爆犠牲学徒遺族会の今昔

遺族会々長 調 来 助

報 告 書

した。

この遺族会は終戦後間もなく、初代会長の鍬先清太郎様によつて結成されたが、会員の名簿もなく、ただ八月九日の原爆記念日に、医学部長主宰の慰靈祭に参加するだけで、別に遺族会独自の事業は行われていなかつた。

昭和三十一年に鍬先会長が他界され、その後を吉村安雄様が繼がれた頃から、遺族援護の問題が討議されるようになり、三十三年に動員学徒の遺族に年金が支給されるようになつてからは、本会の会員達も、長崎医大の原爆犠牲学徒が無視されているのを不服とし、三十七年の慰靈祭の折の遺族懇談会で、犠牲学徒の靖国神社合祀と、遺族援護法の適用を政府に請願することを決議した。その頃私は大学教授の現職にあつたので、請願運動に参加出来ず、遺族名簿の整備を担当し、第一回の陳情が同年十二月に、吉村、滝川、田吉、大楠の四理事によつて行われたのである。

私は四十年三月に大学教授を定年退官したので、四十一年に推されて遺族会々長に就任し、その後は請願運動にも参加したが、なかなか目的を達することが出来なかつたので、七人の役員と相図つて、犠牲者八九二名の「銅版名牌」を作つたり、「原爆思い出の手記集、忘れな草」を出版したり、併せて援護法適用の請願運動を行い、昭和四十九年にはばその目的を達成することが出来たのである。

私が遺族会の会長に就任した初期の頃の経過については、昭和四十二年六月十二日に印刷配布した「報告書」に詳しく書かれているので、これは「忘れな草」第一号の第五頁にも記載したが、新たに此に再録することと

爽やかだつた初夏も過ぎ、日中は真夏のような暑さを覚える今日この頃でございますが、皆様には恙なく健やかにお過ごしでございましようか。お伺い申し上げます。

扱て、皆様もすでに新聞やテレビで御承知のこととは存じますが、私共長崎在住の遺族達が多年に亘つて続けて参りました請願運動が漸く実を結び、去る二月二十七日、長崎医大の原爆犠牲学徒（医大、医専、薬専を含む）の遺族に対しても、昭和四十二年度の文部省予算からそれぞれ七万円宛の見舞金を下付されることが決定し、併せて犠牲学徒の靖国神社合祀のこともほぼ確実となりました。まことに慶運の至りに存じます。

顧りみますと、以上のような成果があがるまでには幾多の迂余曲折があつて、本県選出の国会議員の方々には一方ならぬ御尽力を辱うしましたので、ここに甚深の謝意を表すると共に、これまでの経過を簡単に御報告申し上げたいと思います。

「長崎医科技大学原爆犠牲学徒遺族会」が初めて結成されたのは終戦後間もない頃のことで、初代会長の鍬先清太郎様には時局混乱の折にも拘らず種々お骨折り載きましたが、三十一年七月九日に御逝去の後は、吉村安雄様が事務を引継がれ、吉村様の御老後は調が代つて理事長となり今日に至つております。

毎年八月九日の原爆記念日が参りますと、長崎大学医学部で原爆犠牲者の慰靈祭がおこなわれますが、その日は必ずグビロが丘にある慰靈碑の前に遺族一同が集まつて、十一時二分のサイレンを合図に敬虔な黙悼をささげ、それがすむと、同窓会館二階の会議室にくつろいで、当時の思い出話な

どかわしつつ、互いに慰め合うのが慣例となつております。

ところが三十三年の慰靈祭では、わが国に國家総動員法による犠牲学徒の慰靈措置が制定されたにも拘らず、長崎医大の学生はその選に洩れて、何等の恩典にも浴しなかつたことが問題となり、一同はやるせない不満を叫びながら、悲嘆にくれたのであります。

その頃から二、三の遺族の間に、彼等が死に終わらぬよう政府に陣情したいという気運が昂まり、三十七年の慰靈祭では、全遺族が一丸となり、せめて靖國神社合祀だけでも請願しようということに衆議が一決致しました。それでこれを実行するために、調は遺族名簿の整備を担当し、田吉その他は起草委員となつて一切の関係書類を作り、同年十二月、吉村、滝川、田吉、大楠の四人が上京して、国会及び衆參両議長に請願書を提出し、更に倉成代議士の御斡旋によつて、靖國神社にも合祀の件を懇願しましたが、長崎医大の学生は本質的に出征学徒や勤員学徒と異つてゐるという政府当局の見解により、遺憾ながら取り上げて貰えず、一同は涙をのんで帰郷のやむなきに至つたのであります。

その後中沢元医学部長や後藤前医学部長からも度々文部省並びに厚生省

に対し折衝を重ねて載きましたが、どうしても解決の糸口をつかむことが出来ず、三十八年の慰靈祭の日には、倉成代議士から懇々と本件の難しさについてお話を承つた次第であります。

しかしその後も私は本件を寸時も忘れることなく、三十八年十二月にも全遺族の陳情署名などを集めて再度請願書を提出致しましたが、矢張り効果はありませんでした。

ところが四十年四月以降は、自民、社会両党代議士の超党派的運動を導くこととなり、併せて杉本長崎原爆遺族会長、長崎県援護課長、長崎市民生部長の方々の援助もあって、四十一年一月及び三月の陣情（医大の学生遺族会からは滝川、田吉、大楠等が参加）が効を奏したためか、五月

には文部省から調査官が長崎に来られ、つぶさに当時の状況を調査されることとなりました。

それでもなお事態はなかなか好転せず、全く予断を許さない状態でありますので、失礼とは思いましたが、四十一年夏の慰靈祭の際にお集まりの遺族の方々に御相談申し上げ、請願運動強化のため一口千円宛の御寄付を仰ぐこととなり、昨年八月遠隔地の方々にも、その趣意書をお送りした次第であります。

幸に皆様の御賛同を得て寄付金が次々に集まりましたので、昨年八月下旬（調、田吉、大楠、有富）、十二月上旬（滝川、蒲原、大楠、有富）、本年二月下旬（調、滝川、田吉、大楠、）など頻繁に上京して陣情することが出来、前にも申し上げたように、芽出度く初志を貫徹することが出来たのであります。

この間衆議院の倉成、田口、中村、西岡各議員の方々、参議院の久保議員、厚生省援護局並びに文部省大学々術局の方々、その他地元では県、市の関係当局の方々や杉本亀吉様方に一方ならぬ温かい御援助を載きました。以上の皆様には心から感謝申し上げたいと思います。

以上が見舞金下付決定に到るまでの経過で、当地の遺族の方々には去る三月二十一日に原爆福社会館にお集まりいただき、一応詳しく述べましたが、遠隔地の方々には遺族会名簿を一緒に届けしたいと思ってゐるうちに、次々に新しい遺族が判明したためつい遅延致しました。どうか悪しからず御諒承のほどお願い申し上げます。

尚、私共長崎在住の遺族達は、唯今長崎大学医学部と提携して、原爆の犠牲となられた医大職員並びに学生達八百七十余名の氏名を真鍮板に刻んで、慰靈碑の傍に建立することを計画しております。名前は既に五月末に調が真鍮板に書き上げましたので、唯今松岡国一樣が昼夜兼行で彫刻中であります。七月二十日頃には完了するそうでありますから、至急取付工事

をすませ、八月九日の慰靈祭の日には、医学部主催で盛大な除幕式を挙行致したいと考えております。その節は是非お参り下さいますよう切にお願い申し上げます。

以上甚だ遅延して申訳ございませんが、御報告を兼ね、近況をお知らせ申し上げます。

昭和四十二年六月十五日

長崎医科大学原爆犠牲者徒遺族会

理事長	調	来	助
理 事	吉	村	安
同	滝	川	雄
同	蒲	原	勝
同	鉢	田	大
同	富	楠	吉
同	玉	琴	アサキ
同	与	子	エ

「忘れな草」の出版

銅板名碑建立の際に、遺族の方々から寄せられた寄付金に余剰を生じたので、私は遺族の皆様から原爆思い出の手記を書いて頂き、これを集めて小冊子を出版することとした。

私はその小冊子を「忘れな草」と命名したが、漢字で書けば「勿忘草」、英語では forget-me-not、新版世界大百科事典を翻くと、この草は春から夏にかけて藍青の可愛らしい花をつけ、花言葉は「眞の愛」とのことである。原爆の犠牲となつた我が子、我が兄弟を忘れず、眞の愛の心をもつて永く冥福を祈るという意味で命名したと思う。

「忘れな草」は、私（調）が編集を担当し、私の家（長崎市本原町一一一九）にある「旧長崎医科大学犠牲者徒遺族会」から発行することとした。「忘れな草」の本来の使命は、原爆に対する一般の認識を深めるため、愛児を亡くされた御両親の悲壯な思い出を書いて頂くことにつながったが、併せて当時の長崎医大の学生達が、どんな状態で原爆の犠牲になつた

理事滝川勝様の御令嬢一人によつて幕が降ろされた。遺族達は恭しく礼拝し、焼香を終わつた後、我が子や我が兄弟の名を探し求めて、皆喜びの顔をほころばせていた。

その後、この銅板名碑は医学部長室に運ばれ、布で覆われて台上に安置され、慰靈祭の日だけグビロケ丘の慰靈碑の前に掲げられていたが、四十四年十一月五日の教授会で、安置場所が決定し、それ以来、原爆記念講堂のロビーの壁に嵌め込んで、永久に安置されることとなつた。

原爆犠牲者の数は、初めは八七四名であったが、その後次々に新しい犠牲者が判明して、今では八九二名となり、その都度、松岡国一氏を煩わしに追加彫刻して貰い、今日に至つてゐる。

政府への陣情がなかなか奏効しないので、いろいろ悩んでいた時、私はふとロンドンのイートン学校で見た戦死者の銅板掲示の事を思い出した。犠牲学徒の名を銅板に刻んで学内に安置したら、遺族の方々もきっと喜ばれると思い、永井元君の教示に従つて、横二メートル、縦一メートルの銅板（実は真鍮板）に、私が原爆犠牲者八七四名の名前を墨で書き、それを松岡国一氏が彫刻して、四十二年の慰靈祭の間に合うように、見事に完成させることが出来た。

この名碑の除幕式は、昭和四十二年八月九日の慰靈祭の日に行われた。名碑をグビロケ丘の慰靈碑の前に掲げ、午前十一時一分を期して、遺族会

かを、政府当局の方々にも知つて頂くように心がけ、それを遺族達に報告することとした。

以上の目的を果たすために、私は色々の資料を集め、一回だけ発行する予定であったが、各方面に多大の好評を博し、手記の寄稿が後を絶たなかつたので、昭和四十三年から五十二年までの九年間に、六冊を発行するに至つた。従つてこれが第七号に該当する。

第一号 昭和四十三年四月十五日発行 一五七頁。

この「忘れな草」はこれだけで済ます積もりだったので、第一号とは書いていない。顔写真は教授だけで、遺族の思い出の手記は二六〇編、被爆生存者の手記が五編ある。

この第一号の特徴としては、当時生き残りの学生が書いた学部連絡簿二冊、医專連絡簿二冊、遭難顛末調査書（学部及び医專各三冊）、職員連絡簿一冊等によつて、全死亡者の被爆場所とその後の経過が略記されていることである。

第二号 昭和四十四年一月十五日発行、二〇〇頁。

この第二号は、第一号発行後に寄せられた手記を出版したもので、従つて遺族の手記は一五編の小数に過ぎない。

この号には、長崎新聞に載つた「忘れな草」の書評、社会労働委員会で中村重光代議士が厚生省の実本援護局長と討論された会議録、大楠理事及び田吉理事の上京陳情記等が掲載されている。

第三号 昭和四十四年三月二十日発行、二八〇頁。

この第三号は被爆犠牲者の二十五回忌にあたるので、特に遺族に呼びかけ、故人の顔写真と遺稿を掲載するのを主眼として、手記を集めることとした。この事は意外に好評を博して、二七六枚の顔写真と一四〇件の遺稿・

遺品が集まつた。遺稿の大半は、故人が生前に出された手紙やハガキであつたが、中には遺言が七通あり、皆邦國の為に戦死を期して書かれたもの

で、涙なくしては読まれぬものばかりであった。

この第三号には、遺族の手記が三〇一編、被爆生存者の手記が二五編掲載されているが、特集としては、故村田直輝氏（医学部仮卒業の村田千秋君の父上）の「原爆受難の追憶」、私の「原爆遭難記」（追憶より転載）、小杉正義君の「燃ゆる火」、「名古屋市で催された小遺族懇親会」等がある。その他「戦時中の日記」が、医專一年生で爆死した秋口明海君と私の日記から転載してあるが、これも当時の模様がよく想像されて、興味があると思う。

第四号 昭和四十六年十二月三十一日発行、二〇〇頁。

第三号に間に合わなかつた遺族の手記と、故人の顔写真及び遺稿等をこの号に収めた。副題も第三号と同じく「原爆思い出の手記と故人の遺稿集」とした。

この号には遺族の手記が二〇一編、被爆生存者の手記が二〇編あり、故人の顔写真は五九、遺稿が四〇件記載されている。特別記事としては、政府への陣情資料として、「長崎医大報国団報」及び「忘れな草第三号」から抜草した記事のほか、「戦時に発布された医学生関係の文部省通牒」などが掲載されており、その他私が当時書いていた「原爆被爆直後の日記断片」、「長崎原爆灾害の回顧」、「老齢遺族の現状調査」、山本雅文君の「調臨時救護所での思い出」、「久留米地区遺族の集いの記」などがある。

以上のうち、「戦時に発布された文部省の通牒」は、長崎大学の書類が原爆で全部焼失したので、私が九大医学部の事務室に赴き、文書を借りて書き写して來たもので、政府への請願の際は、大変役に立つたようである。

第五号 昭和四十九年五月三十一日発行、一九六頁。

昭和四十七年五月に、台湾の林忠実君（昭和十六年長崎医大卒、産婦人科

教室に勤務中に被爆し、台湾に帰郷）から手紙を受取つた。原爆で死亡した台湾人医大学生十一名、医局員四名、合計十五名の追悼会を行うから来て欲しいとの事であつた。

追悼会は十一月五日挙行とのことで、大学からは遺族会長の私のほか、医学部長の佐藤純一郎教授、付属病院長の近藤厚教授、その他同行希望の辻泰邦教授、松田源治教授、以上五名が四日に台北に飛び、五日午後三時から臨済護国禪寺で、「長崎医薬台湾同学会」主催の下に追悼会を行い、次で台湾北部同学会員及び遺族によつて催された晩餐会に列席した。

その後十日間、我々は高雄、台南、台中、嘉義、彰化、花蓮、烏來等を歴訪し、高雄では南部同学会、嘉義では中部同学会の招宴にも参加した。

以上の台湾人学生追悼会の事もあり、なお遺族の思い出の手記ばかりでなく、被爆生存者の体験記も必要だと言う人もあつたので、第五号の出版に踏み切つた。この号には六十六人の寄稿者があり、特別記事としては、前記の「台湾人原爆犠牲学徒の追悼会」のほか、「原爆当時の在学生」、「付属医専の廃校と在学生の転校」、「学部四年生の卒業試験日程表」等がある。

第六号 昭和五十二年八月三十一日発行、二二頁。

第五号を最終編としたので、この「忘れな草」には号数の表示はない。

昭和五十三年が満三十三年に当たるので、その前年のお盆を三十三回忌として、年老いた遺族たちの手記を集めることとした。従つて副題は「三十三回忌記念手記集」となつてゐる。

原爆から三十年余り経過したので、犠牲学徒の両親の中には他界された方が多く、寄稿者は四十三人の少数に過ぎなかつた。

遺族援護法適用の請願運動

戦時に当時の中学生には学徒動員令が発令され、動員学徒の原爆死亡者に対しても、昭和三十三年からその親に遺族給与金（年金）が下附されることとなつたが、長崎医大の原爆犠牲学徒に対しては、その適用がなかつたので、三十七年八月九日の遺族懇談会で、請願運動を開始することを決議し、第一回の陳情を同年十二月に行つた（吉村、滝川、田吉、大楠、以上四人の理事）。私は医大教授の現役だったので、遺族名簿の整備を担当した。

三十八年には遺族から署名を集め、同年十二月にこれを政府に提出して遺族援護を懇願したが、何等の効果もなかつた。然し四十年四月以降は、長崎県選出の自民、社会両党の代議士万の超党派的援助もあつて、再び陳情を再開することとなり、四十一年一月及び三月には、滝川、田吉、大楠の三理事が、県遺族会の運動に参加して陳情を行つた。（第二、第三回陳情）。

四十一年四月以来、私が会長に就任してからは、遺族の皆様の資金援助によつて、請願運動を強化することとなり、私の日記によると、次のように上京陳情が行われてゐる。

- 【第四回】昭和四十一年 八月下旬（調、滝川、田吉、大楠、）
- 【第五回】同 年十二月上旬（滝川、田吉、大楠、有富、）
- 【第六回】昭和四十二年 二月下旬（調、滝川、田吉、大楠、）
- 【第七回】同 年 五月中旬（滝川、田吉、大楠、）
- 【第八回】同 年 十月中旬（調、滝川、田吉、大楠、）
- 【第九回】昭和四十三年 十月上旬（調、田吉、）
- 【第十回】昭和四十四年 八月下旬（調、滝川、田吉、大楠、）
- 【第十五回】昭和四十五年十月下旬（調、滝川、田吉、大楠、）

この時は遺族の一人江口虎三郎氏（医大二年で爆死した江口宏君の父上、元長大付属薬専の校長）も我々と一緒に陳情された。

【第十二回】 四十六年十一月中旬（調、滝川、田吉、大楠、）

いつも我々だけでは陳情の効果がないので、東京在住の遺族に応援をお願いしたところ、丸田千代吉氏（医学一年で被爆した丸田修造君の父上）の親子、小坂健造氏（医大一年小坂光毅君の父上）、青木勇氏（医專一年青木昭三君の父上）たちが参加応援された。田口参議院議員とは長時間色々お話しし、その後中村援護局長とも会つたが、両者の間がうまく行けば何となるだろうという気がした。

【第十三回】 昭和四十八年二月二十七日（調、田吉、大楠、）

上京の途中、大阪で田中澄江女史に面会、親交のある佐藤栄作総理夫人を紹介され、名刺まで頂戴したが、東京ではお会い出来なかつた。然し議員会館では、大勢の議員に面談出来、収穫は大きいように思われた。

同年四月十一日に中村重光代議士から電話がかかり、明るい希望が持てそうに思われた。

【第十四回】 昭和四十八年十二月四、五日（調、田吉、大楠、）

今日は西大由氏（医專一年西大雲君の兄上）が援助され、四人で陳情を行つた。四日夕方中村重光議員から、福田蔵相に会うからすぐ来いとの電話があり、行くと、中村議員は蔵相に我々の立場をよくお話をされ、蔵相も理解されたとみえて、大楠さんの肩を叩いたり、皆と握手などされた。我々はホッとした気持ちでホテルに帰つた。

* * *

陳情に行つたのは以上十四回だつたが、その甲斐あつて、

(1) 昭和四十二年十月二十八日には、犠牲学徒の遺族全体に七万円ずつの見舞金が下付され、それは主として倉成代議士の御尽力によるものと思われた。

(2) 昭和四十五年一月二十六日には、原爆で亡くなつた看護婦生徒諸嬢の遺族にも、同じく七万円ずつの見舞金が下付されたが、これも倉成代議士の御尽力によるものであつた。

(3) 昭和四十八年十二月二十七日には、中村重光議員からお電話があり、我々の念願だつた原爆死亡学生の親への遺族給与金（年金）の下付が決定したことであつた。これを聞いた時私は涙の出る程嬉しく、つい泣き声になつたと、私の日記には書かれている。中村代議士も必死だつたとみえて、三度続けて電話があつた。一度目は決定のお知らせ、二度目は公示が未だだからお札の電報は差し控えよとのこと、三度目は公示が済んだからもう打電してもよいとの事、私はすぐに役員達に電話で知らせ、東京でお世話になつた方々へは、お札の電報を打つたり、謝状を出したりした。年金と同時に遺族全員に弔慰金（五万円）も出るので、日記によると、弔慰金を戴いた者は、学生遺族四六八名、看護婦生徒遺族五七名、合計五二五名。年金を戴かれる方は、学生遺族三一七名、看護婦生徒遺族四一名、合計三五八名の見込み、と書かれている。

当時はこの様に多数だつたと思われるが、今では他界された方が多いので、実数はその何分の一になつてゐるか、私には判らない。然し年老いてもお小遣いに困らないので有難い、と感謝しておられる方のあることは確かである。

旧長崎医科大学原爆犠牲学徒の叙勲

原爆の犠牲となつた旧長崎医科大学の学生は、畏れ多くも、昭和五一

年七月七日付で勲八等に叙せられ、瑞宝章の勲章を授与された。年若

い学生としては誠に光榮の至りである。

この度の「忘れな草」でも、数名の遺族の方がこの事に言及され、大

変恐縮に思つておられるが、当時十六才の医専一年だった私の息子も、県庁を通して勲記と勲章をいただき、今、我が家家の家宝として、座敷の欄間に掲げられている。

昭和六十年の慰靈祭

今年も恒例によつて八月九日に、我が長崎大学原爆犠牲者の慰靈祭が、学内の原爆記念講堂で施行された。以前は慰靈碑の建つてゐるグビロが丘にテントを張り、碑の前に整列して、十一時二分のサイレンを合図に黙祷を捧げ、医学部長と遺族会長の挨拶の後、各自焼香を行うのを例としていたが、遺族の方が高齢となられ、丘に登るのがお苦しいように見受けられたので、昭和五十六年からは、原爆記念講堂内に祭壇を設け（口絵写真1）、階段になつてゐる座席に腰かけて、式に参列することとした（写真6）。

今年は被爆四十周年の節目に当るので、マスコミの宣伝が盛んで、世界中の人が核廃絶の叫びを挙げ、参列者の数も倍増することが想像された。しかし台風八号が五島沖を北上したためか、早朝から風雨が烈しく、生憎の悪天候だったので、遺族の集りはどうかと気遣われたにも拘らず、講堂は満員で、壁際に立つてゐる人も多く、また会場に入れないのでロビーやから拝んでいる人も少くなかった。

参列者は長崎市内や県内の人々が大部分を占めていたが、近くの佐賀県や福岡県から来られた人も多く、遠くは熊本、大分、宮崎、鹿児島の各县からの来拝者もあり、中でも目立つたのは、御老体の今村源一郎先生が、鹿児島から十数人の御一族を引率して出席されたことで、地下に眠る今村義徳君（医専一年）も定めて喜ばれたことと思う。

最も嬉しかったのは、故角尾学長の御遺族（長女の田中綏子様と次男の角尾秀夫様）が、はるばる東京から御参拝いただいたことである。学長は改めて云うまでもなく、戦時中長崎医大の全責任を一身に背負われ、原爆で重傷を負われた時は、ただ医大の将来だけを憂慮しながら遂に不帰の客となられた。真に偉大な方であった。この度御遺族の方が遠路来拝されたのを見ても、学長が今も尚長崎大学の行く末を温かく見守つておられるように、私には思われたのである。

この慰靈祭でも、顔見知りの御老人を数人見受けたが、その数が年毎に減つてゆくのは、誠に淋しい気がする。しかし考えてみると、あれから四十年経過しているから、二十才だった学生も生きていれば六十才になつており、その御両親が他界されたり、老衰のために出席できないのは、無理もないと思う。今年は例年になく炎暑が厳しいので、どうかくれぐれも御自愛下さるよう、御健祥をお祈りする次第である。

今年の記念事業の一つとして、参列者全員の記念写真をとることとした。生憎の雨で、屋外撮影が出来なかつたので、講堂のロビーで二回に分けて撮影した（写真10、11）。汽車の都合などで早く帰られた方もあるので、総数は一枚の写真を合せた数の二倍はあつたと思われる。

撮影がすむと、例によつて同窓会館の二階で、遺族懇談会を催した。今年も社会党代議士の中村重光先生から御懇切なお話があり、我々遺族達は大いに意を強くすることが出来た。尚、遺族会役員の田吉チエ様からも、医大学生らしい無名の遺体が、四十年を経た今日、穴弘法寺に手厚く葬むられたというお話をあつて、十二時過ぎに一同解散した。

（六〇、八、二〇）



原爆死亡職員並に学生の遺族の手記

一、教官遺族の手記

第一内科教授・学長 角尾 晋

遺族 東京都台東区谷中五一一一四 角尾道夫（長男）

長崎に原爆が投下された時は、私は日本医科大学に在学中だった。父は昭和十二年に長崎医科大学の学長に就任したが、その後は二ヶ月に一回の割で上京していた。定宿は東京駅のステーションホテルである。然し、五月末の空襲で東京駅が罹災したので、八月初旬に上京した際は、初めて学生時代を過ごした祖父の開業していた家に泊ることになった。当時谷中の家には、叔母夫婦（共に故人）、故滋叔父と私が住んでいた。

国民服に、戦闘帽、ゲートルを巻き、鉄兜の入つたりュックサックを背負つた父の姿は、当時の日本人の旅行スタイルであった。後に昭和大学長になつた滋叔父は、叔母と子供達の疎開先の大分に出掛けていた。サイパンから飛んでも来るB29は、降伏勧告のビラを空中から散布していた。敗戦は確定的で、その時期だけが問題であった。たまたま敵が上陸して来たらどうなるのか、という話題が出た時に、叔母は、自決するしかない、というような意味のことを云つた。父は、たとえ日本が降伏しても、人は生きて行かねばならぬ、と答えた。第一次大戦後のベルリンに留学して、つぶさにドイツの生活とその復興振りを見た父は、実感としてそう思っていたのだろう。国家の興亡がめまぐるしいヨーロッパに住む人と、島国で敵の侵略を受けたことのなかづた日本人との違いだったかも知れない。

父は、在京中、腹痛と下痢を訴えていたので、叔母が癒るまでいたら、と云つたが、八日は大詔奉戴日だから大学に帰らねばならぬ、と云つて五日に東京を発つた。私も東京駅まで見送りにいった。途中、広島の原爆投下の跡地をトラックで通り、七日に帰宅して、八日に学生と職員に、広島の惨状を話したの

ことである。九日、長崎にも広島と同型の爆弾が投下されたことを知つたが、家族の安否は全く不明であった。

十五日の敗戦後、一日も早く帰ろうと思つたが、切符が手に入らない。そのうち、父死亡の電報を受取つた。やつと八月末になつて、東大第二工学部の学生だつた弟の秀夫が、勤労動員解除の通知を手に入れ、田端駅で長崎行の二枚の切符を買つた。無秩序極まりない車中で、慘々な目にあい、汽車を乗り継いで長崎に着いたのは、九月一日だつた。

父は大学構内で茶毬に付されていたが、亡母（昭和五十八年十一月六日逝去）の話によると、大学のことだけを心配して亡くなつたそうで、誠に父らしい。定められた人生を急速やに生き、やれるだけのことをやり、愛する大学と、その学生・職員と死を共にした父は、全く幸せだと思う。合掌

病理学教授 梅田 薫

遺族 東京都東久留米市学園町二一一六一七 梅田花枝（妻）

御無沙汰いたして居りますが、お變りもなくお過ごしのことと存じます。先日はお手紙頂きましたが、お變りもなくお過ごしのことと存じます。先してお便りをいただき、本当に感無量でござります。私にはまだつい先頃の事のように思われているのですが、もう四十年も過ぎたのでござりますね。

昨年四月に、長男と長女夫婦と四人で、十五年ぶりに長崎大学に行きました。被爆者の名前の刻まれている銅板にお参りいたしました。あんなに大勢の名前を一人一人お読みになるのは、よほど大変な事でございましたでしょうと、厚く御礼申し上げます。

十五年ぶりに見る大学の構内は、すっかりきれいに整頓され、見覚えのある所も無くなり、迷つてしまいそうでしたが、グビロが丘は昔のままで、痛ましいけれど懐かしい思い出の地となりました。私も七十七才になり、これが最後でもう一度と来られないでしようと、ゆっくりお参りさせて頂きました。

それから、当時子供達と疎開していた大草駅で下車し、伊木力村（今は多良見町）の岩崎さんを、二十年ぶりにお訪ねいたしました。息子さん御夫婦にお目にかかり、長女や長男は幼い時の事を思い出して感無量のようでした。四十年と一口に申しますが、本当に長い月日だと思います。特に私共のように、大切な父を一瞬に失った家庭にとっては、苦しい長い年月でした。あの時医大で亡くなられた沢山な医学生は、今健在ならば還暦を迎える年頃で、働き盛りの立派な医学者達でございましょう。

私の家の幼かつた三人の子供達も、それぞれ一家の主婦となり、大黒柱となつて、日夜働いて居ります。孫達も男子五人、女子一人で、既に結婚した孫も居ります。

この孫達は戦争の悲惨さを何も知らず、物質のありあまる今の日本を、あたり前と思つて暮らしています。私は時々、「これでいいのか知ら、戦争の苦しみを一番よく知つてゐる者が、その恐ろしさを教えなければならない」と責任を感じます。私は残り少し生命を、悔いの無いように過ごしたいと念じております。先生もどうぞお体にお気をつけてお仕事をなさいますように、お願ひ致します。

(六〇、四、三)

* * *

亡き夫の写真は、いつも座敷の隅の棚の上から、顕微鏡を前にした白衣姿で、こちらを向いています。見る度に何と若々しくて、ファイトにあふれているのだろうと感じてしまいます。その筈です。四十年も前の彼の面影ですから。それに比べて、この私の老い方はどうでしよう。歯は殆ど抜けてしまつて、顔は梅干のように皺が寄り、人一倍良かつた眼もうすくなり、物がはつきり見えなくなつてしましました。「あなたはいつ迄も若くていいですね。本当に羨しい。早く死ぬ人は得ですね。」と思わず云つてしまします。

三才、八才、十五才、三十七才、これは四十年前に夫が一瞬にして私の前から消えてしまった時の、私に残された子供達と私の年令です。あれから四十年

間、すべて無事平穏であつたわけではありませんが、十五才だった長女は、私の片腕になつて、私が意氣消沈している時に励ましてくれましたし、八才だった次女は、私が働いている間、幼い弟の面倒をよく見て助けてくれました。私が無事でここまで来られたのは二人の娘のお陰と、つくづく感謝しています。彼女達は二人共、それぞれ医業を職とする人と結ばれて、良い家庭の主婦であり、子供も三人づつ恵まれて、おじいちゃんが生きておられたら、どんなに喜んで下さるだらうと想像しています。

亡夫が一番心にかけていたと思われる、当時三才の幼児だった長男も、見えない大きな力に助けられて成長し、今は我家の大黒柱として日夜健闘しています。二人の男児を与えられ、暖かい家庭を営み、私と共に暮して、私の老後を見守つてくれています。

それにもしても、戦争とは何と残酷なものであります。中国の残留孤児の事など、他人事とは思えず、本当に心が痛みます。

昨年四月に長男と長女夫婦と四人で、十五年ぶりに長崎大学を訪れ、初めて銅板に刻まれた夫の名前を確かめました。調先生が一つ一つ御自分でお書きくださつたと伺つて、大変なお仕事をして頂いたことを感謝致します。

すっかり変つてしまつた大学の構内を歩いて、グビロが丘の慰靈碑にお参りいたしました。私は七十七才です。多分これが最後の訪問になるでしょうといい、後髪をひかれる思いで大学を去りました。

四十年前に、二十才前後の春秋に富む身を、戦争の為に失われた沢山の方々にも、今日生きておられたら還暦を迎えられ、世のため人のために、医業に尽くされている事でしよう。思えば残念な事です。志半ばにして亡くなられた方々の御冥福を、心からお祈り致します。

(六〇、四、一一)

父の思い出

横田洋子（次女）

テレビ・ニュースの時間に、各地からの便りとして、長崎の様子が伝えられる。それは季節ごとの便りだつたり、祭りの便りだつたり、又人の営みの便り

だつたりする。その度毎に、私はテレビの画像見たさにとんで行く。長崎と聞いただけで、見たい、知りたいという思いが湧きあがる。それらの放送の中でも、一番名状しがたい思いになるのが、八月九日のテレビの映像だ。

私は当時八才であった。父一人を大学に残して、家族は大草に疎開していた。そしてあの日、父は学生に講義中の姿のまま亡くなつた。私と弟は、幼いからと云う母の配慮によつて、被爆した長崎を見ることなくこちらへ帰つて来た。後で写真や映像によつて、あの日の長崎を知る以外、私は知らない。母から聞く惨状から想像するのみである。私が通つていた城山小学校も、先生や生徒の殆どが犠牲になつたと聞く。あの頃の仲良しの友たちは、いつまで経つても幼い姿で、記憶の中によみがえる。

八年前に、県立高女の三十三回忌に出席する姉のお伴で、あの時以来はじめ長崎へ出掛けた。そして、姉の友人のご好意で、市内を案内していただきた。城山小学校や、校門への坂道、周りの木々、私たちの住居があつた浜口町の跡、市電通りからの長い坂道、あそこにも、ここにも幼い友たちがー。また、ローセキでかいた石けりの跡が、浮んで来るようと思われた。

あの日から四十年の歳月がたつ。私の二人の子供達も成人し、それぞれが与えられた處にあって、元気に励んでいる。この四十年間、日本において平和が保たれ、繁栄がもたらされた背後には、広島、長崎の原爆による多くの犠牲があつたからではないだろうか。そのことの意味は、はかり知れない程大きい。今や地球上のすべての生物を、數十回も破壊しつくす程の凄まじい威力をもつた核兵器に、私たちは取囲まれている。一たび戦争が起これば、この地球上の大廻庫に火をつけずには置かないだろう。決して、核を権力闘争の道具として使つてはならない。

平和の尊さが風化しつつある時、右手で天を指さして原爆の脅威を示し、左手を水平に伸して地の平和を願い、まぶたをとじて祈るあの浦上の丘に立つ、北村西望の平和祈念像を思うのである。

真の平和は、それを願う一人一人の心の中から生まれる。テレビの伝える長崎の映像を見る時、私は思うのである。
(六〇、四、一〇)

薬理学教授 祖父江 勘文

遺族 東京都練馬区石神井町六一八一六 祖父江 辰子(妻)
ごぶさた御許し下さいませ。御年賀を頂きながら、とうとう今日まで過ごしましたこと、深く御詫び申し上げます。

体調が悪く、それに不幸が有りまして、何かととりまぎれ、今頃の御返し状となつてしましました。暖かくなりましたら、歩く練習をと思っておりますが、どうなりますことやら……。(後略)
(六〇、三、一八)

影浦内科助教授 菊野 晴二郎

遺族 広島市佐伯区五日市町中地池田地九〇三 菊野 美代子(妻)
世界で二番目に投下された原子爆弾という恐ろしい兵器で、人生を大きく変えさせられまして、四十年の歳月が流れました。

あの頃の長崎大学を中心に生活して居られました方々は、その後いかがお過ごしかと、時々懐古の想いにひたつて居ります。

此度、土山医学部長先生より、四十周年追憶誌刊行のお知らせをうけ、拙い筆をとりましたわけでございます。

主人晴二郎の亡くなりました昭和二十年には、この七十才近くになりました私も、エンジの羽織や紫の着物の似合う二十才代で、その頃の自分自身の姿を思ふと、他人の事のように懐かしく思うのでございます。

満州事変に突入したとは申せ、軍国主義の中、一応国家は隆盛一途の様でございました。広島宇品港より出征の方々に国旗をふり、勤労奉仕などしながらも、家庭では母兄姉妹にかこまれて、幸せに過ごした青春でございました。昭和十七年に結婚、その後世界第二次大戦に突入した後は、日々困乏の生活に入り、実家より長崎竹の久保に送つてくれますお米は、ついた時は箱の中に一合

か二合、お餅は四つか五つであったこともございました。そのような物資不足の配給生活でございましたが、長崎の方は暖かく、遠地者の私を可愛がつていただき、幸せ一杯でございました。しかし八月九日の原子爆弾は、人生を大きく変え、幸せは手の届かない遙か彼方へいってしまいました。

長女は一才七ヶ月、長男は胎内七ヶ月でございました。幸い広島の実母が健在でございましたので、私の郷里で二人の子供は成長いたしました。母も一昨々年、孫達の成長を見、安堵の上他界いたしました。

私は終戦後の二十三年に、趣味を生かして洋裁学校に入学し、三十数年間この道一すじに生きて居ります。

昭和二十六年に洋裁教室を設立、三十二年に県の認可校になり、五十一年に法改正により、小さいながら専修学校に昇格させていただきました。

長女は日本女子大学家政科卒業後、徳山市に在住し三児の母でございます。

長男は慶應大学商学部で学び、卒業後只今は東洋信託銀行新宿支店の営業課長として、東京に住んでいて二児の父でございます。

今まで通り越して来ました道が、けわしく、悲しく、苦しかったことは、紙上では語り尽くすことは出来ませんけれど、走馬灯のように過ぎし日のことを思い、その日その日を一步一歩あゆみ続けて参りましたことが、懐かしく思い出されます。只残念にも早くして逝きました主人の靈よ安かれど、祈るばかりでござります。

今夏は四十周年にあたり、息子、娘夫婦、孫五名を連れまして、総勢十名で、子供達にとつては初めての長崎大学の慰靈碑に、参拝させていただきたく存じます。その節には学部長先生や諸先生、御遺族の皆様ともお会い出来ますことを、只今から楽しみにいたして居ります。

追憶記刊行を心よりお礼申し上げます。

(六〇、五、三)

眼科助教授 土 江 乾 一

遺族 神戸市西区春日台二丁目六一四 土 江 雅 江 (妻)

追 憶

憶え巴今から四十年前の八月九日、長崎の上空に突如として、見たこともない大きな葦雲が人々の目を驚かした。瞬間に鋭い光となり、一瞬にして雨と変わり、自然も人間も全ての建物も、すさまじい力で崩れ落ちたのです。不気味な助けを求めるうめき声と共に、消え去らぬ数時間を過ごしました。

上空ではいつまでもアメリカ軍による空襲、遂には原子爆弾が投下されたのです。この恐ろしい新科学兵器こそ、阿修羅の様な形相を長崎・広島に残して以来、四十年の歳月は、傷跡の癒える事なく、被爆者の一人一人に与えた大きな悲しみと怒りの炎は、燃え続けることでしょう。それよりもっと悲しいこと、やるせない思いは、再びこの様な事が世界のどこかで行われるかも知れない、という事です。平和の声はいざこより起ころるのであるうか！

私も当時三才の女の子を長崎で亡くし、疎開させていた当時五才の長男と共に、被爆の身をもつて、残された命で亡き夫と娘の靈を弔い、子供への愛一筋に、四十年を懸命に歩いて参りました。

今だに私の体には悲惨な爪跡を残したままでですが、罹災者の中でも数少ないと思える再起の道を与えてられ、今日に至っております。さもありや様な日々の生活に、様々不幸を一杯背負つた婦人更生への道しるべとして、婦人保護施設に二十数年過ごして参りましたが、多くの婦人達が逆に様々な事を教えてくれました。草の根の如く生きることは、簡単に云いつくせる事ではありませんが、本気で生きるなら不可能ではない、と悟りました。

四十年の間には、日本全体にも豊かな変貌をみました。嘆きの地長崎と広島も生まれ変わりました。多くの同胞の血の叫びの中に、次の世代のため、経済、科学に驚くべき再興の日本の姿を見、有り難いことです。併し世界のどこの国にも味わわせてはならぬ、四十年前の日本の経験です。共存共栄の世界よ

来れ！ 血にぬらされた同胞犠牲者の絶叫を忘れずに、と次の世代の方にお願いします。

初老を迎えた罹災者の一人として、切なる声を、記念誌の一隅をお借りして叫ぶものでございます。

御遺族のご健康をお祈り申し上げております。

悲しい追憶は、消えることなく、我が胸に泣く。

(六〇、四、二二六)

衛生学助教授 福田秀信

遺族 西宮市甲子園口北町六一七 中原ミドリ(長女)

想い出

昭和二十年八月九日当時、私ども姉妹三人は、福岡の田舎へ疎開していました。父、母、兄、姉、医專在学中の叔父二人（中島正武、中島欣二）、以上六人を原爆で失つてしまいました。私は十才、妹は六才と四才。この三人が残されました。

長崎に新型爆弾が落とされたらしいと聞きながらも、まさか親が死んでしまったなんて、子供心に判りもせずにいましたところ、八月十六日夜、香焼島にいた叔父が、山里町の自宅で亡くなつた母と妹の骨を持ち帰り、地獄のような惨状を話しました。

父方の祖母や叔父達が、父を随分捜しましたが、最後の場所は判りません。父は大きな身体で、こまめに人の世話をよくしておりました。日曜には私共の爪を切つたり、耳の掃除や畳を拭いたりするのが日課でした。

父はラジオ放送で、虫歯の予防とか衛生について講演しておりました。筆で字を書くことが好きでした。山里町に住んでおりましたので、私は運動場横の門から入り、テニスコートの所通り、父の所へ弁当を届けるのが日常でした。木造の衛生学教室は、子供の私が歩いてもガタガタと足音が響き渡り、不気味でした。兄と大学構内へ蟬を捕りに行つた事もあります。

いつの間にか戦後四十年も経つてしまいました。そして両親の年令を、私は越えてしまいました。遠方に住んでいますので、度々訪れる機会もなくて残念ですが、五十八年の春に、数々の想い出深い大学、山里町、松山町周辺を散策しました。下の川の流れは昔のままでした。原爆資料館横の鉄筋の銀行社宅が、私が住んでいた場所のように思われ、言葉に云えぬ悲しみに胸がつまりました。突然襲つた両親の死と戦後の時代の変化で、妹達の世話をしながら淋しくて、我が身の不幸を嘆いたものでした。

私は只今結婚致し、主人、娘、息子に囲まれ、幸せな生活を送っております。

貴重な生命と引換えたのですから、いつまでも平和でなくてはなりません。祖母は満九十八才です。薄幸だった子や孫の分まで、長生きしています。

(六〇、四、二九)

細菌学助手 三谷秀夫

遺族 (自宅) 横浜市緑区美しが丘四一三八一九

(診療所) 東京都大田区南馬込四一三五一一 木原シヅ子(妻)

四十周年と申せば、若い者にはとても長い年月のように思えるでしょうけれど、私にとりましては本当に總てが駆け足で、目の廻るような過去でした。

よそ者と云われながらの七年間の疎開地生活、苦労を知らないで医者にはなつたものの、突然に家族のほかに引揚げ者を加えて十四名の中心となり、当たつて砕けるほか術を知らなかつた終戦後の生活など、今更の如く思い出し、昔は涙も出なかつた自分の眼から、只思い出すだけ涙が溢れます。若しことに當時を話し合える人がいたら、手を取り合つて声をあげて泣くことでしょう。こう思うのも、老境に居る為でしょう。

私も七十四才になりました。幸にまだ毎日、週二十二時間診療を致しております。往診も致します。近頃は健康上歩いて廻り、遠方は車を利用致します。

昔から知つてゐる患者さん達は、私に健康で良いなあと申しますが、実は昨年あたりから、老化現象を自ら認識するようになり、服薬その他の治療をひそかに

致して居ります。

住所は横浜の息子の家に移しましたが、実際は大森の診療所で、夜は一人です。休日になると横浜の方へ帰りますので、使用人は通いです。診療のほかに事務的な事や雑用が多く、日々多忙な生活ですので、もうそろそろ息子が独立して、生活設計を建て直して呉れればよいと、考えるようになりました。

終戦直後に疎開地で生まれた令夫は、三十九才になりました。当時は流石に富山県下でも食糧の確保が困難で、鶏卵ほどの大きさの馬鈴薯四個位が、成人の一食分でした。又は大豆を圧し潰し、塩味をつけた薄い煎餅風のもの四枚が、成人の一食分でした。勿論副食物などございません。そういう最中の出産でしたので、令夫は陣痛が起つて三日目に漸う生まれました。瘦せてヒヨロヒヨロしていましたので、その後大変心をつかつて育てました。丁度陣痛が始まった日に、長崎から三谷秀夫の死亡確認書が送られていたそうです。この事は私、後日に知らされました。

現在令夫は、東京都立広尾病院呼吸器科医長で、又独協医科大学の非常勤講師をしております。大森の方へは、病院の勤務時間外に来て、診療をしてくれます。アレルギーを専門としております。三谷に似て、学問も好み、運動も好きで、多忙な間に、週一回バレーボールを、又月一回は音楽のグループで、自分はピアノを弾きながら、数種の楽器を持ち寄り—何れも夜間ですが—楽しんで居ります。これが休養の一時でございましょうか。

孫は四人で、長女六年生、長男四年生、三男四男は共に二年生で双生児です。嫁は健康で優しく、大学の薬科出身で、その他も私は百点満点をつけて居ります。私は只今、本当に幸福だと感謝しつつ過ごしております。

(六〇、四、一三)

一、追憶と感想

中華民国台灣省南投市民族路三〇〇号 葉國慶

「時間とは存在と変化の函数である」。私にとって忘れ得ないものになってしまったこの言葉は、四十年前、永井隆先生から教えられたものだ。よく哲学的な辞句を講義に挿入される角尾学長の講義に大層魅力があつたように、永井先生も講義によく哲学的、或は文学的な辞句を引用して、地味なX線学をなるべく面白く、親しみ易いようにして講義されるので、授業の時間が土曜日の午後で、且つ必修科目でなかつたにも拘らず、学生の出席率はいつもよかつた。當時若い助教授であった先生は、私達学生のよき導師であると同時に、何事も打ち明けて相談し得る良い兄のような存在で、外見は右翼がかつた言葉の多い、こわいような人に見えたが、十分間位一緒に話をしたら、極く親しみ易く近づき易い人柄であることが、誰にでも感じられるタイプの方であった。(中略)

戦争が激しくなるまでは、週に一度、課外に、主に一、二年級の志望者を集め、座談会式の読書会を催して、主に基礎的な物理学を教えられた。冒頭に掲げた言葉は、この時教わつたものらしい。(中略)

昭和二十年十二月三十一日の大晦日の日、大雪の中を急に帰国せねばならない、長崎を去るとき汽車の窓から、雪煙と夕闇の彼方に消えて行く長崎の街を、これでこの地この町とも、又学友達とも、恩師の方々、原爆後辛うじて尚健在で居られる調先生、古屋野先生、永井先生とも、もう二度と逢うことはあるまいと、数限りない思いを込めて見つめたものだ。残念ながら永井先生だけが間もなく他界されたが、星霜四十年、二人の先生のお子さんも、もうすぐ亡くなられた頃の先生のお年を越す筈である。回顧して誠に感慨にたえない。

レントゲン科の施焜山先生は、長い間永井先生に師事した方だが、先生と同

じくX線室で被爆し、療養後かなり経つてから台湾に帰郷した。その後知名度の高いX線科医師となつたが、数年後に永井先生と同様に、白血病で亡くなられた。X線の専門家として、原爆や放射線に就いて多くの知識があつただけに、発病までの間、内心どれだけ苦しく不安であつたか、想像するだに傷ましい感がする。亡くなるまで毎年八月十三日には、自宅に祭壇を設け、永井先生を中心とする人々の靈を祭り、冥福を祈つておられた。實に敬虔な信念の人であつたようだ。

解剖学助教授だった呂雲龍先生は、学生時代から夙に解剖学に情熱を傾け、暇さえあれば解剖教室に通い、卒業後すぐに第一解剖に入つて、高木教授の得意の愛弟子となられた。先生は私より三年先輩で、私が二年生の時助手となり、私が卒業した時には早くも助教授だったから、恐らく一十七、八で助教授になられた筈だ。いくら戦時下でも、異例に早く出世した人で、全く並々ならぬ卓越した才能の持主だったと思う。学問に限らず、何事についても多識で、人格者としての評判も高く、学生達からも尊敬されていた。先生の下宿が近かつたので、私は同級の王斌雄君と一緒に、よく遊びに行つたものだ。

原爆の落ちる前々日の夜は、期せずして呂先生を中心にして、台湾出身の学生十名が私の下宿に集まつて、雑談をした。その席上で呂先生は、アメリカが既に原子爆弾を発明し、実用化したことを語られ、私達は半信半疑であつたが、二日後にはこれが正確だつたことが、事実によつて証明されたのである。原爆の落ちた日、呂先生は解剖学教室で高木教授と共に亡くなられた。一途に学問を生涯の仕事と考えていた人にふさわしい一生であつたと云えよう。誰からも洋々たる前途を嘱咐されていたのに、人間の禍福は全く分からぬものだ、と思う。（中略）

* * *

私たち昭和十九年九月卒業生は皆で五十二名、台灣籍四名、朝鮮籍二名、及び身体に欠陥のある三、四名を除いて、全部軍医になつてゐるので、原爆当日長

崎に居たものは、市内四名、県下一、二名、合計約六名で、その内原爆で亡くなつたのは佐藤昇君、吳福順君、三谷秀夫君の三名であつた。この人達は私と関係が深く、佐藤君は同グループ、吳君は同郷、三谷君は細菌教室の同僚で、それぞれ小児科、影浦内科、細菌学の助手で、皆職場で即死された。市内にいた四名の中、私だけが生き残り、自分の幸運を感謝する一方、人生の儂なさをつくづく感じさせられた。県下にいたものは勿論みな難を逃れた。

四十年経つた今でも、原爆で亡くなつた恩師、学友達、知人の誰彼が、いつも脳裏に深在し、記憶の中では常に若く、みずみずしく存在している。長い間夢の中で過去に返り、一緒に遊び、共に語つたことか、目覚めて白髪の老翁である自分を発見する毎に、たまらなくわびしく、過去が切なく懐念されてならない。（中略）

当時原爆を体験した人々は、最も若い人でも今は六十余才の筈である。五回忌、十回忌の頃は恐らく亡くなつた人達を偲び、心から冥福を祈り、無事であつた己の幸せを感謝したものが、今年四十回忌に集まる人達は如何なる心情を持つであろうか。元より己の幸福を感謝し、亡くなつた人達の冥福を祈る思いに変わりはないが、前になかつた別の心情、即ち日進月歩の核兵器の進歩、当時の原爆の千倍の威力を持つた水爆の出現が示す人類の悲劇的進歩を、憤り悲しむもう一つの心情をも、合わせ持たざるを得なくなつたのではないかと思う。嘆かわしい極みであると思う。

人類は観察の動物である筈であるから、原爆の悲惨な体験が空しいものであつてはならない。人類の福祉に役立ち、今後の世界平和の基石であつてほしいと願うのである。そして十年後の五十回忌には、一切の憂慮をすべて、純粹に只一途に、亡き人々の冥福を祈り得る世界になつてほしいものである。

（六〇、五、一八）

三、医学部・医専・薬専の学生遺族の手記

医大坂卒業生 大嶽乙哉

遺族 愛知県安城市安城町寺田三九 大嶽はな子（母）

（前略）私もお蔭様で元気でありますので、御安心下さい。早いもので、今年は四十周年の記念日が日毎に近づいて参りますが、いつも先生にはお世話をになるばかりで、申し訳なく存じております。

私もお蔭様で静かな毎日を暮させて頂き、有難いことと感謝しつつ、皆様の供養をさせて頂いております。

主人は昭和五十一年に亡くなりましたので、今年は九年になります。私はお蔭様で丈夫なものですから、一人暮しでガンバッて居ります。私共一人は、遺体は大学病院に献体することにし、角膜は盲人に差し上げて下さるように、不老会に登録してありますので、余命を全うして終つたならば、医学のお役にてて頂けることを、せめてもの喜びとさせて頂いております。

お尋ねの遺族代表者は、私にして頂いて結構ですから、宜敷くお願ひ申しあげます。

今まで何のお手伝いも出来ませんでしたので、今度の四十周年記念の忘れな草出版事業の費用の一部として、誠に軽少ですが、同封の金を御使用下されば有難いと存じます。どうかよろしくお願い申しあげます。

（後略）

医大坂卒業生 村田千秋

遺族 長崎県西彼杵郡長与町嬉里郷五九五 内藤節子（叔母）

「死児の齢を数えるほど辛いものはない。」とか、「此の子は私等に残りの生命をあずけたのだ。」とか申しておりました両親は、本当に長生きをいたし、父は八十六才、母は九十三才の天寿を全うすることが出来ました。お蔭で

父は病床で靖国神社合祀のお知らせをいただき、「犬死でなくてよかつた。」と大変に喜び、母はその後に実現いたしました遺族年金をも戴くことが出来まして、「これはひとえに調先生初め、お世話を下さいました方々の筆舌に尽くし難いご辛苦の賜」と、二人ともども心から感謝申し上げて、あの世へ旅立つたのでございます。

千秋は学業半ばで結核に罹りましたため、医大坂卒業で爆死した時は、数え年三十才であります。その前の年に既に結婚しておりましたので、死んだ時は、胎児として遺児がおりました。原爆二ヶ月後に生れたその子は男の子で、おかげで元気に育ち、長崎西高校、早稲田大学へと進み、唯今は二児の父親となっております。父の跡はつぎませず、西友（株）の営業企画部に勤め、忙しい忙しいと申しながらも、元気に働かせて頂いているようでございます。

当時のあれこれを思い浮かべます時、四十年という年月は、今更のように長く遠く感じます。ゲートルに戦斗帽、モンペに防空頭巾で、とても元気であった両親の姿は、も早見ることも出来ませず、当時胎児であった者が、今ではその時の父親の年令を遙かに越しております。

「風化させまい原爆を」の声と共に、今世界的に反核運動が昂まつて参りました。本当にこの大きな犠牲を、絶対に無駄にさせてはなりません。真の「平和の礎石」となつていただかねばと、願うばかりでございます。

（六〇、四、四）

*

*

*

千秋の遺児は、村田勝と申し、東京の西友本社に入社しましたが、後に大阪勤めとなりましたので、京都にマンションを求めるましたが、また東京転勤となり、とうとう単身赴任となつた訳でございます。勝の住所は

京都市伏見区向島二ノ丸町一五一一三〇、三〇一一〇三

で、本当は勝の方が遺族代表者としては適任かと思われますが、遠隔の地に住んでおりますし、両親の死亡後は私が両親に代わって万事を勤めて参りました

ので、遺族代表者としての連絡は、私が受けても差し支えないかと存じます。
どうか万事よろしくお願ひ申し上げます。

医大四年生 清崎裕之

遺族 熊本市稗田町五一八一 清崎俊之（兄）

数年前に慰靈祭にお詣りして以来、御無沙汰致しております。

これまで、先生によくお便りを差上げておりました母は、昭和五十五年に九十三才で他界致しました。以来次男や姉が死去し、長男の私が一人残って、三男の裕之の生前を偲びながら、先祖を弔っております。

この度、機会があつて上京することになりましたので、久し振りに靖国神社にお詣りして参りました。桜花爛漫の参道は、小雨こそ降つておりますが、一段と神々しく、心ゆくまで犠牲になられた方々の御冥福を祈つて参りました。参拝者も多く、戦友会の集いも、処々に見受けられました。裕之が生きていたら立派な医師となつて、診療に従事している事だろうにと、鳩の群れ遊ぶさまに見入つて、感慨深く想像したことでした。又弟は今年六十四才になつている筈で、孫の二、三人も出来、立派な家庭を築いているだろうと、思いは尽きません。

今私の長男は四十三才になりますが、三才の頃、叔父さんと電車で水前寺に行つたことを覚えていると申します。私の出張中、よくその子を可愛がつてくれた弟でした。

私の孫昭一が、今小学校五年生で小倉に在住しております。小学三年の頃に、広島に住んでいた関係で、よく裕之の事を聞きました。爆死のことを語つてもよく判らないので、亡くなつた大叔父様に代わつて、立派に成人するようになつてきました。お盆などお墓にお参りしては、墓標に「清崎裕之、長崎医大にて原爆死」と刻んであるのを見てうなづき、「よくお参りしなければねー」と申しております。

「忘れな草」の第七号が出来ますそうで、嬉しく思います。これも先生方の

お骨折りのお蔭でございます。お体に御注意なさいますよう、陰ながらお祈り申し上げます。
(六〇、四、二五)

医大四年生 羅時達

遺族 中華民国台湾台北市中山北路二段三巷二七号四F

羅時雍（兄）

弟、時達の思い出

時達は男女八人兄弟の三番目で、私より四つ下の一九三一年生れで、父が八十二才の時に書いた「八十年の回顧」という手記に、『三男時達は、出生時に産婆さんが、白膜に包まれた赤子は千人に一人位しかいない珍しいものですよ。飲む乳も他の子の二倍位多量で、発育も良く、小さい頃外で近所の子供と遊んでいる時にも、よく頭領になつて指図し、皆もその通りにする大将の風を具えた子で、兄弟姉妹と比べると、確かに一風変つた所があつた。』

新竹の小学校・中学校から、台北高校の文乙に進学。高校在学中に八〇キロ程も離れた新竹の家から通学したこともあり、又生来議論に得意で、学校弁論部の一員として、母校では勿論、新竹、台中、台南など台湾各地の巡回弁論大会で、「誰がためにアジアの鐘は鳴る」などの題目で、大いに弁舌を振るつて、花形学生の一人であつた」と記しております。

植民地時代の台湾では、台湾人学生は台北帝大の医、理、農の各科で人数が制限され、その他の科にはとても採用されないので、笈を負つて東大の法科を目指したが、希望がかなえられずに、気憇み旅行で長崎に立寄り、中学校の先輩を訪ねて、先輩の勧めや家庭の事情、或いは日本で一番早く開けた國際港町に魅せられた為か、長崎医大に入学することに決めたのだろうと思われます。

当時、香港の日本海軍部隊で勤務中だった私に、学校の休みで旅行した東京上野公園の西郷どんの銅像前で写した写真を送つてくれたり、小遣錢せびりの手紙もよこして、当時金に不自由しなかつた私は、電報為替で大枚百円を送金した記憶もあります。

日本の敗戦で台湾が中国の一省になり、台湾人の我々も中国籍になつて、数年後の一九五一年には、台湾も地方自治体制施行で県知事、市長、議員などの選挙が行われました。その頃私や同窓の友人たちは、もし時達が生きのびて居たら、医者から政治界に乗り出しだらうと、話の種にして居りました。

前掲の父の手記には、『終戦の年の十二月に、時達が長崎医大在学中に下宿していた家のお嬢さんから、突然自分に手紙が来た。それには、「私は達人さん（時達の日本名）に、長崎も広島のような新型爆弾の攻撃を受けるかも知れないから、当分田舎へ一緒に疎開したらと勧めたのですが、いや、母さんが亡くなつた時に故郷に帰らなかつたことが心苦しく、父さんの悲しみを思うと、卒業試験終了次第一刻も早く帰りたい。だから明日の眼科試験はさぼる訳にはいかない」と悲壮な面持ちでの返事でした。』この手紙は、終戦時転居のどうさくさで無くしてしまい、勿体ないことをした。』と書かれていた。

忘れな草第三号三四頁に、同窓生小杉正義さんの手記「燃ゆる火」があり、それに調会長が附記として、時達が小杉君に次のように云つたことが記されてゐる。

この一節は、高校弁論大会で述べた「誰が為にアジアの鐘は鳴る」の題目と照らし合わせると、矢張り人並でない所があつたのでしよう。
尚、一九七二年十一月五日に台北で「台湾人学生原爆犠牲者追悼会」が催された時、調遣族会長、佐藤医学部長、近藤付属病院長、辻教授、松田教授の五人が遠路わざわざお出でになり、私は台湾同学会の指名で弔辞を読ませて頂きましたが、調会長のお話では、最愛の御令息一人を原爆で亡くされ、時達も学友と一緒に防空壕内にいたのに、友達の所へ一寸と云つて壕外へ出て間もなく

原爆に遭遇したこと、これらを思い合わせると、やはり「運命」というより外はないと思ひます。

長崎の旅

あれから四十年、生き残りの人や遺族の方は、事ある毎に悲しい思いが蘇ることでしよう。私も前々から何時かは長崎に行き、原爆の現地を見、記念物を拝見し、調会長に敬弔の意を表したいと望んでいましたが、やつと今年二月二十六日に東京から長崎に到着、駅前のホテルに一泊、電話で御承諾を得たので、小雨降るうすら寒い夜の街を通つてお宅へ上り、豊饒たるお姿に心からなるお札を申し上げ、御夫人と一緒にカメラにも収めさせて頂き、長年の念願を果たし得て感無量、機会があつたら又参りたいと思つております。

翌二十七日は観光バスで平和公園記念像、浦上天主堂、国際文化会館、大浦天主堂、グラバー園、十六番館、孔子廟など、日本開國の魁であつた港町の面影を一巡、深い印象を脳裏に刻んで、午後の特急で鹿児島県宮之城の松下病院に八時頃辿りつき、三年前から勤務している同窓の杜医師宅を訪れて、久し振りに積る話に花を咲かせました。

翌二十八日は鹿児島市に行き、由緒ある城山、磯公園等の名所旧跡を観光し、三月一日は別府に行つて高崎山の猿の群をカメラに収め、有名な地獄廻りをした後、温泉で数日来の旅の疲れを癒し、二日東京に戻り、私にとつて意義深い四千キロに及ぶ九州一周の汽車旅行を終えました。

私共の家族

羅は三百余年前に清朝舉人であつた曾祖父の萬史様が、廣東省梅県から台湾の新竹に移住し、祖父は漢方医で佛教の聖地獅頭山で出家人に治療奉仕を行ひ、老後は佛教に帰依していた祖母と私達の叔母二人がお世話を来て、一九二八年に六十七才で円寂しました。我々が子供の頃、祖父と戯れたり甘えたりした情景は、今でもまだかすかに眼に浮かびます。

父羅其英は一九一五年に台北國語学校を卒業した後、一九六五年に七十才で

停年退官するまで教育界に奉職、その後は晴耕雨読を楽しんでいたが、一九七九年に出國観光が許可になつたので、八月に妹一人を連れて日本に渡り、長崎で調会長を訪問して、原爆記念物や長崎医大等を巡歴、帰国後、「日本旅行記」を十月に書き上げて間もなく、体調が悪くなつて入院、治療の甲斐もなく翌年六月、八十六才で亡くなりました。時達犠牲の地訪問の夢を果たして、気がゆるんだのでしょうか。

母は太平洋戦争中に男の子を三人とも戦地や長崎に出し、その心配やら生活苦に加えて、終戦の年の二月からは、新竹にも米軍が爆撃を加えるようになつたので、田舎に疎開の為、寒夜風雨を冒しての荷物運びに、身も心も磨り減らし、栄養不足の体に悪性マラリアと脳栓塞を併発して、終戦前の五月に他界致しました。戦後一家団欒の楽しみも享受出来ず、時達の原爆死と共に、我が家の大きな不幸事でした。



次弟の時熙は私と一つ違いで、台北帝大医科に学び、付属病院沢田内科実習中に海南島医療隊員に徵用され、半年勤務して帰國の後、ニューギニア附近の日本陸軍部隊軍医に又も應召、終戦翌年五月、九死に一生を得て帰郷し、省立病院内科主任や越南の医療隊医師として数年勤務した後、一九六三年以降、高雄市で東海病院を経営しています。

末弟時蕙は、我々兄弟中一番の勉強家ですが、終戦当時の混沌とした環境で落ち着いて台湾大学で学ぶことを諦め、田舎の学校教員を勤める傍ら、数年間に高校教員検定、普通文官、高等文官や軍法官等、多種多様の試験に合格、至難とされている司

法官試験に見事にパスし、彰化、雲林、台北等各地の法廷で、十数年間判官を勤め上げた後、一九八二年五月に退官、今台北で弁護士をしています。

四人の妹は皆父の意志に従い、女学校から師範学校に学び、卒業後教職に就き、年頃にそれぞれ意中の人に嫁ぎ、立派な子供達の母親になっております。

私は父の日記に、「長男は医者になつて欲しかつたが、弟妹七人の学資手伝いのため、官費の師範学校に入れて早く就職させたかつた」と書かれている通り、台北第二師範学校卒業後、一九三八年から終戦まで、海軍に通訳として応

召、艦上や南支部隊に勤務、戦時下日本海軍八年間の経験は、生活信条としていた忍耐と儉約の習性を、一層堅固にするのに役立つたように思います。

終戦翌年に広東から着のみ着のまま台湾に帰り、高校教員の資格をとつて、教員や主任、衛生局の課長や秘書官など勤務し、一九八三年に退官、好きな園芸、読書、旅行などを楽しんでおります。

私共兄弟姉妹七人は、時々家族連れで会食し、清明節の墓参りは、毎年順番で主催者となつてお供物の準備をし、墓参後全員揃つて島内旅行など行つております。父は生前口癖のように「打虎要親兄弟」と話していましたが、これは兄弟仲よく力を合わせれば虎退治も出来るという意味で、日本の武将毛利元就が、臨終に三人の子供を集め、矢を折つて訓したのと同じ様に、次の世代に身を以つて示したのと思います。

(六〇、四、二五)

医大四年生 西 憲 治

遺族 佐世保市花園町五一六 西 重 男(兄)

このたび四十周年記念文集発刊の計画について承り、まことに有意義なことで、ご苦労さまでございます。(中略)

当方は、すでに父母も他界し、男兄弟三人が生き残り、どうにか過ごしていますが、末の弟弘光のみがまだ現役の形で、長崎の栄町で深町(養子入りのため)皮膚科を開業しております。

惟うに、今なお第三世界を中心に、紛争と戦火の絶え間がなく、人々が戦禍と

飢餓の一重苦に喘いでいる現状を思い、ますます平和のありがたさを今更の如く感ずるのです。

とは云え、原爆投下を今さら怨んでもしようがないことですが、これを地球最後の業火として、戦争なきよう毎日祈らずにはおられません。（後略）

医大四年生 林 中 凤

遺族 中華民国台湾高雄市五福二路一一六林五桂（弟）

其後の四十年

四十年前の夏休み中であった。私達中学二年生は、既に半年程学校へ登校せずに、各々郷里の町役場（私は土庫町役場）へ、毎日公務手伝いに出ていた。その以前私は台南市近郊で、竹藪の間に飛行機の遮蔽壕を掘っていたが、その重労働に比べると、町役場での文書の書き写し位、物の数ではなかつた。以来、度々軍人軍属の出征見送りを続けていると、広い町役場のオフィスもだんだん空の事務机が多くなり、人影もまばらで、幾分淋しい思いも無くはなかつた。

八月十五日の十二時前後でしたか、「重大放送がある」とかで、二、三の大人がラジオを聞くで聞いていた。あんなキーキー雜音が止まらないラジオを、私は仲間になつて聞く程の根気がない。それでいつもの通り、一人わびしく家路についた。勤務は午前中だけである。後程この重大放送が玉音で放送され、終戦宣言であつたと解り、町役場での勤務も終りとなつた。父は早速学校に連絡をとつてくれたが、当分自宅で通知を待てとのことだった。

程なく姉婿の郭氏が、電報を手にして訪ねて來た。私の父母がもの静かに泣いている様子を見つめながら、姉婿はなす術を知らないでいた。一枚のウナ電が無造作に卓上になげられていたが、電文には片假名で、「中鳳原子爆弾に斃る。医者同伴で父に知らせよ」とあつた。中鳳の弟が父に直接知らせず、姉婿の郭宛に打電したのである。医者同伴と特記したのは、ショックの烈しさを慮

かつての配慮によるものだった。

中鳳には三人の弟があり、台湾で在学中の私の外は、三楽が熊本に、尚志が島原に居た。尚志が原爆のあつたのを知らぬまま、八月十日、長田の兄の疎開先に中鳳を訪ね、被爆した兄の容態を見て不安を感じ、そのまま居残つて介抱をした。日中なのに、「電灯が消えたのか」と問う兄の側で、冥途に赴く兄を看護つてあげ、そして埋葬もしてあげた。翌年一月、台湾に引揚げる時、掘り出して荼毘に付し、遺骨を持って四年振りに故郷に着いたものの、急に老い込んだ父母を見ては、中鳳の遭難が一族の各人にもたらした不幸が、想像以上であつたのに、更めて驚愕したろう。

悲報に接してからの父母は、殆ど毎日のように静かにむせび泣いた。それは悲しみが深いからだ。無念だつたのだ。恨む特定の相手がないのだ。トルーマンでもなければオッペンハイマーでもない。スイニー（機長）でもなかろうし、東條でもない。だからこそ、尚更悲しみが体にこたえた。誇りにしていた愛児を亡くして、余生に何の魅力があろう。確かに父は其後の十三年間、心痛の毎日を明け暮れた。気の抜けた日々を只々悲運の愁傷裡に余生を過ごして、昭和三十三年八月、とうとう中鳳のあとを追つていきました。存命中は家財管理もなおざりであつた為、家運も傾いたが、父にとつてはもうお金等どうでもよかつた。そんな父を傍観して、家族の成員誰か断腸の思いなきを得よう？一人の原爆被害者に伴う不幸は、一人に止まらない。一時の不幸でもない。一生続く不幸である。

父の歿後十三年、昭和四十六年一月に、初めて調会長からお便りを頂き、遺族会のあることを知りました。出版物「忘れな草」の中の名簿に、林中鳳の名前はあるが、その遺族の名や住所がないのは今まで不明だつたから、と書いておられました。葉國慶君の追悼文を見ますと、「中鳳君はギターが上手で、頭も秀才だつた。本当に惜しいことを致しました。同情に堪えません」と慰めの言葉を頂きました。会長及び長崎医大卒業生諸氏の御温情と、遺族探索に対

する御尽力を有難く思う。

後日「忘れな草」各集をひもとき、調会長には精一様と弘治様と、お二人の御子息を亡くされたと解り、私の驚きは殊の外大きかった。一人の子を亡くした親の悲しみは、一人の子を亡くした時の二倍に止まらない。こんなことは算術的計算通りにはいかないものだ。況んや多人数の家族が、時を同じくして遭難したとすれば、その凄惨なことは想像に絶するものがありましよう。

四十年来、(1)遺族調査及び名碑銅板製作、(2)遺族年金交渉、(3)靖国神社合祀、(4)忘れな草六集の編纂等と、何れをとっても不屈の闘志や不動の決意がなければ、日の目を見ない事ばかりである。言語に絶する不幸に遭いながらも、調会長はこの様に生き抜いて来られました。調会長とお近づき頂く以前に父を亡くして、会長の生き方を知らなかつたのを惜しむ。私の父の余生は多少なりとも、より明るく過ごせたでしよう、と思つ。

忘れな草の各集を読んだので、医大被爆前後の様子が審らかに解りましたし、兄の恩師、先輩、同窓、後輩の住所も判りましたので、倪衍元先生、葉國慶先生、王文其先生、林政吉先生、黃耀宗先生、康嘉音先生たちを訪ねましたし、林忠実先生、楊友香先生、林子雄先生、陳活源先生とは、書翰でお伺い致しました。一方遺族では、羅其英様、羅時熙先生、戴榮旋様、戴忠德様、戴華德様、柯振樞様、郭炳均先生を訪ねましたし、書翰でお伺いしたのは、羅時雍様、蘇高愛惠様、郭芳洲先生、范肇様でした。

中でも羅其英様、戴榮旋様、郭炳均様は、俱に遭難学生の御尊父様で、私の訪問を大変喜ばれ、且つ悲しみを新たにされ、その後も文通を致しました。今は皆様逝去されましたので、日々御冥福を祈るばかりです。
(中略)

康嘉音先生の御書翰には、「中鳳君は翩々たる美青年で軽度の近眼鏡をかけ、とても上品な、おとなしい、眞面目な人でした。私の家に許志堯教授と戴君と半ヶ年寄宿したことがありました。そして原爆病中は、苦痛の余り口もきけなくなつたので、色々慰めた後、『頑張つて癒つたら台湾に帰りましょう』

と云つた時に、万年筆と紙を渡したら、『頑張つて帰ります』と達筆で最後の一筆を書かれた、そのいじらしい慘めなシーンは、今でも忘れられません」とありました。康嘉音先生は全力を尽くして兄の治療に当たられたが、到底人力の及ぶ所ではなかつたのです。

昭和四十七年十一月五日に「長崎医薬台灣同学会」の主催で、原爆死亡台湾人医師及び学生の追悼会が台北で催され、長崎から調遣族会長、佐藤医学部長、近藤付属病院長、辻教授、松田教授等五人が出席されたが、高雄では翌六日に南部同学会があり、康嘉音先生も元気で出席されたのに、一ヶ月後には幽明境を異にするとは、神ならぬ身の知る由もない。イエス様のお傍にまします先生の御冥福を祈るばかりです。

昭和五十八年四月、私は公務出張で東京へ参りましたが、閑を見て靖国神社に参詣致しました。生涯で初めて日本の土地を踏んだ私にとつて、何もかも珍しい事ばかりでしたが、正殿の前に佇んで、角尾学長以下八百余尊のみたまの御冥福をお祈り申し上げました。兄中鳳もその中の一尊であることは、申すまでもありません。
(中略)

戦後に生れた私の子供達は、中鳳伯父の原爆死を家庭の不幸と知つていても、見たこともない人の不運を、ただ歴史的の出来事として受け入れただけでしょう。あれから四十年経ちました。悲しみは依然として変わりありませんが、悲しむ人はだんだん寡くなつて来ております。私達がひたすら希つて止まないのは、「あやまちを二度と犯さない」誓が、この世に永久的で、普遍的で、確実的であることに尽きます。
(六〇、五、二)

医大三年生 大 池 未知生

遺族 名古屋市昭和区汐見町一三九 大 池 哲 郎 (弟)
追 悼

早いもので、兄が亡くなつてから早や四十になります。父母はまだ健在ですが、父も八十七才となり、小生に代筆するようにとのことで、弟の私が今

回は筆をとりました。

小さい時から二つ違いで、共に同じ小学校から中学校へと通いました。寒い日には布団の中で背中をひつづけて、暖をとつて寝ました。中学校の期末試験では、兄が「落花の雪にふみ迷う、交野の春の桜狩り、紅葉の錦着で帰る…云々。」これはよい文章だよと、私に示した三年生の教科書から問題が出て、同じ国語の先生だったので、一年生の私は大変得をしたこともありました。大和タンツといつて、はじめてレビューに連れていってくれたのも兄でした。

わたしは、中学校の途中で幼年学校へ、更に陸軍学校へと進みました。時々兄は手紙をくれ、又休暇には二人でよく旅行に出かけました。今でも眼前に彷彿としております。

あれは、昭和二十年七月であったと思います。私が埼玉県狭山の飛行場で、丁度任官をして間もない頃であったと思いますが、はるばると会いに来てくれました。短い語らいでしたが、間もなく八月九日、あのが最後のわかれでした。思えば、わざわざ別れに来てくれたような気がするのです。きっと本当は逆を思つて来てくれたのでしようが……。

終戦で復員した時に、いつまでたつても兄よりの便りがないとみえ、父は長崎へ行つた所でした。遺骨を胸に帰つて来て、「未知生が死んだと聞いた時は、地面が地ひびきをたててゆれたよ」と言つていたのを、今でもよく覚えています。

私は一八〇度の転回をして、名古屋の医学部に入学し、今では私立病院の院長をしており、本来なら全く兄と逆の立場になつていた筈で、これも運命だらうと、遠い昔を思い出しております。

私も漸く六十才の声を聞こうとして、少し仏心がついて来たのか、兄の終焉の地である諫早の海軍病院を訪ねる機会を得ました。この病院は佐世保病院の分院で、兄が当時海軍依託学生であつたため、長崎からトラックに乗せられて來たそ�であります。今では健康保健諫早総合病院となつており、院長先生、

総婦長さん初め、色々と親切に気を使つていただき、当時の状況を知る看護婦さんに、お話を聞くことも出来ました。海軍病院跡の石碑が、門の所に据えてありました。ああ、この辺りで亡くなつたのだなあと、何となく感無量の気持で、父母に見せようと思つて、写真をとつて参りました。

今生きていたら、何とも頼みになるのにも、また私の人生も少しは變つたのではないかとも、追憶の中にあれやこれやと考えます。今生きていたら、どんな顔をしているだろう。私の髪はもう大分白いのに、兄は眼鏡をかけた往時の紅顔しか浮んできません。

終りに、兄をはじめ、「くなられた多くの方々の御冥福を、心からお祈り申し上げますと共に、先生の長年にわたる御情の深さに、日々感謝申し上げる次第でございます。父母からも呉々も宜しくと申しております。どうか代筆をお許し下さいますよう、皆様の御健勝をお祈り申し上げます。(六〇、四、一七)

医大三年生 片 山 道 生

遺族 福岡県築上郡築城町安武 片 山 鶯 子(母)

その日も蟬しぐれのはげしい暑い朝でした。一睡も出来ない数日間を過ごしました八月十九日の午前九時頃、道生は兄(九大医学部)と弟(京都府立医大)に抱かれて、変りはてた姿で帰つて参りました。

四十年の歳月は、夢のようにうつろい過ぎてしましましたが、一日として道生のことを思わぬ日はございませんでした。早生れで中学四年卒業で五高に入学、当時は高校も二年半に短縮されて居りましたため、僅か二十一才で儻なくも若い命を落してしまったのです。

帝大の法科に入学して居りましたのに、丁度募集して居りました長崎医大を勧めたのは、皮肉にも母の私でございました。早死するだけあって、道生は本当に孝行者で、優しく、運動もすばぬけて上手で、体格もよく、親の目からも申分ない息子でした。道生のお骨が帰つてからは、道生の子供のころ寝物語りに聞かせていた歌を、夜更けによく一人で歌つて居りました。父は十年ほど前

に他界しましたし、私も徒らに馬齢を重ねて、今年は九十三才にもなつてしまひました。

長崎医大には不思議に因縁が深く、末弟の知之（三十三年卒）が現在市民病院に居りますし、戦死した長男の独り息子（修史）も、長崎を卒業（四十三年）した後、道生と御同僚だった川野先生が院長をされている北九州市立八幡病院の整形外科に居りましたし、今年は末弟知之の長男が又長崎大学医学部に入学致しました。きっと淋しがりやの道生の靈が、呼び寄せたのだろうと思つて居ります。

調先生にはどうかいつ迄も御自愛下さつて、若くして散つた医学生達のみたまを見守つて戴くよう、心からお願ひしてやみません。（六〇、四、一五）

医大三年生 花 田 紀

遺族 福岡市南区桧原四四九一一 花 田 静 枝（母）

歳月のたつのは早いもので、あの原爆降下の日より早くも四十年が過ぎました。今日、この頃、お互に悲憤の涙にあけくれていた当時のいろいろの思い出は、遠ざかっているようでも、時折り、何かの機会に、ふと記憶が蘇がえつて参ります。

丁度、私の住んでおります家の近くに、私の亡くなつた二男紀とご同級の方がいらっしゃいます。その方は、内科医院をご開業中の中野与八郎先生で、先生は短歌のお上手な方で、最近『閃光』という歌集を出しておられます。ある時に思いがけなくお遇いし、それからお近かづきになりました。

ある春のひと夜のことですが、先生は大きな額をお抱きになつて、私の家に訪ねて来られました。その額には、

○ 麦つんつん農夫の影ものまれけり
と、水茎みずくきのあとも美わしく、令夫人に認めていたいたものでした。又その額の裏には、次のように中野先生の附記がありました。

○ 麦つんつん農夫の影ものまれけり 花田紀作

「花田君が同級生の築城君（長大精神科助教授となり、現在開業中）の宅での句会に、一度だけ出席したことがありました。B29の本土來襲のなかつた頃の夏の夜でした。その夜は虫でも出そな、しめっぽい夜でした。花田君の投句があまりにも良かつたので、私ははつきりと覚えていてます。その夜、私はどんな句を作つたか、他の人の句などは全部忘れてしまつたのですが、何故かこの句だけを記憶しているのです。余程感銘をうけたものと存じます。（与八郎記）」本当に先生の温かいご友情の深さに、私は胸が熱くなりました。

只今、床の間に賜わりました額をかかげ、何よりの記念として、いつまでも先生のご友情に感激しつつ、その当時の句会のことなど、ただ今は、ほほえましい思い出と致しております。

その当時の頃、紀が長崎から帰省しまして、この句を私に見せましたので、「新鮮な佳い句ですね」と、微笑んでいたことを思い出しております。
○ 原爆忌まなうらの子は未だ若き 母詩都江（六〇、五、二八）

医大三年生 山 崎 龍 夫

遺族 埼玉県北本市西高尾五丁目二二三一 山 崎 英 夫（兄）
龍夫のこと

今はもう昔物になつたが、まだ日英同盟が有効であつた頃、英國王室から親善使節として、王室のコンノート殿下が来日され、帰路天龍峡下りを楽しまれたことがあった。

そもそも天龍川は、長野県の諏訪湖を水源として、上、下伊那平を委蛇として流れ、南信濃に至つて急に両岸が狭くなり、所謂天龍峡として、當時日本百景の一つとして数えられた。天龍峡は両岸の奇巖、怪石、五月躑躅と秋山の紅葉を以て聞こえ、当時の文人墨客でこの川下りを楽しむ人々が多かつたのであ

る。

龍夫はこのコンノート殿下の川下りの折に生まれたので、天龍の一宇を探つ

て「龍夫」と命名された、と亡父に聞かされていた。その天龍川が、静岡県に入つてから急に川幅が広くなる。今は開発のため、南信濃には門島、満島、佐久間（静岡）と三ヶ所にダムが出来、沿岸に新設の高校、病院が出来て、天龍の面影もなくなってしまった。

龍夫はこの南信濃の山中に生まれ、長じて近代医学の発祥の地である長崎のエキゾチックな風光に憧れて、敢て長崎医大を選んで長崎に赴き、卒業を直前にして爆死してしまった。その心情を想うと、堪えられない気持で一杯である。

兄康夫も小生も、当時応召中であった。兄は八月十五日、即日解除となり、その日に原爆の噂を聞いて直ちに長崎へ急行したが、小生は終戦処理に関係し、当時の陸軍省医務局長三木良英閣下の許にいたので行くことが出来ず、二十年十二月末日になつてやつと解除になった。従つて小生は翌年になつて長崎に行つたのである。

とうじの医大の受付氏に色々とお話を伺つた。受付氏の名前はもう忘れたが、それでも特に龍夫のことを覚えていてくれて、角尾学長の側でまだ息があり、一二、三日盛んに水を求めていたということであった。この話を聞いて痛憤を禁じ得ず、人類の愚かさをつくづく感じた。

兄の康夫は八月召集解除後、長崎に原爆投下の噂を聞き、幸に龍夫の下宿先は被害がなかつたので、その下宿に行つたところ、生前に兄と小生宛に書いた遺書があり、それを見ると、既に広島に原爆の投下された噂を聞いていたのではないかと思われた。即ち死を決して大学に出掛けたのではないかと思われる。下宿の隣室には朝鮮出身の医大生がいて、当時登校せず、爆死を免れたとのことである。兄が下宿を訪ねた時、目覚しいものは一物もなく、ただ遺書と二、三の臨床医書があつただけだったそうである。小生が若い頃親しく学んだ基礎の独逸原書や、ツアイスの顕微鏡も無くなつていて、何となく割り切れない気持ちだったそうである。

龍夫についての思い出は沢山あるが、若くしての爆死を想うにつけ、人類に

まだ残る愚かな戦争が無くなるよう、祈念してやまない。（六〇、四、九）

*

*

*

小生、この三月下旬、散策中、此頃流行のスギ花粉症に罹り、甚だ鬱陶しく、早速御返書を託したいものと心に掛けながら、延引いたし申し訳ありません。此頃やつと本復致しましたので執筆した次第です。（中略）

遺族代表者は、長野県下伊那郡南信濃村四二三、山崎康夫にして頂きたいとおもいますが、兄は高齢のため、「忘れな草」への寄稿文だけは、小生が代筆させて頂きます。（後略）

医大二年生 五十嵐 国人

遺族 長崎市東立神町九八 牧 弘子（妹）

兄のこと

被爆後四十年、原爆のことも次第に忘れられつつあります、思い出すのも忌まわしいと思つておりますが、今では「記録して後世に残すべきだ」と思うようになりました。兄や妹（県立高女在学中に兵器工場で爆死）のことも、月日の経つにつれて、逆に色々と思いつ出されます。

兄は姉妹の中で唯一の男の子で、父母は是非医師になることを望んでおりました。だが、兄は常に反抗ばかりして拒否しておりました。でも戦争が激しくなつたので、渋々医学部に入学しました。

八月九日は入道雲が朝から出て、今日も暑い一日、空襲警報を気にしながら、自転車で登校した後姿の白いワイシャツが、今でも目に焼付いています。その夜浦上に新型爆弾が落ち、皆全滅したという報を聞いて、騒然としていました。

夜十時頃、兄は、真黒な顔で、衣服と皮膚がブラブラ下がり、ズボンはボロボロになり、杖にすがつてヨタヨタと歩き、まるで亡靈のような姿で帰つてきました。

原爆の落ちた時は、医大の木造教室で授業中で、一時失神しましたが周囲の

熱で気がつき、梁の間からもれるかすかな光を頼りに、必死に立ち上がり火をよけ、屍体につまずきながら浦上川に辿りつき、水を飲みながら十時間かかるつて、やつと飽ノ浦の自宅に帰つて来ました。

当時は大きな病院は全滅して、三菱病院だけが残り、学徒動員の徵用工や一般の人の負傷者で、病室の外まで溢れていきました。「助かつてよかつた。」と申すだけで、聴診器はおろか注射一つ打つことも出来ず、病院の裏の社宅にも帰つてみることも出来ないで、大奮闘でした。

私が臀部に食塩注射、葡萄糖の静脈注射、傷には赤チンを塗るくらいでしたが、その薬もやつとのことで手にはいり、病院の廊下には負傷者が一杯で、「水、水、水を下さい」と叫んでいます。その人たちに水を与えて、かき分けながら、やつとのことで持ち帰った薬を、注射をしてやるような有様でした。

兄の看護も思うにまかせず、次第に食欲がなくなり、乳白色の水様の吐泻物をひつきりなしに出して、顔色は益々黒く鉄色になり、手足は硬直して這いながらお手洗いに行っていました。山の湧水の出る池で冷やした桃の缶詰を、美味しそうに食べたのが最後で、十日目に息を引きとりました。二日後に算罰の引出しに遺体を納め、夾竹桃の花を一杯埋めて荼毘に付しました。

当時は「死」とは当たり前の事で、次は我が身の番と思われる世相で、涙一つ出ず、親孝行ひとつしないで逝つた兄を恨みました。一人も一度に亡くし、平和な時だったらさぞ打ちひしがれていたでしょうに、長崎全市が地獄のような有様で、その日の糧を探すのに奔走し、生活の安定再起に一生懸命だったのでも、静かに悲しみに浸つていても出來ませんでした。

被爆後四十年、月日は夢のように過ぎました。還暦の声を聞き、両親の思

も兄の自由奔放な生き方も、理解出来る気がします。

今日のようになつて物が溢れ、先進国と云われる日本を誰が想像したでしょう。

「お国のため」と云いながら亡くなられた方々に、一度見ていただきたいな気

がいたします。

このように発展出来たのも、亡くなられた方々のお陰だということを忘れることは出来ません。一度とこのような悲惨な事が地球上に起こつてはいけません。平和がいつまでも続くことを心から願っています。（六〇、三、二六）

医大二年生 糸山隼人

遺族 佐賀市中ノ小路八一二六 糸山綾子（母）

御鄭重なお便り頂きまして、有りがたく拝見いたしました。（中略）早いものであれから四十年もたちましたが、あの悲惨な思い出は、一日として忘れたことはございません。皆様も御同様と存じます。

別に感想と申してもございませんが、靖国神社から祭事の御案内を頂きますけど、老令のため、八月の命日だけは、東京の姪に代参させて居ります。一日も早く原爆を世界から無くする事を、お願ひしたいものでございます。

ただ毎月の命日にはお寺さまに来て頂き、お経をお願いして居ります。それが何よりの心の落付だと思いまして、四十年かかさずに供養致して居ります次第でございます。

名簿の方は今迄の結構でございます。又、八月の命日にお目にかかるのを、楽しみに致しております。

医大二年生 江口

遺族 佐賀県神埼郡三田川町田手 江口虎三郎（父）

江口トモエ（母）

今日此の頃、やつと春らしくなつて参りました。先生御一家にはお変わりもあらせられませぬ御様子、何よりとお慶び申し上げます。

さて、先頃書面頂戴致しまして、有難く存じました。月日の流れ矢の如くと申します通り、あれから四十年になろうとしています。「忘れな草第七号」を出して下さる由、お世話様で御座います。早くお返事をと思いつつ、丁度その頃より主人こと体調を崩しまして、今検査のため県立病院に入院中で、帰宅し

たらと思いつつまだなので、右御諒承下さいませ。病めば尚成人した息子の夢を見るこの頃で御座います。先ずは右お詫びまで。かしこ（六〇、四、一九）

医大二年生 加藤 良明

遺族 東京都品川区旗ノ台三一六一三 千本松 逸子（妹）

御無沙汰申上げております。

先日は思い出の手記のこと、お書きさせねばと存じながら、六十年間病気一つしなかつた健康な主人が、不注意から大腸の大手術を致しまして、このことやつと元気をとりもどしつつあり、やつと安心する境地になりました。

切角の御要望にお答え出来ず、心苦しく存じます。どうぞお許し下さいませ。

くれぐれも御身体御大切にお過ごしの程、心よりお祈り申上げます。
(六〇、四、一八)

医大二年生 古賀 洋一郎

遺族 佐賀県杵島郡江北町上小田二八〇一 古賀 和彦（弟）

今は已に亡き父説一が、原爆の犠牲になつた兄洋一郎の事を、死の直前まで忘れられずにこの世を去つて、五年が過ぎました。

今頃はあの世で、戦後の日本の復興や、遺族会、慰靈祭、更に名碑の事や靖国神社合祀の事など、又それまでに至る経過や皆様方の御尽力について、父子二人で楽しく語り合つてゐることと思います。

先月ある地方誌に、親友であった今泉正隆氏（第七十二代警視総監）が、「この人と語る」という見出しで、「昭和二十年八月九日午前十一時過ぎ、古賀洋一郎君は長崎医科大学で、講義中に原爆の為に散華した。享年二十才、一瞬の光に堪えて学びつつ、君は彼の地に果敢なくなりぬ」。更に中学、旧制高校時代のエピソードや、十七才の少年時代に書き綴つた論文の事などを織り交ぜた一文を寄稿してありました。高令化社会を迎えた現代から考えると、兄は

この世に生を受けて僅か二十年、本当に駆け足で人生を通り過ぎてしまつた短年、今は樹木が繁り、八月九日にはいつも蟬が一生懸命に鳴きます。私にはその

い一生であり、既にあれから彼の人生の二倍の四十年が過ぎ、その間に父はもうこの世を去りました。この新聞が私の地域には配達されない事を知つた兄の友人達や、知り合いの方々から、記事の切抜やコピーまでして送つて頂きました。早速兄と父の靈前に供えて、今も尚変わらぬ友情を報告しました。その友達の方々にお札を申し上げたところ、「彼は若くして逝つて本当に無念だつたでしようが、しかし彼はまだ生き続けておりますよ。永遠に。だからこそこの様な記事になるのです。」という意味の言葉が返つて来たのには、驚きと感激で強く胸を打たれました。

実は兄の遺体は、病理学講堂から穴弘法に至るまで、八月十一日以来何回となく足を運んで父が探したにも拘らず、遂に遺骨を確認出来ず、数名の級友と思われる方々の遺骨を分骨して頂いて帰宅致しました。「魂は生きている。」と兄の友は云つてくれましたが、弟の私は、兄と同じ講堂で爆死した級友後藤祐碩の妹と結婚し、父は八十四才で他界致しましたが、母は脳卒中で倒れながらも昨年米寿を無事に迎えました。幸に私共六名兄妹の残りの五名は、それぞれ平凡ながら平和な家庭を築くことが出来、これも兄の靈の加護のようと思える今日この頃です。

昭和二十七年頃、私がまだ小児科教室在局時代の暑い原爆記念日に、故藤井伊織さん（同級生、原爆死亡）の父上初一樣が、メモ用紙に書いて渡された句が、今でも毎年の記念日には思い出されて忘れられません。

○ 言うまいと思えど暑さ原爆を

医大二年生 後藤 祐碩

合掌

(六〇、四、二七)

遺族 佐賀県杵島郡江北町上小田二八〇一 古賀 敦子（妹）

今年も亦美しい花の季節となりました。

花さかで散りにし兄をしのびつつ。何もなかつたグビロが丘に立つて四十

蟬の声が、いつもお経のように聞こえます。

兄は物静かで優しく、テニスが上手でした。私の友達がステキだと云つて、よく騒いだものです。「兄の死」は信じられない事でした。父母の悲しみは、それはそれは深いものでした。出来る事なら私の命と引きかえに、兄を助けてかつたと心から思い、悲しかったことを今でも覚えています。私の息子が兄の亡くなつた年令に達した時、当時の父母の気持ちを思つて、胸が痛み涙しました。

八月九日は毎年、主人（原爆で死んだ古賀洋一郎の弟）の両親と私の母を車に乗せて、長崎に行つておりますが、母が亡くなり、父が亡くなり、今では寝たきりの主人の母がいるだけです。毎年お年寄りのお姿が少なくなり、淋しいものです。調先生のお姿を拝見致しますと、ほっと致します。私は動ける限り、八月九日には長崎に出かけて行きます。そして絶対に戦争のない世の中に頑張りますよう、原爆の犠牲になられた方々の御靈にお願い申し上げます。又、私の兄を御存じの方がいらっしゃいましたら、お会いしたいと思います。

(六〇、四、二七)

医大二年生 田 中 喜八郎

遺族 鹿児島市千日町一四一八 田 中 セツ（義姉）

この度は被爆四十周年記念に「忘れな草、第七号」を出版されます由、有難うございます。いろいろ考えましたが、喜八郎の遺骨を長崎に引き取りに参りました時が、いつまでも思い出されます。

八月九日の長崎原爆當時、医大の二年生に在学中だった弟喜八郎は、講堂で

は、「貴女方がいらして、喜八郎さんがどんなにお喜びになつておられるか、灯明が喜びにゆらめいて居ります」と申されました。

下宿に喜八郎の道具はあるのに、本人が居ないのは本当につらく残念でした。でも私達が頑張つて下宿まで辿りついた事は、どんなに喜八郎のためによかつたかと、後になつて思うことでした。

聞くと喜八郎は被爆直後から一週間余り、草野様ご夫婦の手厚い看護を受け、あの苦しい時に、真心を尽してお看病下さつたそうで、何ともお礼の申し上げようございません。今もつて感謝申し上げて居ります。

その夜は一晩中、枕元を流れる川の音などで眼れず、翌日は荷物をまとめ、遺骨を抱いて、ごつたがえす列車の轟き目に必死にしがみつきながら、母の待つ飯野へ帰つた事でした。

あれから四十年、母も亡くなり、喜八郎の兄も昨年九月に他界しましたので、妻の私が遺族代表者となつて残りました。戦争を知つている者も皆年をとつて、私などもこの平和が長く続くことを祈つて毎日でございます。

(六〇、四、八)

医大二年生 平 良 浩

遺族 大阪府貝塚市海塚三四一五 平 良 正 子（妹）

講義を受けていた最中に被爆したと、後日になって聞きました。その頃の私は母と一緒に宮崎の飯野に疎開しておりましたが、三菱造船の工員の方から、喜八郎が八月十七日に亡くなつたという報らせがあり、十日余りも過ぎてゐるのと、母を初め只茫然として、信ずることが出来ませんでした。

それでも氣をとり直し、先ず妹と二人で長崎に行つてみるとにして、大急

ぎで仕度をして出かけましたが、汽車は長崎駅まで行かず、道ノ尾駅で下車して、それから先は歩きました。丁度六十年振りの大震の後で道路は川のようになり、異様な臭気の中を時には膝までつかり、線路の上を歩くと、一步間違つたら渦まく下の流水にのめりこみそうになりながら、只黙々と歩き続けて、夕方に喜八郎が下宿していた草野様のお宅に着きました。

草野様方では玄関に仮壇が作られ、お灯明があげられていましたが、草野様は、「貴女方がいらして、喜八郎さんがどんなにお喜びになつておられるか、灯明が喜びにゆらめいて居ります」と申されました。下宿に喜八郎の道具はあるのに、本人が居ないのは本当につらく残念でした。でも私達が頑張つて下宿まで辿りついた事は、どんなに喜八郎のためによかつたかと、後になつて思うことでした。聞くと喜八郎は被爆直後から一週間余り、草野様ご夫婦の手厚い看護を受け、あの苦しい時に、真心を尽してお看病下さつたそうで、何ともお礼の申し上げようございません。今もつて感謝申し上げて居ります。その夜は一晩中、枕元を流れる川の音などで眼れず、翌日は荷物をまとめ、遺骨を抱いて、ごつたがえす列車の轟き目に必死にしがみつきながら、母の待つ飯野へ帰つた事でした。あれから四十年、母も亡くなり、喜八郎の兄も昨年九月に他界しましたので、妻の私が遺族代表者となつて残りました。戦争を知つている者も皆年をとつて、私などもこの平和が長く続くことを祈つて毎日でございます。

い。貴方の短かつた青春に、コーヒーでくつろいだりしたひと時はあつたでしょうか。

父の突然の死の為、母子家庭で育った六人の兄妹の中で、兄は早くから期待された長男だったのです。気がつくと何時も机に向かっていた後姿の、くりくり坊主頭を覚えています。中学に入つて友人数人がよく集るようになり、話が尽きると必ず校歌になり、続いて「ああ玉杯に」、更に「都の西北」になるのです。そのバンカラな雰囲気に、内職のミシンをふむ母は嬉しそうな顔をするのでした。兄達は下駄ばかりで町の桟橋へ行き、海に向つて大声を張りあげていた。「やるぞー」「東大だあ」等と、大それたことを叫ぶのでした。

故郷の沖縄県宮古島は、今までこそ大阪から空路で二時間四十分程で行けますが、その頃は宮古島から鹿児島まで船で三昼夜もかかるのでした。兄は地理的に近い台北医専へ、との勧めもあつたのですが、やはり日本本土で勉強していくことを決意しました。

茂姉は早くから家を離れて台北医大附属病院の看護婦となり、母に送金していましたが、兄の学資の不足を補う為に、更に南支那の広東にある博愛会病院に移りました。そのために一家は宮古島、広東、長崎、東京とバラバラになりましたが、目標は一つ、兄の医大卒業までは頑張る、ということでした。このように色々出費を節約しながら兄を支え続けた茂姉も、昭和十九年二月五日、廣東から帰国する途中、南支那海でモンスーンに見舞われ難航している時、グラマン機に攻撃されて、船と運命を供にして帰らぬ人となりました。勿論姉の遺品は何もなく、白衣姿の写真一枚が残るのみとなりました。

昭和十九年の何月だったか、兄がひょっこり東京に姿を見せた。理由は宮中時代の親友が陸士に入校するので、学生服を身に着けたが、実は退学しようかと思い悩んでの上京らしかった。茂姉の死は兄の心に大きな傷を残し、母にもこれ以上苦労をかけてよいのか、又、戦局は益々不穏で、最悪の場合には沖縄がどうなるか判らないのに、とても学業を続ける気になれ

ない、とでも一然し私には兄の心情を深く察してあげることは出来なかつた。長崎へ戻る兄は、デッキで右手をあげ、ではね、と言ひたが、無理に笑顔をつくつたのだと思う。東京駅での別れは鮮やかに残つてゐる。昭和二十年、沖縄も戦禍にまみれ、米軍が上陸してよりは、母との通信も全く途絶え、勿論送金等もなかつたことでしょう。兄は八月九日のその日まで、無一文だったのでは、と思うけれど、はつきり知ることは辛いから、母とはなるべく話し合わないようにしていました。

昭和二十九年、母はどうしても七高を見たい、長崎の土をふみたいと云うので、宮古島を離れました。いろいろの曲折を経て、大阪で生活するようになりますが、五十八年に母も逝きました。

母は兄のお蔭で戴ける年金で、高野山に詣でたり、老人会で編物をしたりで、大きな慰めとなっていました。今更のように、お骨折りくださいました方々へ、厚く御礼を申し上げます。

○ くぐりこし無惨も今は縁ぞと 風は薫れど癒されがたく
○ 狂おしく綾蝶翔あはべるたつ高々と 八月九日君失せし天空

医大三年生 津 和 恵 吉

遺族 西宮市大井出町九一三三 津 和 ハ ツ (母)

あの恐ろしい原爆……忘れる事の出来ない日、厭やいや思い出すまいと思つても、思うても悲しくなります。

あれから早や四十年もたち、光陰矢の如く日の経つのは早いものです。昔を思ひ出し、私が長崎へ行つた時に、恵吉は勉強して早く帰り、父母の病気の時にはよい医者となつて、身体を診られるよう勉強します、と元氣に申してくれたのが、目の前に見えるようです。あの原爆を長崎まで持つて来て落とすとは夢にも思いませんで、今思い出しても本当に恐ろしくなります。

恵吉のお友達だった大勢の方々の親ご様も、私と同じ思いで悲しんでおられることでございましょう。私はいつも仏様の前で、昔をしのびながら恵吉のご

冥福を祈つております。ああ恐ろしい、ほんとに恐ろしいことでござります。

私は三年前に夫を亡くして、今八十七才で淋しく生き残っております。調先生からお便りをいただき、懐かしくもう一度長崎へ行けたらお目にかかることが出来ると思いますが、よる年なみでどうなるか分りません。長男は長崎へ行く折もあるから、お日もじさせていただくと申しております。その節はどうかよろしくお願ひ申し上げます。

*

*

(六〇、四、六)

遺族 津和義昌（兄）
日一日と春らしくなつて参りました。平素は御無沙汰ばかり致して居ります。

この度は結構な御計画、誠に感慨にたえません。何年前でしたか、長崎大学に皆様の御尽力で銅板碑の除幕式があつた時、母と一緒に先生のお宅にお邪魔致しました事を思い浮べて居ります。この次に長崎に出向きました節には、是非お目にかかりたいと存じます。

私は去る五十六年六月に住友金属工業株の常務取締役を退任、関係会社の住金鋼材工業株の社長に就任致しました。現在はお蔭様で東京、大阪を元気に往来して居ります。

大阪では夙川で母と共に暮し、東京では家内と共に過して居ります。会社も東京、大阪の両方にありますので、とび廻つて居ります。又、中国（北京）には昭和四十一年より今日まで、三十七回行つて参りました。これも仕事の関係が殆どですが、一回は中国側よりの招待で、家内と二人、上海、北京、杭州（西湖）に遊んで来ました。（中略）

私は恵吉の兄です。恵吉が長崎での恐ろしい原爆の犠牲になつた事は、旧満州の吉林の豊満ダムで終戦になつたので、私は全然知りませんでした。

私は昭和十七年一月一日に入営、九月に東京陸軍経理学校に進み、卒業後直ちに見習士官としてソ満国境である黒河の第三四野戰道路隊の主経として赴

任、二十年四月に吉林の豊満ダムに移動、八月に終戦、ソ連軍の捕虜となり、ラーダ、エラブカの収容所生活を経て、二十二年十一月に帰国しました。その時母から恵吉の事、又、弟の計助が原爆の一ヶ月後に、米子の医専で亡くなつた事を聞かされ、二人の弟を一度に亡くした驚きは、外ならぬものがありました。勿論、その時の父母の嘆きは如何なものだったでしょうか。

恵吉とは次のようなことがあります。私は満州から在外二年の特別休暇で帰国、三月の大坂神戸の爆撃の最中に結婚し、四日間の生活で家に残つて居ました現在の家内千佐子が、長崎から休暇で帰宅した恵吉と、仲良く一緒に音楽会等に行つたとのことでした。

恵吉は小学校や中学時代から勉強に励み、そのこともあって私と同じ天王寺商業から灘中に転校、更に京都の三高に進学したのでした。三高で文乙だったため、当時の情況を考慮して、両親は長崎医大に進学を勧めたようでした。この時は私は満州に出征して居り、ソ連から帰国するまで恵吉の死を知らなかつたのです。今考えてみると、本当に残念でなりません。然し先生方の御尽力のお蔭で靖國神社にも祀られ、毎年八月十七日に、母や家内と一緒に参詣して居ります。母も八十七才になりましたので、最近は私と家内とで参詣して居ります。

母も今、弟が一人とも元気でいたら、と思っている事でしょう。これも戦争の悲劇でありましょう。（後略）

医大二年生 林 喜保

遺族 大阪府南河内郡河南町白木三〇〇 林 キヌエ（母）

(六〇、四、六)

今年は長崎に原爆が落とされてから四十年になります。この度、記念事業として「忘れな草、第七号」を出版配布して下さるとの事、ありがとうございます。

調先生初め役員の方々のお骨折りにより、遺族年金や叙勲の恩典に浴しましたことを、深く感謝致します。主人は知らずに亡くなつておりますので、仏壇

にお参りする毎に、主人と喜保に話しかけ、共に喜んでおります。

喜保の幼かつた頃の事や、優しかった事を思いおこしますと、中学に上つてからも、時々主人とドタン、バタンと相撲をとつておりました。また書道部と謡曲部に入つて、それぞれ週に一度ずつ教え頂いておりました。

医大の制服を着、角帽をかぶり、大きな鞄を持つて通学する姿を見た時は、中学時代とは別人を見るようで、私はよくもこんなに立派に大きくなつてくれたものと、嬉しい思いをしたものでした。日曜日には主人と一緒に喜保を持つて出かけたことが、昨日のように思えてなりません。

長崎から帰省すると、一番に仏壇にお参りします。また私を背負つて、軽くなつたねと云いました。七月に帰省して長崎に帰ります時は、主人と共に大阪駅まで見送りました。窓側の座席に日本刀を持って、ニコッと笑いました。これが最後の見納めになるとは、夢にも思いませんでした。私もゼンソクが出来ますので、頭が痛くなつたり、ノドが苦しくなつたりして、いま病院に通院しております。

医大二年生 藤井伊織

遺族 佐賀県杵島郡白石町甘治 藤井克巳

(前略) 日頃原爆被爆者の事に就いて、且又、遺族の身上について御高配を戴き、有難く深く感謝しております。長年の御無音お許し下さい。

先日古賀和彦様から連絡をうけましたが、お便りが遅くなりました。亡伊織の母カクは、昨年一月死去(父初一は二十九年歿)いたしました。

次に亡父の川柳ですが、「さ」が正しいだらうと、私共も考えております。(後略)

(調 附記) この川柳は、二六頁の古賀利彦氏の手記の最後に書かれています。

医大二年生 堀家潤

遺族 京都府向日市森本町天神森六一五 山下通(妹)

毎年夾竹桃の花の咲く頃になると、今年こそは長崎へお詣りに行こうと思いつた。初めて立つその地には、遠い夢の中の記憶のような親しみがみちでいました。

そこには矢張り赤い夾竹桃が、咲き乱れていました。蟬しぐれの中、塔の周辺には不思議な静寂がたちこめ、多勢の仲間の方達と、眠っている兄の御魂に、よい所へ祀つて頂いてよかつたね、と語りかけ、長い時間立ちつくしました。

三十五年の年月、行こうと思えばすぐにも行ける隔たりの長崎だったのに、心中での道程が、とても遠かつたのでした。

長崎から西彼杵郡伊木力村の円満寺(ここで病没)までの道、瓦礫の中から這い出した兄が氣力を振り絞つて辿つたその山道を、是非通つてみたかつたけど、そこを通るには、余りにも思いが生々しすぎて辛い、もう一年、そして又一年と延ばして来て、漸く思いの風化されてきたことを感じ、又、戦争を知らない世代の私の子供達にも見せておきたいと思い立つて、丘の上に立つたのが、三十五年目になつていました。

諫早で下車してタクシーで、海沿いに、大草駅近くの円満寺を訪れました。供養を終つて、山越えに長崎に入りました。本当は、この道は自分の足で歩きたかったのに、兄が違うようにして辿つた道を、車で走るのは申し訳なくて、つらい思いをいたしました。

こうして私の心の傷はいつしか風化され、長崎の旅が終り京都についた夜、大文字の送り火が、赤々と燃えていました。そして私の戦後に一つの区切りがついたことを感じました。けれども調先生をはじめ、御存命の親御様の傷跡は、愈えることなく続くのであるうかと、痛ましく思つたことでした。

剛毅朴訥の氣風に憧れて、五高に入った兄でしたが、人情に厚い長崎の地で終焉を迎えたのも、何かの因縁だったのでしょうか。

因縁といえば、医大里仁寮で同窓であり、忘れな草に思い出を書いて下さった河合様に、京都でお目にかかることが出来ました。御子息が結婚されて上洛され、そのお嬢さんが私の知人のお嬢様であったということで、目に見えない縁を感じたことでした。生きていたらと、兄の顔を河合様にダブらせて、思い出話にふけりました。又、円満寺の住職様（兄がお世話をなった當時は小学生で、枕許に食事を運んで下さったそうです）も、京都へ立寄つて下さり、縁といいうものをしみじみとかんじたことです。

こうしてみんな年老いてゆきますが、仏間の額縁の中にいる兄は、いつも青春の真只中に微笑んでおります。忘れな草の数々の記録が風化されることなく、次の世代に語り継がれてゆくことを、心から祈つております。

医大二年生

三 村 寛

遺族 岡山県新見市新見一八一六一一 三 村 伸 二（父）

三 村 静（母）

（前略）さて、時は流れるとか、経つてみれば早いもの、悪夢の四十回忌がめぐつて来ました。四十年、一日として長崎を忘れた日はありません。愚痴とは千も万も知りながら、帰らぬ子の事がまぶたの底から去りません。何れの親御さんも同じこと、自分だけではないことはよくよく承知しながら……。

私共も両人無事で八十路半ばで、まだ何とかやつて居ります。一人の娘も京都と岡山で一。幾年か前に先生のお宅をお訪ねしました京都の孫一人のうち、兄の方は京都府立医科大学を出まして、精神科医として日赤に勤めて居ります。弟の方は公立高校の外語の教師をしており、共に忙しく働いておりますので、たまに老人の方がお出向くような有様です。こんなことで岡山と京都へ一年に一、二回逢つております。平常は淋しい二人暮しで居ります。御地へも一度お邪魔致し度う存じて居りましたが、今日という日が参りません。斯うして

終の日まで何とか頑張りましょう。

主人は以前に申し上げたかも分りませんが、八十の手習いでお習字の塾へ通い、私は下手なりに古文書の勉強を少しずつやつております。そのためか目はよく見えないようになり、文字は忘れるので抄りませんけど、兩人ともどうにか閑をつぶして居ります。（後略）

二仲 住所の番地が、一八五八から一八一六一一に変りましたからお知らせ致します。

医大二年生 溝 口 哲 郎

遺族 山口県下関市大字清末一二四三 溝 口 サ ダ（母）

長男の哲郎が長崎医科大学から、予告もなく休暇で帰宅したのは、原爆投下前の五月某日でした。その折、一家六人で写した写真から、彼一人が欠げようとはー。

哲郎は酒も煙草も用いませんのに、配給の煙草を持つて帰りました。半分は

父に、半分は旧高等学校の恩師に、と申しました。それは、先生の幼い坊やがお父さんの為に、配給の列に並ばれるのを知つていたからでした。長崎では人別に配給があるので、煙草をすわない彼も、一人前に貰えるのだと申しておりました。

帰校の時も、一日位は都合がつきますのに、実験用の小動物が配給だけでは可哀そうだからと申して、草を刈つて持つて帰りました。

旧制中学時代は、出征した留守農家の勤労奉仕に行つて居ましたが、体格は良く見えるのに呼吸器が要注意のため、先生から行かぬようにと注意されていきましたのに、自分から進んで参加しておりました。

哲郎の性格は明るく、趣味は豊かで、化石の採集に秋芳台の近くの山へ朝暗いうちに出かけ、夜が遅くなつたので、途中から電話で知らせて來たことなど思い出されます。後にその化石は、山口高校の恩師が母校にお持ち帰りになりました。又、同好の方々にも差上げました。

明るい性格のために友人も多く、団欒もしております。又、一人の友人と、死後の魂の事など真剣に語り合っていたのも、忘れられない一ことです。

書物も父の影響か、よく集めていましたが、最後に帰りました時には、謡曲の本など家に持ち帰りました。

物資が乏しく、衣類の新調なども難かしくなり、父のオーバーを分けるのに、弟には京都が寒い所だからと云つて、生地の厚い温かいものを譲り、長崎は暖かいので少し薄いものを、自分で選んで着て行きました。

彼のいとおしんでいたあの花、この木、語りかけているようあります。戦いの庭で、海のもくすとなり、或いは空で、或いは内地で、戦争の犠牲になられた方々の、みたまの安らかにありますよう、お祈りするのみであります。

* * *

先生には亡き御会員や、沢山の御教え子様方の事などで、如何お過ごしでありますかと、今更ながらお察し申し上げております。御高令にも拘りませず、この度の御事、誠に有難く恐縮致します。

私は八十三才のぼけ老人となりまして、主治医の健康管理を受けながら、割合に明るく、この地でお墓の守りをしながら、その日暮しをさせていただいております。（後略）

（六〇、四、一七）

医大二年生 菅田 正勝

遺族 大牟田市日ノ出町三一七一四 菅田 ヤス子（妹）

今年の春は雨が多くて、桜見が出来るかしらと心配して居りましたが、満開の頃は晴天が続いて、美しく咲き揃つた花を見せてくれました。

花の季節に、学生の明るい顔を見掛けるようになりますと、若い学生のまま逝つてしまつた兄の事を、自然と思い出します。

あの時代こそ、平和な時代では考えられない狂気の時代だったかも知れません。テレビで度々写し出される学徒出陣の雨中行進のシーンを見ても、涙ぐんで居ります。彼等はどんな気持で行進していたのでしょうか。現代の若者達を

が、電車の中で漫画の本を読んでいるのを見ると、同じ位の年令でも、こうも違つてくるものか、四十年の歳月の隔たりは、恐ろしい程でござります。

明治、大正、昭和の三時代を生きた母は、米寿を迎えるとして居りますが、幾度かの病の度に奇跡的に再生し、まだまだ気力充分でござります。六十路にかかるたゞ供達の方に、疲労の色が出て参りましたが、皆で支え合つて、母の面倒を見ながら毎日を送っております。

今も地球の何處かで、果てしない戦争が続いています。戦争を知らない世代が大半になりましたが、何時までもこの平和が続きますよう、祈るばかりでございます。

（六〇、四、一六）

（調附記） 菅田正勝君の遺族代表者が、忘れな草の三号、四号、五号の名簿では「菅田ヤス（母）」と云い、今度の忘れな草では「菅田ヤス子（妹）」となつてゐるのを不審に思い、問合せたところ、次のような返事が参りました。

「母は今まで『マサ』と呼ばれていたのですが、戸籍面では『ヤス』となつておりました。どこで間違つたのか、私共には判りません。昔の田舎の村役場の事ではつきりしておりません。両親はその辺の事情を知らずに、『ヤス子』と命名したのだろうと思います。」

医大二年生 百崎 知次郎

遺族 佐賀市水ヶ江町三丁目一〇一一八 岸川 つゆ子（姉）

早いもので、今年は原爆四〇周年を迎える。亡き弟と別れて四十年もの歳月が経つたことが、信じられない様に思われる。

昭和二十年七月十六日に叔父が病死したため、弟は急ぎ長崎より帰省した。百崎の菩提寺の玄関で、彼から数珠を受け取つたが、その後長崎へ帰つていく彼を見送つたのが、今生での最後であった。そのまま再び会う日はないなどとは、夢にも思わず、元気で去つて行く後姿は、今も目に焼き付いて離れない。

どんな言葉も尽くせぬ程、只残念でならない。若い盛りを散つて逝つた人達を

思う時、今更ながら誰にもぶつけ様もない怒りさえ感じるのである。

四十年の間には、父も母も亡くなり、世の中はすっかり変わってしまい、戦争を忘れた、若しくは知らない人々が、大半を示す世代となつた。

「長崎」と聞くだけでも、私は悲しみとなつかしさで一杯になる。長崎は、若い父が医学を学んだ町であった。又、母の兄は内科の教授として、父達の師でもあつた。弟は原爆の洗礼を受けた。そして今この地に私の娘は活水短大の英語教師として、教鞭をとるようになった。長崎との縁の深さを、しみじみと感じるのである。

何よりも有難いことは、調先生御夫妻が御健在である事である。お一人もの御子息を失われた先生を、同じ遺族として神はお残しになつたのである。そして先生は私達遺族にとって光となつて頂いた。再び「忘れな草」を出版して頂くことは、御高齢の先生にとって、随分な御負担をお掛けする事になるのに、何のお手伝いも出来ぬことを申訳なく思いながらも、「続忘れな草」の刊行を、ひたすらお待ちしております。(後略)

原爆忌の俳句五句

- 長崎に坂そそり立ち原爆忌
- 老いが早く日除けの傘や原爆忌
- キヤンバスを這ふ蟻も又原爆忌
- 悲しみの水を噴井に原爆忌
- 原爆忌命の水を高く捧ぐ

医大二年生 山 田 邦 久

遺族 大分県日田郡天瀬町本城 山 田 邦 子(母)

原爆犠牲者の四十周年の供養も間近に迫り、その折に是非お参りしたいのですが、アメリカ在留の三男治久が、間もなくまたアメリカへ帰らねばならないので、その前に是非邦久兄さんのお墓にお参りしたいと云つて、私も一緒に出かけることに致しております。

私は上から三人が男の子、その下三人が女の子、末が男で合わせて七人の子持ちでしたが、長男と三男が戦地に征き、中の次男邦久が依託学生で、いずれは戦地へ征く覚悟でしたが、夏休みになつても帰らないので、不思議に思つていました。

私の村は熊本県境の小さな山村で、昼間は電気も来ないし、世の中の事は一切分らない有様でしたが、久留米の親戚の人々の話で、やつと長崎の原爆の事を知つたような訳で、主人も余りの事に病気がちとなり、昭和三十年に死去し、私も大分弱りましたが、今八十三才でまだ何とかやっています。

長男も天ヶ瀬町長をやつていますし、末弟も京都で医者になっています。遺族会の世話人の方々によろしくお伝えくださいませ。(六〇、四、三)

別れの繋り

遺族 山 田 治 久(弟)

あれは戦争の終つた昭和二十年の初めであつた。温泉街の小さな駅の土手には、盛りを過ぎたばかりの桜が、新芽を伸ばしはじめていた。その下には、満十九才で徴兵になつた数人の若者を見送る為に、わずか十人足らずの人々が集つて來ていた。

そして駅のホームには、まだ幼氣の残つた初年兵の家族の人達が、浮かぬ表情で、入営の決つたその子や兄弟達をとり囲む様にして、汽車の到着を待つていた。

その中に混つて、大学の黒い制服に角帽をかぶつた若者の姿があつた。襟には陸軍の依託学生の記章をつけている。二才年下の私の入営を見送りに來ている次の兄の邦久で、長崎医大の二年生の学生である。長兄はすでに南支の戦野にあって、又、今日は私の入営である。右手には私のために、ウグイス色の風呂敷に包んだ汽車の中でも食べる弁当をかかえている。それは祖母や母が、これが多分私の為の最後になるかも知れないと思って、心をこめて作った手料理である。

来て貰いたくない汽車が短い汽笛を鳴らして、定刻通りにホームにすべり込ん

で来る。窓際の椅子に坐った私の膝の上に、角帽姿の兄は手に持っていた弁当を押しつけるようにして置くと、肩を軽くたたいて、「俺も学校が終つたら直ぐに征くからな。それじゃ元気で…」と云い残すと、動き出した汽車から慌てて飛び出して行つた。これが兄が私に残した最後の言葉にならうとは、神ならぬ身の知る由もない。

その年の夏が過ぎようとする頃、長い暗い戦争は惨めな結果で終つた。薩摩半島の守備についていた私は、栄養失調になりながらも無事に、土手に桜のある駅に帰つて來た。國破れて山河あり。故郷の自然の姿はそのままである。駅前の広場を、一人とぼとぼ歩いていると、駅前の店先から出て來た中年の女人の人があ

「まあ、帰つて來たですか、そんなんじや苦労したでしょねー、可哀想にー、それに兄さんが長崎でねえー、氣の毒なことで。」

「えっ！」

「まだ知らんとですか、特殊爆弾でねえー。」

軍隊内は世間とは別世界である。特殊爆弾が広島に、それに続いて八月九日には長崎に落されたことは、軍の情報としては知らされていた。しかし、その惨状は風聞として伝わつて來る程度にしか知らない。

それから暫らくの間は、フラフラと広場を横切つて行く。征く者に送る側が云う別れの言葉は、殘る者に去り行く人の云う別離とは、おのずから違うはずである。

あれから四十年の歳月が流れ去つてしまつてゐる。それでも、この逆になつたと云う不条理の想いは、心のヒダの中に別れの翳りとして、いつまでも残つてゐる。

その時に涙を流した母は、八十三才になつた今も氣丈夫にしてゐる。南支から無事に帰還した長兄は、故郷の町の町長の職にある。あの日、今は亡き兄と共に見送りにホームに立つてゐた弟妹達も、それぞれに独立して元氣で過して

いる。そしてこの追憶を記しているあの日の入當の私は、サンフランシスコで元氣に二十数年を過し、今四十年振りに往時を偲び、兄の靈を慰めるべく、あの地を訪れ、丘の上に立とうとしている。いまは言葉もなく感無量、ただ合掌するのみ。

医大一年生 淩山明生

遺族 兵庫県西宮市若松町四一三三一 凪川パークマンション六〇七号

淺山富雄（父）

（前略）あれから早くも四十年が経過したとは、感慨無量のほかございません。その間、先生には御老体益々御健在にて、何かと御高策を実行遊ばされ、感謝に堪えません。

殊に明生の遺族給与金が、毎年の如く若干増額して拝受致しました事には、衷心より感激しております。一昨年は又、叙勲を拝受致しまして、厚く御礼申し上げます。

ただ残念なのは、私事一昨年十一月から脳血栓のため、現在も引続き入院中につき、何ら積極的なお手伝いも出来ず、失礼しております。悪しからずお許しの程願い上げます。

右のため、発病直前に出来ました追悼歌七首をお送り申し上げます。よろしく御採用を願い上げます。

八月九日を偲ぶ

- 八月九日の長崎に我は来て 平和の像に憶ひ繁なる
- グビロが丘ここに来てわが悶ゆるか 松は鳴れども草繁れども
- 三十八年既に経れども常若き子が 魂は生くこの丘悲し
- 水を欲り苦しみ死にし万の上 せめては注げ悼みの雨よ
- 愛しけやし曠野を叩く夏雨の 沁然たるを見まく我が欲る
- 汝が母も既に逝きたり黄泉の国に 互いに抱きよろこび泣けるや
- 老い独りの父われもまた汝が許に 移りか行かむ思い残すなし

医大一年生 川崎正之

遺族 鹿児島市真砂本町一一五 川崎秋子（母）

（前略）月日のたつのは早いもので、四十年たちました事は夢のように思ひます。

正之は大連育ちで、伏見台小学校、大連第一中学校、旅順高校から、最後の船で長崎へ参りました。そのとき高校の日記帳や写真帳を残して行きました。

当時は勤労奉仕やら、友人の入隊やら、あの時代の事など今の孫達に語つても、よくは分らないと思います。

中学の時は愛鳩班長、高校では委員、騎道班に入つており、旅順から大連まで将校と同列先頭で、途中我が家前の通り、母校一中で休憩した時の姿、いつまでも忘れられません。

長崎からの便りでは、茂木にビワの買出しに行き、腹一ぱい食べたとのこと。あの頃の食料難の事など思い出し、今の有難い世を毎日感謝して暮しております。

正之のお骨は本人のものを小泉様という方から貰い、八月十五日の命日に、朝夕供養致しております。お墓も近い所にあって、まだどうやら歩けるという事はありがたい事です。また朝夕心配なく暮して行けるのは、先生初め他の皆様のお蔭と思っております。

主人栄之丞が亡くなつて九年、孫達も結婚して、ひ孫も生れ、私も八十四才になりました。長男（正男）の家族と同居し、何の不自由もなく暮させて頂いております。そして、いつまでもいつまでも平和が続きますよう、祈つております。

医学部一年生 篠原邦夫

遺族 長崎市新中川町一一一八 篠原修三（兄）

四十年一

往古茫茫たるものがあります。

その年の春、母が亡くなつておりますので、わたくしら残された兄妹五人にとつては、忌まわしい四十年前であります。

その残された兄妹五人も、筆頭のわたくしが六十二才、末妹が四十九才、それぞのその子たちも三十才から十六才までの九人、故人にとっては甥や姪にあたる子どもたちになります。故人邦夫は次男でした。亡くなつたときの年令が二十才でした。

いま、甥や姪たちの年令と思い合せて、痛ましさを禁じ得ません。

先日も、二十才になった息子を持つ妹がやつてきて、「このトシに邦夫兄さんは亡くなつたのかと思うと、ゾッとする」と、母としての実感と妹としての想い出をとりませて、シンミリしていました。

四年という区切りが、また多くの人に、悲しみと想い出を新たにしてくれます。この四十年が平和でありすぎたために、その悲しみと想い出が、いつもでも鮮烈のように思えます。

ことしも亦、この九人の甥や姪がお墓参りに行くならわしが、みずからたちの發意で続けられてゆくことでしょう。

医大一年生 菅原寮二

遺族 北九州市戸畠区境川二丁目一五一四 菅原千代（母）

御芳書忝なく拝受いたしました。（中略）

私は今年八十九才（明治二十九年四月二十九日生）になりました。故主人菅原文彦は昭和五十五年四月十二日、胃潰瘍にて昇天いたしました。私は看護中に電気のコードに足を引かけ、左足を三ヶ所も骨折いたし、今日もやはり歩行が不自由で、その上老化も加わり、オトボケババサンになりました。またメマイがして字が上手に書けませんから、感想はいずれそのうち、ゆっくり思いめぐらすことにいたします。（後略）

遺族 菅原和彦（兄）

私は原爆死しました寮二の兄でござります。

弟の寮二は、長崎医大に入学した其年の八月十八日に原爆死いたしました。

父が長崎医専を卒業し、長く長崎に住んでいましたので、友人や知人も多く、その地で医学を学ぶことに誇りを持っておりました。

父は昭和五十五年四月十二日、八十八才の天寿を全うして昇天しましたが、母は現在八十九才を迎え、健康に恵まれて、私のところで暮しております。祖父の時代からの開業医を継いで、五十年間住みなれた久留米の地を離れ、一年前より私の方に参りました。

長崎の地は、父にとりましても、弟にとりましても、懐かしくも忘れることが出来ない第二の故郷であります。父文彦は大正七年に長崎医専を卒業し、昭和五年に久留米に帰って祖父のあとを継ぐまでの十五、六年の間、長崎で暮し、長崎の人となつておりました。初め長崎傳染病院（私立長崎病院の前身）に勤務していましたが、古きよき時代でもあり、夢多き若き日を過したわけでした。父の長崎時代の自慢の語り草の一つに、長崎大学Y M C A の創設と、寮の建設があります。寮は当時のものは既に無く、場所も変りましたが、錢座町にある「浦山寮」として、今に至るまで引き継がれています。

弟の寮二は、敗戦の色濃い昭和二十年の春に、長崎医大に入学しました。この時の父の喜びは大変なものでした。その長崎に原爆が投下されるとは、古きよき時代を過した父の長崎と、短くとも戦争の日々を過した弟の長崎と、戦後四十年を経た現在の長崎とを重ね合せて見る時、平和の重みをひしひしと感じます。私たちは平和の証人にならなければならないと存じます。

医大一年生 竹 本 文 壊

遺族 広島県豊田郡木江町木江

竹 本 春 枝（母）

雨又雨と、毎日のように降ったり曇ったりの天気が続いていますが、四月になると、やっと春が来たかのようを感じる今日この頃でございます。先生には御高令にも拘らず、私共のために色々御尽力下さいまして、あの優

しいお顔を思い出し、有難く存じ上げております。私もお陰で何とか八十二になります。

然し体は寝たきり老人と等しく、何事も自分一人では出来ず、皆様の厄介になつて居ります。子供も男五人、娘二人居りましたが、長男次男三男を喪い、残つた四男が木江で婦人科を開業していますので、今は其處で床について居ります。

主人と二人で木江町明石に住んでいた頃に、四男が木江で婦人科を開業していましたが、昭和四十七年に主人が七十八才で死亡し、私は一人で明石で暮らしているうちに、五十一年九月に呉の国立病院に入院して卵巣の手術をし、次で腎臓に石が発見されましたが、老年ゆえ手術が出来ず、家で水を飲むように云われて帰されました。

その後五十五年十一月には、明石の表庭の石につまずいて右大腿部骨折を起し、五日市の整形外科に入院してリハビリ等で訓練を受け、退院して自宅に帰つてからも、色々の器械を求めて練習しましたが、関節リウマチのため幾度となく転び、とうとう歩けなくなつて、木江の四男の所に厄介になつております。主人の十三回忌も去年法要を行つて無事に済ませました。

年を重ねるに従つて頭も呆けて参り、字も忘れて間違いだらけで申訳ございません。主人も呉の国立病院で死去致しましたが、その頃は少々呆けて色々思ひがけない事が起りました。本当に老年になると衰れでございます。然しごく安らかに、眠るが如く息を引きとりました。私は色々手を尽して、悲しみの中に喜びを味わい、自分もあるの姿で死にたいと心中で一人叫んで居りました。

主人の死後は、私の心も乱れ勝ちで、宗教心のある方を訪ねては心の安らぎを求めて居りました。幸に主人のイトコに当る女人が広村にいるので、娘の婿に車で連れて行つて貰い、一周間程滞在して心も落ち着き、木江へ帰つて参りました。

○ 白髪は何を教えて去りにけむ 限りある身の我を知れよと

(六〇、四、二三)

医專仮卒業生 橋 渡 俊 夫

遺族 長崎市千歳町一一一六 橋 渡 淳 三 (弟)

昭和十年に父が往診先の患者で倒れて急逝した時は、子供達はまだ小学生でした。その後母の手一つで育てられ、十年経った昭和二十年の原爆の時は、長兄(俊夫)は付属医専を仮卒業して角尾内科に勤務して居り、次兄(浩二)は医学部二年生、三男の私は五高の二年生でした。

原爆が落された当時、私は五高理乙の二年生で熊本にいましたが、理甲と文科の同級生は、勤労動員で丁度長崎三菱造船所に出動していました。学校当局に長崎の状況を尋ねましたが、ただ「五高生は全員無事らしい」と云うばかりで、それ以外の情報は全く判りませんでした。

八月十五日の終戦後すぐに、疎開先の佐賀の田舎に帰りましたが、汽車を乗組ぎ、鳥栖で一泊せねばなりませんでした。鳥栖駅で長崎から鹿児島へ帰る七高生七、八人が、駅の隅に屯しているのに会いました。皆弱り切って、黙つてうずくまり、一言も話すことが出来ません。リーダーの一人が漸く、想像に絶する爆弾であること、中心地が医大の付近であることを話してくれました。急いで帰宅すると、母は今朝(十七日)叔父と一緒に、長崎へ発った後でした。女一人ではとても無理だというので、自宅でヤキモキしていたところ、「俊夫君がお母さんに会いたがっています。」と兄の看病をしていた方からの便りに、取るものも取りあえず、大急ぎで出発したのでした。

私は姉と共に折返し白石駅へ行きましたが、汽車はいつ出るとも判らず、駅で一夜を明かし、朝五時ごろ来た貨車につめ込まれ、正午過ぎに浦上駅に着きました。駅に降り立つと、一面焼野が原の丘の上に、大学病院の建物だけが見えていました。道路は一応人が歩けるように片付けてありましたが、道端にはまだ馬や犬の死骸が横たわり、悪臭を放っていました。

大学病院正門を通り、石畳の坂を登り、南講堂への急な坂を登りつめた処で、一人の学生さんに会いました。その方が運よく次兄の同級生の田中さんでした。「兄の俊夫が高北病棟にいるそうですが」と云つて尋ねると、「お兄さんは昨日亡くなられました。」との答、「浩二は?」と尋ねると、気の毒そうに「まだ行方が判らないそうですよ」との返事に、今まで張りつめていた心が急にゆるんで、腰がヘタヘタとその場に座り込んでしました。

田中さんは叔父と二人で焼け跡の材木を拾い、井型に組み、死体を乗せ油を注いで、火葬して下さったとのことでした。田中さんは後日病氣でお亡くなりになつたと聞きました。

母が病院についた時は、俊夫兄はコンクリートの壁に直射を遮られ、傷一つなく元気そうだったので、「これは助かるのではないか」と思つたそうですが、母と会つて安心したのか、暫らくして黄色い胆汁を吐き、粘血便を出し、「お母さん、左様なら、さよなら」と云つて息を引き取つたそうです。又「夜は冷えるから」と云いながら、篠島教授(当時助教授)が背広を脱いで掛けておいて下さつたそうです。

浩二は丁度病院の講義中だったので、その場で即死したものと思われます。同級生の故吉賀洋一郎さん(小児科吉賀和彦先生の兄)のお父さんが、原爆直後医大に行かれ、講堂の焼跡に机の形通りに同心円状に点々と並んだ白骨を、あちらから少し、こちらから少しと拾つて来られましたので、その一部分を分けて頂いて、浩二の遺骨と致しました。

帰途、長崎駅では切符の代わりに「長崎駅から乗車した事を証明する。」という名刺大のがり版刷りの紙片を渡されました。プラットホームは長崎を去る人々、家族を探しに来た人々で一杯で、皆いつもとも判らぬ汽車を、焼けつくような炎天下に待ちました。まだ被爆当時の着のみ着のままで、怪我をした人々も多く、中には血のついたシャツにパンツ、頭を血染めの手拭で縛り、体からは死体の腐敗臭がしている人もありましたが、全く厭な臭いには感じませ

んでした。

原爆の日には、毎年母と共にゲビロが丘に参拝していましたが、昭和三十四年にその母も亡くなり、毎年「馴れた顔の方々が、一人減り、二人減りして、次第に父母より兄弟へと参詣者が代つてゆくのを見ては、時の流れを感じさせられました。

しかし、今ここに筆を執つてみると、四十年も経つた今日も尚、昨日のことのようありありと当時の事が思い出されて参ります。昨年調先生から、「君は二人の兄を亡くしているんだし、八月十五日の戦没者慰靈祭に参列しないか」とのお薦めにより、喜んで出席させて頂きました。

天皇陛下の御参拝を受け、本当に厳かな式典でございました。

(六〇、四、二〇)

医專三年生 浅倉 多計久

遺族 北九州市若松区今光 丁目一〇一一六

浅倉 邦彦(弟)

追憶と近況

早いもので、あれから四十年になります。当時は中学二年生でした。当時の長崎医大の学生の御両親には、今では亡くなられた方も多いことと存じます。私の家でも父は七年前に亡くなり、母は八十三才ですが、お陰様で元気にしております。

当時のことは忘れようと思つても忘れられません。長崎に特殊爆弾が投下されたというニュースを知り、家中で心配しておりました。それまでは週に一度位、食べ物とかタバコを送つてほしいという手紙が来ていたのが来なくなり、家中が段々深刻になつて来ました。

終戦になつたので、父と私は駅の知り合いの人に切符をお願いして、夜行で長崎へ向いました。今は北九州から長崎までは三時間程度ですが、当時は一晩かかるつたように思います。諫早を過ぎた頃から空が白み初め、海上に近づくに従つて、山々が茶色に焼けていたのを覚えてています。

浦上駅のホームに降りると、顔に白い薬を塗った兵隊さん達が、沢山横に寝かされていました。父と私は直ぐに長崎医大へ向いました。道ばたには馬や動物の死体が放置されていました。医大につくと、壁に死者や行方不明の人達が貼り出されており、兄の浅倉多計久の名前も、行方不明者の中から見付けることが出来ました。

その時父が何と云つたか憶えていませんが、私達親子は家に帰ることにしました。家について母と姉にこの事を知らせますと、母は私達が探さずに帰ったことをひどく怒り、早速その夜に父と母は又長崎に向けて出発しました。長崎から帰つた時には、兄の血糊のついた診察着や学生服、そして聴診器等の入ったカバンを持ち帰つて来ました。カバンの中には両親宛の手紙が入っていました。学校の帰りにポストに入れる積りだつたのでしょうか。然し私はこの時程、父と母の偉大さを教えられたことはありませんでした。

兄も元気でしたら還暦を迎えることになるのですが、今ではどんなお医者さんになつただろうね、と家族で話をするだけです。不思議なもので、二十歳で亡くなつた兄ですが、私が五十才を過ぎても、やはり心中では兄として存在しております。四年過ぎても小さい頃に兄に注意された事を思い出したり、こんな事では兄貴に笑われる、と思い出す今日此頃です。

さて父眞一郎は昭和五十三年八月に、九十三才で亡くなりました。母はまだ健在で、我が家には無くてはならない一人です。八月九日の慰靈祭には、以前は両親を初めとして、親類の者まで一緒に参りさせて頂いておりましたが、高令になるに従い参加出来なくなり、残念に思つております。私が案内出来ればよいのですが、サラリーマンで仕事の都合がつかず、八月九日が日曜日であるように願つております。

私は多計久の弟で、新制高校三年の時、長崎大学医学部を受験しましたが、見事にすべてしまいました。父は医者が好きで、姉は医者に嫁ぎました。私は文科に進みましたので、宮仕えの身では休みも思うにまかせません。勤務先

は日本板硝子株式会社で、北九州営業所の責任者をしており、現在は光ファイバー等の光関係に力を入れております。(後略)

(六〇、四、一三三)

医専三年 浅田勝孝

遺族 横浜市南区井上ヶ谷中町三九 古賀良子(妹)

(調記) 浅田勝孝君の件に関しては、医専一年の時爆死した朝長習也君の実兄に当る村部準氏の手記を参照されたい。村部氏によると、浅田勝孝君は、村部準氏の実姉政子さんが浅田寅雄氏に嫁いで生れた長男で、村部氏の甥に当るそうである。

古賀良子さんは浅田勝孝君の実妹で、原爆で生き残り、成人の後古賀家に嫁がれたことである。浅田勝孝君の遺族代表者はこれまで村部氏だったが、氏の申出により、今後は古賀良子さんにつかわることとなつた。

医専三年生 麻生弘

遺族 大分県大野郡緒方町井上三七〇 麻生ミホ(妹)

被爆四十周年を迎へ、「忘れな草、第七号」の出版を企画なさいました由で、かねてから先生の原爆遺族に対しての御奔走を父から聞かれ、感謝申し上げてきました。

漸く年金支給が実現出来て、喜んでいました矢先、昭和五十二年三月三十日に父は他界致しました。孫に後継ぎの夢を託しながら帰らぬ人となつた父も、現在、大分医科大学六年生の孫を、草場の陰から励まして下さつてゐる事と存じます。

兄の遺骨には、當時天草兵团の一部隊に所属して、長崎の原子雲を日撃した近所の人々の句、

○ 長崎の真昼の夢の青葉佛

を供えて、見る度に涙して、両親の心境を回顧している次第でござります。

(六〇、四、二七)

医専三年生 足立幸男

遺族 烏取県境港市福定町三二〇一 足立つゆ(母)

恐ろしい原爆で長男を亡くしてから、四十年忌の長い歳月に感無量のこの頃でございます。当時はすべての望みも生きる力さえなかつた私を思う時、よく堪えたと思います。

昭和二十三年の三月十五日、次男の卒業式に参列するため、熊本へ行く主人に手を引かれ、乗物に弱い私も、ひつしに次男の晴れの日をよろこび、翌日は幸男の眠る長崎へと、悲喜交ごもの旅に、大学の角帽姿の学友に会つては涙、物を乞う浦上駅に降り立つては、どこかにこうして生きていて呉れたらと、涙にくれました。

○ 校門の楠のひこ生えすぐすくと 見上げて泣けり人の弱さに

慰靈碑の前の夫婦は、父と母の言の葉をすなほにきいて、この地に来て、無上の喜びが仇となりしことなど、など、生ある子に語る如く、つきせぬ思いに春雨の中を、いつまでも涙の限り泣きました。

あの時、お骨のほしい人は持ち帰るように、とありましたのに、どなたのか分らないからと、主人の頑張りにとうとう私は負けたことを、今なお心残りに思つております。草の中を歩き続けているうちに、医専三年の教室跡の標示を見つけ、あの子に出会つたような気持で、すがりついで又泣きました。

六十年間草木は芽生えぬと報道しましたのに、僅か三年後、空豆の花は咲き盛り、麦の穂の出揃う小径を歩み、街道を下つたあの日の事、忘れる事の出来ない思い出、そんな時若い御婦二人と一緒に、傘に入れて頂き、下宿先を聞かれるまま、古賀小五郎さんのお名前を語りました、「ああ、配給所の御主人、いい人でしたからね」と話して下さいました。みんな夢物語りです。

長いながいー。

意地つ張りで心身共に丈夫な主人も、四十九年の春、八十才にて亡子に迎えられました。幸に次男も近くへ来ましたので、私は暖い家庭の朝夕の勞わりに、

安らかな余生を送つております。

亡き伯父の意志をつき、孫も五十七年に富山医大を卒業し、医師として病院で研究を続けております。一つの楽しみでございます。

末娘の家は代々の歯科医で、長男は東京歯大の大学院に、次男も来春卒業見込みです。十二人の孫、曾孫も十四人おります。娘は三人共市内に居り、時折り集つて亡き人を語り偲んでおります。

遠い長崎の慰靈碑、清い慰靈の水、グビロガ丘を目前に描きつつ、皆様の御健康をはるかにお祈り申し上げます。

○ 新しき校舎病院建ちならぶ 小高き丘に吾子は眠れり

八十四才の老母 (六〇、四、二三)

医專三年生 有 富 重 康

遺族 長崎市弁天町一六一七 平野米男 (義弟)

(前略) 原爆の件に関しましては、いつも先生の大変なお手数を煩わして居り、感謝申し上げております。

義母「有富玉与」が亡くなりまして、恰度まる四年が過ぎました。先生には大変お世話になつてゐるという事を、母がいつも申して居りました。今後とも何卒よろしくお願ひ申し上げます。 (後略) (六〇、三、二三)

*

*

*

(調附記) 文中にある「有富玉与」女は、有富重康君の母堂で、遺族会の役員として度々遺族援護法の陳情に上京して頂きました。平素は元気一杯の方でしたが、昭和五十六年二月十四日、過労の為か心不全で突然逝去されました。御生前に受けた恩誼のため、謹んで御冥福をお祈りしたいと思います。

医專三年生 高木邦憲

遺族 長崎市滑石四丁目二五一一 陽奥祥子 (妹)

暑さが厳しくなり、夾竹桃の花が咲き乱れる頃になると、八月九日が巡つて来ます。今年は原爆が落ちてから四十年、兄も生きておれば、今年六十才に

なつてゐる筈です。折にふれ、若し生きていたらどんなに心の支えになつたかと、思わぬ日はありませんでした。

原爆で、父、母、兄、姉一人、妹と合せて六人を亡くし、残された七十四才の祖父と、私(十才)、妹(七才)、弟(四才)の四人は、一生懸命に生き抜いて参りました。

疎開して助かりましたけれど、田舎(南高、北有馬村)でもあの戦後は、老人と子供では大変で、大きな古い家こそありましたが、毎日の生計は厳しいものでした。淋しくて、つらくて、いつも一緒に死んでいた方がーなどと思つたこともありました。祖父の深い愛情に包まれ、「幼い子でも三人生きていて、本当によかったです」と、いつも慰め励ました。

思い起せば、祖父は八月十日か十一日に、一人で長崎入りし、想像だにしなかつた両親と妹の即死を確認、大学では兄を捜し廻り、先生方や叔父などの協力を得て、予め大学側で拾い集めて頂いた遺骨を戴き、残る一人の姉は、女学校の勤員先の茂里町製鋼所を捜したが、行方不明のままそれらしい骨を拾い、六人の遺骨を二つの木箱に納めて帰つて参りました。その頃はまだ元気でしたが、その祖父が二十五年に病氣で倒れました。二十六年に私が戴いた善行賞には、次のように記されています。

「右者、太平洋戦争中一、しかるに昭和二十年八月の原子爆弾で父母を失い、以来かよわい少女の身でありながら、老衰病で起居ままならぬ祖父に孝養を尽し、一方母代りとなつて弟妹の養育に当り、一家の生計を保ちながら朗らかに通学している様は、近隣の称赞的であり、又学校ではー。」 そして昭和二十九年二月に、祖父は他界しました。

弟は父が教師をしていた時の教え子の方々が建てて下さった墓標も朽ち果てましたので、昭和四十五年、結婚より先にと云つて、兄(邦憲)に戴いた一時金を合せて、立派なお墓を建ててくれました。

遅くなりましたが、兄が被爆してから翌十日午後に亡くなるまで、助け出し

たり看病して下さいました先生方、お友達、看護婦さんの方々、御自分の傷もいとわざ尽して下さいまして、本当にありがとうございました。兄もきっと、草葉の陰で感謝していることでしょう。

今年も亦慰靈祭にお参りに行きます。平和記念式典、無縁佛塚、医大の慰靈祭、そして競技場（社宅のあつた場所）など、お参りに廻ります。

亡くなられた方々の御冥福をお祈りして、

いつまでも平和でありますように。

二仲 生き残った弟も四十四才になりましたので、何か書くように頼んでみましたが、当時四才では、兄のことも、両親の顔さえ覚えていないのは、無理もないと思いましたので、今回も私が書きました。

遺族代表者は、弟にして下さいませ。姓名、続柄、住所は次の通りでございます。

高木邦輔（弟） 横浜市磯子区洋光台三丁目 十三番二号棟 一二〇八号室、

（六〇、四、二四）

医專三年生 芳賀久

遺族 北九州市八幡東区昭和三丁目一十五

芳賀喬

（兄）

長崎原爆の日から既に四十年になり、今改めて當時を振り返つてみると、大分記憶もうすれてはいるが、弟久が顔一面真黒くなり、力なく笑うさまが目に浮ぶようである。

昭和二十年八月には、私は召集されていて、小倉の第一機関砲教育隊附き軍医少尉であり、自宅から通っていた。六日に広島に原爆らしい物が落されたと聞き、長崎にも九日に投下されたと聞いたので、弟の様子を知りたいと思いながらも、毎晩のようやく発令される空襲警報の度毎に部隊にかけつけねばならず、思い通りにはならなかつた。十二日の早朝に、乞食のような格好で帰つて来た弟を見て、涙が出た。

様子を聞くと皮膚科にいたそで、暑いためランニングシャツだけしか着て

いなかつたので、顔面と両肩に火傷を負い、一部に黒い皮膚と痂皮を被つてゐる部分があつたが、案外元気なので着替えをさせて床につかせた。発熱と下痢が始まつたが、生水を飲んだためだろうと思つて、下痢止めの薬を飲ませた。しかしながら止まらない。それでも少しづつお粥をとつたので、大分元気が出たようだつた。

十五日に私は部隊で終戦の詔勅を聞き、大騒ぎの最中に弟死亡の報を受けとつた。まさか原爆症のための発熱下痢とは思いもせぬ、少し呑気に過ぎたようだ。帰宅して聞くと、詔勅を床の上に正座して聞き、残念だなあと言つて横になり、そのまま息を引きとつたそうだ。

弟は中学の終りごろ微熱を出し、その原因が廻盲部淋巴腺結核とわかり、九大、長崎大と入退院をくり返し、どうやら医專に入れて貰つてからも病弱のため留年していく、いつ卒業出来るやらと思っていた。久は私の一番下の弟で、年もかなり違つてゐるし、既に両親が亡くなつていたので、自分の子供のように思え、誠に可哀相なことだつた。

久が原爆受傷後に大学の裏山のがれ、そこで一夜をあかし、諫早まで一緒に行つたと聞いた級友の松永信之君も、小倉で開業していたが、最近亡くなられた。

四十年の年月が過ぎると、私も古希を越え、足腰が衰えて来ましたが、まだどうやら仕事を続けています。先生の御健祥をお祈り申し上げます。

（六〇、三、二八）

医專三年生 赤崎安孝

遺族 福岡県遠賀郡遠賀町芙蓉団地一〇一一六 宇留島 豊（叔父）

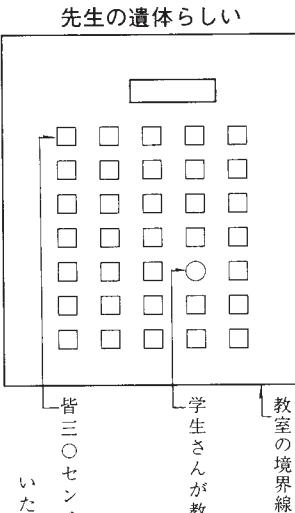
赤崎安孝の遺骨採取について

（前略） 終戦後間もなく、私と故榎武熊（安孝の伯父）は、安孝の父故安

富の依頼に依り、長崎に向いました。浦上駅や長崎駅のホームはコンクリート台のみでした。浦上駅で降り、一寸歩いた右側の坂の上に、白いテント張りの

受付がありました。

受付の方から、安孝の罹災場所の地図を貰いましたが、注意事項として、一時間以内に早く用件を済ませて出て下さい、と云われました。私共一人は急ぎ足で、草木の一本もない焼野原を地図をたよりに行き、この辺りは立ち止っていますと、向うから学生風の男子が見え、「どなたを探していますか」と云われ、「赤崎安孝の身内の者です」と答えましたところ、その方は安孝と同級生で、原爆の日は学校を休んで助かり、こうして案内をしているとのことでした。安孝君はこの所です、と次の図面に示す所を教えてくれました。



皆三〇センチ角、きれいに並んでいたが、数は分からぬ。

何一〇とある二〇センチ角の所に、こなごなになつた骨があり、最初はどうしようかと思いましたが、教えられた場所を中心に、周囲にあるのを拾いました。骨の外に安孝の所持品のバンドの金具とナイフが見付かりました。以上のようにして、無事に安孝の遺骨を持ち帰りました。

*

*

*

遺族 鹿児島県揖宿郡開聞町仙田三〇七 赤崎 安満(弟)
調先生のお手紙なつかしく拝見させていただきました。あれから四十年とい

う月日が過ぎ、早い様な気がいたします。私は、安孝の実弟です。昭和四十年

に精神病院を開業、父(産婦人科)は、私の開業の翌年八月に、病氣のために死亡、母は脳卒中で二十七年に死亡しております。亡兄の同級生の方々が、六十才を迎えた後、活躍されておられます、そんなお姿を拝見する時、兄もあの時死んでいなかつたら、原爆が落ちていなかつたら、と思うことがよくあります。私の長男に父の念願で、安隆と名づけました。孝の字を隆と変えたのです。その子が昨年兵庫医科大学を卒業、国家試験に合格して医師になりました。亡父亡兄に対して、少しでも恩に報いられたのではないかと、むしろ子供に感謝しておるところです。その他も男ばかりで、次男は北里大学医学部、三男は独協医科大学に在学中、四男が本年慈恵医大に入学しました。今は亡両親亡兄の供養をかがさない事が、私共に与えられた務めだと思つております。

あれから四十年、当時は旧制中学校の二年生でした。原爆の話は終戦直後に聞かされ、新型爆弾が長崎と広島に落されたと聞いたものでした。長崎医専学生が全滅らしいとの報らせが入り、伯父の榎武熊氏(死亡)と従兄の宇留島豊氏(現在福岡県居住)に長崎へ行つてもらつて、亡兄の遺骨を収集して帰つて来て貰いました。被爆の際は講義中で、衛生学教室であつたことが判り、遺骨が座席のままに並んでいたと聞いております。

中学時代亡兄の同級生で、当時は付属薬専在学中、現在長崎市で野田薬局を開業しておられる野田幸雄様が、現地に案内して下さつて、野田様が亡兄に贈つたベルトのパックルが見つかり、それを中心に遺骨を収集したとのことで、亡兄の遺骨は、殆んど間違ひなく、亡兄のものだつたと聞いております。

遺骨を收めて、「安孝、鹿児島の家に帰るヨ!」と伯父が話しかけながら、被爆地を後に帰つて來たのだそうです。自分の子供を持つ親となつて、今更ながら、力を落した父母の気持が、大変よくわかります。

今私は、どこでも問題になつてゐる老人対策の一つである「老人衛生医療対策事業」に、保健婦の方々と取り組んでおります。たつた一人の息子であつた

方も、沢山いらっしゃるかと思ひます。その御両親の方々が、今淋しく老後をお暮しではないでしようか。私はよく老人クラブなどに講演に出かけます。

そんな時ふと、原爆の為に人生の変った沢山の人のいる事を思い出し、私も両親に親孝行をしないうちに両親が亡くなつたので、今のお年寄りの方々に、自分の仕事を通じて御恩に報いられたら、自分の目的を達成出来なかつた亡兄も、きっと喜んでくれるだらうと信じて、私の接するお年寄りの方々には、心から感謝の気持で接しております。南のはてに住んでおりますが、私の仕事を通じて出来る事があつたら、何でも申し付けて下さい。亡くなられた方々の御冥福を心から祈つて止みません。

調先生、いつまでもお元氣でいて下さい。そして遺族の方々の力になつて下さい。

(六〇、五、三〇)

医専二年生 池田博実

遺族 久留米市合川町六六一四

池田クニ(母)

新緑の候、お元氣でお過しの事とお慶び申し上げます。おそらく申し訳け御座ません。よろしくお願ひ申し上げます。

医専二年生 犬塚喬二

遺族 佐世保市花園町六一一一

犬塚藤子(母)

今年、原爆忌四十周年目となりました。毎年その日を迎えますとき、怒りにも似た、どう仕様もない悲しみが、こみ上げて来ます。

四季折々の雲の流れにも、風の音にも、目に触れ心に触れるものに、亡き子の面影は鮮やかであります。遺影を前にどうなるものでもありませんが、もしも生きていたらと、愚痴めいてしまいます。

下宿の平山様には、喬二存命中は深い御温情を頂き、感謝でいっぱいあります。

土、日曜は出来るだけ帰つて来ていましたが、死別の予感があつたのか、母

のそばを離れず、ついて廻つておりました。

歳月を重ね、父は他界して十三年を経ました。兄と弟は健在で、父と喬二の供養を母と共に致して居ります。犠牲者の方々の御冥福を、ただただお祈ります。

この様なむごい戦があつたにも拘らず、尚どこかで戦争が続いている。人類を不幸と悲しみのどん底に陥れる戦争が、早く終結して、世界の平和がいつまでも続きますように、ひたすら祈つてやみません。

追悼

○ せめてもの一夜のみとり秋の風 (父故春怪)

○ 母呼んで眼を閉じぬ秋の蚊帳かや

○ 我焼きし骨抱き戻る秋の風

○ 秋の風遺髪を出してもの言えず

○ 燐火親しいよよ励みてあらましを

○ 今に尚遺品のノート原爆忌 (母藤子)

○ 盆の月亡き子の名まえ膝に書く

○ 原爆忌母ながらえてする回向

合掌 (六〇、四、一三)

医専二年生 岩瀬充

遺族 長崎市文教町一六一一一〇一

岩瀬磨穂枝(母)

御遺族の皆様、如何お過しでしょうか。

長崎原爆後四十年、自分の古いゆくのと比例して、亡き子の年を数えてみれば、今年は還暦の彼、その姿は想像もつきません。

ただハッキリ私の眼底にあるのは、彼の学帽姿のみです。私も八十歳、老後を楽しく、意義のある日を送りたいと思い、一週間を繰り合せて短歌、俳句、日本画、写経 大正琴と、限りある私の人生を、さらさらと生きています。健康こそ宝です。

○ 原爆に逝きにし吾子の四十年 母も老ひたり子の年数ふ
○ 還暦の亡き子の姿浮び来ず 眼底にあり学帽の面影は

お便りありがたく拝見致しました。

* * *

長崎原爆より四十年、私も八十歳となりました。今年は一月頃から家族と共に靖国神社に参拝することにし、東京九段会館に予約を申込み、上京の日を待つてましたところ、三月初め頃から風邪で病臥し、なかなかよくなりません。まだ寝たり起きたりの生活をしています。上京を中止し、娘が代つてお詣りすることになりました。本当に残念でなりません。今度は「忘れな草、第七号」出版のため、また編集、発送、その他いろいろ大変なお世話をかけることと存じますが、よろしくお願ひ致します。

(六〇、三、二六)

医專二年生 梶 原 辰 巳

遺族 佐賀県武雄市西蒲町八三〇〇

松 尾 みさを (姉)

毎年八月九日が来ると、長崎の原爆のあの恐ろしさが目の前に浮びます。弟辰巳の命日は八月十五日でございます。終戦の詔勅はも早や降りていきました。忘れるこの出来ない歴史の日でございます。

今年は昭和六十年でございますが、四十年の月日はいつしか流れ去りました。私も吉希の年を迎えて、孫八人を持つおばあちゃんでございます。私達姉妹三人が残つておりますが、喜寿を迎えた上の姉は、以前白石町にいましたが、遠い島根県の方に移りまして、長崎の慰霊祭には参れなくなりました。妹は東京の方に居りますので、毎年靖国神社の大祭へ参列して貢つております。

医專二年生 片伯部 勇

遺族 千葉県船橋市七林一一七一八三

片伯部 亨 (兄)

「グビロが丘に眠る英靈よ、永遠に日本を守り給え。」

(六〇、四、二二)

合掌

御連絡有難う存じます。

扱て、片伯部勇の母ハルは、現在九十七才にて、仮眠状態のまま入院療養中で御座います。つきましては、長兄片伯部亨を遺族代表者といたしますので、御連絡申し上げます。

(六〇、三、三〇)

二十八年に靈界の人となりました。私は弟の最後の日まで深い縁があつて、八月十五日夜に両親を長崎へ伴つて行つた時の惨状が、今も目に焼きついております。生命のある間に弟に逢えなかつた両親の痛ましい気持が、終生私を長崎の慰霊祭へ引き寄せるのでございます。又こうすることが、私に残された親孝行ではないかと思うのでございます。

現在私の子供達は、一人共東京の方面にあります。長男は歯科医を開業していますが、私はどうしても長崎に近い武雄を去る気にはなりません。生のある限り弟の靈を弔いたいと思つています。

遺族会のお世話を懸命になさつて下さった方々のお顔が、一人一人と見えなくなりました。私もいつまで元氣で長崎へ行けるかしらと、ふつと思つたり致します。

我が國の今日の隆盛の礎となつてくれた若人たちの生命を守るためにも、長生きをしなくてはならぬと、自分に云い聞かせて励ましております。長崎での炎の中に散つた貴い生命を、無駄にしてはなりません。遺族の皆様と励ましあつて行きたいと存じます。

遺族会の会長様初め、役員の皆様の限りなき御健康を祈り、長崎大学の発展を祈念してベンをおきます。

今年は昭和六十年でございますが、四十年の月日はいつしか流れ去りました。私も吉希の年を迎えて、孫八人を持つおばあちゃんでございます。私達姉妹三人が残つておりますが、喜寿を迎えた上の姉は、以前白石町にいましたが、遠い島根県の方に移りまして、長崎の慰霊祭には参れなくなりました。妹は東京の方に居りますので、毎年靖国神社の大祭へ参列して貢つております。

私は毎年長崎の慰霊祭に参列させて頂き、年に一度遺族の皆様とのお目もじを懐かしんでおります。遺族会長様のお陰で、今まで真心からなる大学の慰靈祭が行われ、心から深く感謝しています。両親は弟の後を追つて、二十四年と

医專二年生 龜井 宏

遺族 福岡市西区今宿町一一六四

龜井ユキ(母)

あれから四十年、あの子がいればそろそろ還暦と思うと感無量です。一人息子を失つて、長い間精神的に被爆者の様な状態で、悲しい月日を送りました。娘の子供達もある子の年を越えて成人し、少しは気がまぎれて参りました。孫達によく戦争や原爆の話をときかせます。その孫の一人に、「何か書いてよ」と頼みました。同封致しますからお読み下さい。

街を歩いていても、よく外人の方とすれちがいます。ホテルなどは、半数は外国人ではないかと思つたこともあります。テレビにもよく出演なさいますし、海外ニュース等も、自然に耳に入つて来ます。

日本から他の国へ行かれている人も多いと伺つて居ります。こんな交流は四十年前には、とても考えられない事でした。そして今若い人は、外国人の人も日本人も、あまり違和感なく、個々の人間としてとらえ、国際的とでも云うのでしょうか、良い事だと思います。

肌の色、宗教、その他違つた点は沢山ありますけど、お互いに話し合つて早く死んで行つた、あの多くの人々への供養になるのだと思います。先生や遺族会のお世話役の方々、いつもお骨おり下さいまして、誠にありがとうございます。では夏にまた、長崎でお目にかかるで頂きます。

(六〇、四、一一)

遺族 龜井章裕(甥)

一昨年の秋、アメリカのオレゴン州にある我が大学の姉妹校から、二十数名の留学生が日本を訪れた。

縁あって、彼らの数名と何度かの酒宴を張る機会にめぐまれた私は、何よりも彼らの元気や体力に、驚嘆せざるを得なかつた。飲むほどに、酔うほどに、

前後が覚束なくなる我々とは異なり、盃が重なるにつれ、彼等の澆刺たる態度をまのあたりにしては、大東亜戦争の結果も、至極当然のことと感ぜられたものであつた。

それはさておき、彼らは大学での学習のかたわら、ある者は富士山に出かけ、ある者は京都まで足をのばし、またある者は広島へ出向くなどして、短い滞在の期間を存分に楽しんでいた。

その、広島まで出掛けた中の一人に、アメリカが日本と戦を交えたこと、より短くいえば、アメリカが日本に原爆を投下したことについて、どう考えるかと尋ねたところ、彼女は、広島で直接、つぶさに見て来て、原爆の、そしてそれによつてもたらされた悲惨さを、あたかも私が日本人ではなく、原爆について何ひとつ知らぬ者のように、細かに説明するのであつた。それは私の予想だにしなかつたことではあつた。

そこで私は再び、「私の伯父は、勿論私の生れる前だが、長崎の原爆で死んだが、どう思うか」と尋ねると、私の係累に被害者がいたと知つたがためかどうか、彼女は泣きださんばかりの様子で、原爆を、戦争を、そしてアメリカ国家さえも、批判し始めたのであつた。

「人間が人間の命を奪うことは、どんな場合にも、どんな人間にも、絶対に許されるべきものではない。」といふ彼女の言葉を聞いた時、不遜にも、原爆の価値はあつたと考えてしまつた。

初めて日本を訪れ、初めて広島へ行き、初めて原爆について知り、前記のようないい言葉が出てくる。そこで彼女と私は理解しあえる。私の貧困な英語力と、彼女の豊富な表現力の差さえ問題にならぬほど、ひとつのも大切な問題について、理解しあえる。

四十年過ぎた今の彼女や私には、むしろそういう一つの端緒としてしか、原爆というものを捉え得ないが、それでもそこからは確實に花が咲き、実がなるのである。そこから我々は、我々なりの花を咲かせ、実をみのらせることが

出来るのである。

「同年代のアメリカ人と、原爆や戦争について、そして平和について話しましたのは、とても有意義でした。今日のことは、よく覚えておきたいと思います。」

そう言うつもりが、すでに私は酩酊の限り、彼女は青い目で尋ねかけて来るのみである。

医専二年生 古賀敬賢

遺族 佐賀県杵島郡江北町下小田一 一五〇 古賀賢一（父）

愈々晩春、凌ぎ易い季節となりました。（中略）

近年原爆犠牲学徒の遺族の為に、何かと一方ならぬ御配慮をいただき、私も遺族家庭と致しましては、誠に感謝に堪えず、深く御礼申し上げる次第であります。（中略）

私共老夫婦は愈々馬齢を加え、その日その日を何とか過しておりますけれども、私は今年九十才、妻八十六才で、健康上多少の不自由を感じております。

耳（聴力）も目も少々不自由でありますが、ただ頭の働きや記憶力だけはまだ

確かに、四十年前の原爆災難当時の記憶が脳裏を離れず、六男亡敬賢の面影が浮んで、写真を眺めつつ冥福を祈ります。全く感無量であります。

先生にこのような書面を差上げて甚だ失礼ですが、御赦し下さい。尚、色々感想を述べたいとも思いますが、只今多少健康上の都合もありますので、此度は是でお赦し下さい。何れ八月の慰靈祭にはお供えでもして、冥福を祈りたいと存じます。慰靈祭には多分出席出来ないかと思いますので、どうか呉々も御身大切に、御自愛をお祈り致します。（六〇、四、一六）

医専二年生 佐藤恕一

遺族 北九州市門司区西新町一丁目一一一六 佐藤ひろ子（母）

久々にて先生からお便り頂き、ありがとうございます。（中略）

仰せの通り早いもので、今年はあれから四十年となり、一層過ぎ去ったあの

時が思い出され、あの時がなかつたら家族もふえ、楽しく暮されたのに、と思ひます。

私は今年八十一才で、あの時の息子の四倍生きていることになります。一緒に元気で生きてほしかったです。

幸と云えましょうか、長崎から大分へフラフラで帰りつき、八月十五日、家族の看病の上で亡くなり、そのことは慰めでござります。朝夕のおつとめをさせて頂き、心を落着かせております。

主人がなくなつて二十年、大分で一人暮しておりましたが、六、七年前に、心細いので当地（北九州市）の医師（次男）の所に来ております。年とつての転居は心細いので、年長者組みに入り、色々の催物に参加して、地区の同年輩の方との交流に心がけ、淋しさを忘れるように心がけております。

簡単ではございますが、近況をお知らせ致します。早くにお通知を出さねばなりませんのに今日までおくれ、申し訳ございません。お許し下さい。

医専二年生 里崎永一郎

遺族 佐世保市大和町一〇一〇一三 里崎久子（姉）

花の便りも聞かれるところとなりました。光陰矢の如しどと、あの恐ろしい長崎原爆の日から、早や四十年を迎えるとしています。運命の日も長い年月がたちますので、記憶もかなりうすくなりましたが、それでも色々と思い出され、胸がいっぱいになります。

長崎に新型爆弾が投下され、浦上一帯は壊滅状態ということを聞いて、すぐにもと思いましたが、当時は汽車の切符が簡単には手にはいりませんでした。やつと手にいれて、翌日から二日間、父が一人で弟をさがしに行きましたが、何も手がかりがありませんでした。三日目になり、私もいつしょにさがしに参りましたところ、道ノ尾駅までたどりつくのがやつとで、あとは夢中で浦上まで歩きました。廢墟の中を救護所を探してまわりましたが、弟の姿は無

く、当時授業中だったと聞きましたので、校舎の下敷きになつて焼死したのではないかと思います。

私共は、姉、私、弟の三人姉弟でした。父は一人息子に先立たれて、力を落としたのでしょう。昭和二十三年に亡くなり、母も昭和五十年に九十二才で亡くなりました。父も母も、終生、一人息子を失つた悲しみのうすらぐことは、なかつたこととおもいます。

皆様のお力添えにより、靖国神社に合祀され、医大の構内には慰靈碑が設立され、原爆記念講堂の壁には弟の名前の刻まれた銅板が安置され、その他慰靈の水など、心から感謝致しております。また毎年八月九日に行われます慰靈祭には、主人とお参りさせて頂いております。

世の中は目まぐるしく変わつておりますが、米ソの緊張は依然として続いております。

いつまでも戦争のない平和な国でありますように、原爆の犠牲になつた弟の姿を偲びつつ、心から祈っております。

(六〇、四、二)

医專一年生 鈴木一男

遺族 静岡県清水市草薙三五〇一八〇 鈴木重次(父)

(前略) 今年は長崎に原爆が落ちてから四十周年目、感慨ひとしおでござります。私はずっと健康で第一線で活躍しておりましたが、五十八年暮に体調をくずして、今は療養に専念しております。住所が変更したので、お知らせ致します。(後略)

静岡県清水市草薙三五〇一八〇 (六〇、四、二二一、一)

医專一年生 中島之彦

医專一年生 田中秀雄

遺族 佐賀市久保泉町字篠木野 田中幸一(父)

拝啓 御手紙下さいまして有難う御座います。(中略) 当方こと御無沙汰勝にて、誠に申し訳もありません。

就ては早速のところ、老身にて日々無念無想にて、戦後一日と忘れることがな

く、世界平和を強調し続けておるのみにて、何卒人生の幸福の程、御祈り御願い致します。(後略)

(六〇、四、六)

(調附記) 田中幸一様は、昭和四十五年十一月に調査した時、七十六才、健康のことでしたから、それから十四年及至十五年、今では九十才を越されたのではないかと想像されます。どうかいつまでも御健勝の程、御長寿をお祈り致します。

医專一年生 田中祥生

医專一年生 田中清視(弟)

遺族 福岡県飯塚市飯塚一九一一 田中祥視

新緑の候、いよいよ健勝のこととお慶び申し上げます。

被爆四十周年のお知らせを頂きましたが、父豊次は昭和五十八年十一月二十七日に亡くなりました。生前は何かとお気にかけていただき、ありがとうございました。

父は眼が悪く不自由しておりましたが、長崎に行くのを楽しみにしており、昭和五十六年までは毎年行つておりました。

私は豊次の三男で、昭和二十一年九月四日に生まれ、兄達の顔も知りません。長兄祥生の様と、次兄清視の親をとつて、祥視と申します。昭和四十七年、熊本大学医学部を卒業し、今年三月より飯塚の片田舎で開業しています。

(六〇、四、二七)

医專一年生 中島之彦

遺族 長崎市西山町二一三四四 中島金之助(父)

このたび調先生からお便りをいただき、ありがとうございました。先生お手書きの謄写刷りとその文意に心を打たれて、ペンをとりました。

四十年を過ぎた今も同じ心の痛みになやむ私どものために、無料無償のご奉仕をたゆみなく続けていただくことを、心からありがたく思わないではいられ

ません。

「忘れな草」の刊行このたびは失礼の限りをしていた私は、このたびはこの拙い文で、皆様に深くお詫び申しあげる次第でございます。

この十余年の間に、私は二回白内障の手術をうけた後も、眼の不調がつづいて、すべてに引きこもりがちになりましたが、重い病気にはかからず日々を過ごしています。

これから原爆はどうなるであろうかと、身近かな憂いに四十年を過ごしてきましたが、今ようやくその廃絶の実現と人類との平和のために、世界の人々が真剣に努力するようになりましたことは、まことに喜ばしく、また私どものうけた苦難も、奇すしく思われるようになりました。皆様のご平安を心からお祈り申しあげます。

(六〇、三、三一)

医專一年生 永 井 正

遺族 熊本市碑田町三一四三 永 井 郁子 (母)

庭の桜の花も散つてしまいまして、すっかり新緑の季に変わつて参りました。(中略)

時は流れ、あの忌まわしい日からも早や四十年、私も八十路をすぎまして、正一が生きていってくれたら六十才になるのに、心はいつもある子の事で一杯でございます。

医專一年生 松 尾 宏

遺族 長崎市綱場町四九一微笑園内 松 尾 タカ子 (母)

陽春五月でございます。(中略)

さて、先般から原爆四十周年の節目につき、記念誌を御編集の御由にて、原稿をとの御状を拝受致しました。

戦時中、私は病氣のため、田舎の友人の家に独り離れて身を寄せて居ります。

戦時中の苦しかった事、二十の青春と空腹と不安におののきながら、学業にいそしんでいた当時の事など、今更の如く、新しく、走馬燈のように脳裏をかけ巡ります。

そこで、子供達の身の上を案じながら、何卒無事でいてくれますようにと、朝夕神

佛にお祈りをして居りました。そしてあの八月九日、原爆に襲われたのです。

そのこわさを知る由もなく、何卒命だけは助かつて欲しいと、長崎の方を向い

て、一生懸命、正一の名を呼んで叫びました。「生きていてね」と。でも私の願いも空しく、遂にあの子は天国に召されました。思えばほんとうに悲しい出来事でした。

運命と云つてしまえば、それだけの事ですけれど、余りにもむごすぎます。

親として、何としてもやりきれない気持でございます。

四十年経つた今でも、当時の事がまだまとめて思い出されて、残念で胸が疼きます。私が今して上げられる事は、佛の供養と、ただあの子の冥福を祈るのみでございます。(後略)

(六〇、四、九)

医專一年生 橋 口 匠

遺族 大分県佐伯市城南町一五一一 橋 口 みと (母)

新緑の季節となりました。

先日「忘れな草」の御出版のお知らせ頂きましたが、先年嫁に死なれ、その一周忌前に又、院長の息子が心臓発作で急死しまして、がっくりしています。

今は久留米医大五年生の孫息子と、共立女子大の孫娘二人の養育に、老いの身を忘れて必死の思いでございます。

こんな不幸な近況をお知らせするすべもありませんので、今回は原稿は失礼させて頂きます。本が出来上がりましたら、御送付下さいよう、お願ひ致します。

(六〇、五、一)

戻らず、疲れてしまいますので、出来る限りのんびりのんびりの生活を致しております。

それで到底駄目だと、筆をおきました。何卒あしからず御思召下さいませ。お言葉に添うことが出来ませず、残念でございます。

今日の生活も、中村重光先生及び遺族会の役員の方々が、何度も何度も上京して請願して下さいました結果で、遺族一同は金銭的に何の不自由も知らず、亡き人の供養も思う程に出来る生活でございます。これも皆様のお陰様なのだと、若き人々にもよくお話しすることです。

久しく手にせずになりました「忘れな草」も、今改めて出来るだけ読み返し読み返し致しまして、今夏を過ごす心算でございます。

先はお詫び申し上げた筆をとりました。御判続下さいませ。真に有難うございました。二、三枚あります御一同様御一緒のお写真も、つづく眺めさせて頂いております。失礼致しました。私は只今八十二才でございます。

(六〇、五、四)

医專二年生 森

猛

遺族 長崎市矢上町四三 森 平市 (父)

歳月の流れは速く、被爆四十周年を迎えて、感更に新たなるものがございます。まことに感無量、悲痛の感に堪えぬものがあります。

併し、今となつては、ただ、故人や友人、諸先生の御冥福を祈念するほかございません。只、この惨事が、世界全土の人類や、一般生物の永久に亘る惨事の防止を保証することは確実であろうと存じ、物故者の犠牲が無駄ではなかつたことだけは、感無量なのがござります。

お互に、私共は生ある限り、故人の御冥福を祈念し、慰靈の義務を果たしたいと存じます。

最後に、皆様の御健勝を祈ります。

(調附記) 森平市様は今年九十一歳だと存じますが、今もなお元気に御活躍中です。

医專二年生 橫田 健

遺族 長崎市大園町一〇一二 橫田 康 (兄)

原爆遺族会の事業について、種々お世話のこと感謝にたえません。

私、原爆落下時は戦地(マレー)に居りまして、被爆時の様子は父母より聞いておりますが、実際の生々しい様子は見て居りません。テレビ等では悲惨な当時の模様を見て居りますが、既に四十年もたち感慨無量です。

(六〇、四、三)

医專一年生 阿部琢磨

遺族 長崎県北松浦郡小値賀町笛吹一三八八一一 阿部 たまえ (母)

忘れようとしても忘れる出来ない八月九日が近づいて参りました。原爆投下後四十年の月日が流れ去り、私も八十四歳を迎えました。主人を十年前に亡くしまして、いま三男の息子(歯科)と同居致し、孫達の成長を楽しみに、お陰様で無事に過ごさせて頂いております。お寺にお参りしたり、老人会に行くのを楽しみに致しております、子供達の分まで私が長生きさせられているようで、感謝日々の毎日でございます。

思い出しますと、亡き息子の中学時代の日記に、「自分は勉強部屋を持たなかつた。夜遅くまで勉強していると、母が側でいつまでも裁縫していくくれた。勉強部屋がなくとも自分は幸せだった。」と書いてありました。

戦時中の訓練に、私の代わりに頭巾とモンペを着て、婦人会に出てくれたこともありました。本当に母親思いの子供でございました。汗を流してよく働いたくれました。

八月九日に被爆して、十六日死亡いたしました。「ピカッ！」と光った瞬間、机の下に隠れて、気がついてあたりを見回すと、校舎も自分達の教室もぶれて、下敷きになつた友は皆死んでしまい、命が助かつたのは自分一人ではないかと思ったそうでございます。それから知人のお宅(下村病院)にお世話になり、手厚い看病を受けて他界致しました。下村様、本当に有難うございます。

した。畠の上で、布団の上で死ねたのは本当に有難く、息子も草葉の陰でお札を申していることと存じます。

息子の実家は、五島列島最北端の小値賀島でござりますので、その当時戦争が厳しくなるにつれ、音信も不通の状態となつて、原爆のこともずっと後で聞いた訳でございます。お盆の十六日の夜、息子が亡くなつたことも知らず、主人と三男の息子達が、外で夕涼みをして居りました。すると青白い火の玉が、シェーツと音を立てて家中へ飛び込んで来たそうでございます。そして主人の目が急に見えなくなりましたので、手を引いて家中に導き入れ、お茶を一杯飲ませますと、漸やく目が見えるようになりました。

なんと不思議なことでございましょうか。あとで分かったことなのですが、音信は不通でも、汽船は通わなくても、息子の魂は、私達の許にまっすぐに帰つて参つたのでございましょう。不思議な思い出でございます。

末筆になりましたが、「忘れた草」の発行に当たりまして、一方ならぬ御苦労に心から感謝致しますと共に、御遺族の皆々様方の御健康を、心から折念申し上げます。

*

*

*

(六〇、四、一五)

ました。

来る日も来る日も空襲、造船所めがけて急降下する時の不気味な唸る音、弟の明海は七月一日が入学式で、主人の学生時代のつめ衿に角帽をかぶり、本を風呂敷に包み右手にかかえて出掛けましたが、その姿を見たのが最後でした。

思えば九日、家の周りは建込んでいて、危険を感じ、町内の方々と海星高校の上の竹藪に避難すべく、三人分のお握り、ゴザ、毛布を持って、勿論家中はガラスだらけのままにして、弟達に登つて来るよう置手紙をして来ましたが、夕方になつても来ず、夜になつて初めて見る浦上方面は火の海、時々ボンボーンと、何か分からぬがドラム缶でも破裂しているようで、この有様を見て、あれでは到底こちらには帰れないし、弟達はよく休日などは歩いて実家に帰つていたので、何とかうまく向こうへ帰つたのかも知れぬとも考え、翌日火が下火になつてから、浜口町の大学や兵器工場など探したが、二人ともとうとう見つからず、田舎では病氣の姉もこのショックで、一度に三人の葬儀をしてしまいました。

思えばこれまで、明海の方は夜遅くまで雨戸を閉め、暗くして勉強中に又警報、雨戸の節穴から灯がもれていると、メガホンで注意される事が度々あり、又ある夜は、弟と一人蚊帳に入つていると、何か兄弟がヒソヒソ話していると思つたら、兄の方が小声で、ホラホラそこを下つて来るよと云いながら、指をなめて手際よくノミを捕まえました。私は初めて、兄弟の仲の良いのを微笑ましく思つたものでした。

四十年は夢のようです。医師として叶えられなかつた明海の夢を、私の次男が受け継いでくれたので、弟の明海も安心してくれていると思います。

しかしこの世の中には、又々戦争の足音がジワジワと忍び寄っています。私は政治のことはよく判りませんが、我が国は何処の國とも仲良くして、平和が永久に続くことを念じています。

(六〇、四、三〇)

医專一年生 秋 口 明 海

遺族 長崎市扇町三三一一五 秋 口 千 代 (義姉)

早や四十年も過ぎたとは—私にはつい昨日のように、あの生々しい光景が浮かんで來るのです。

当時主人は出征中で、二十六才の私は主人の実家(農業)を手伝つていましたが、明海が弟と一緒に下宿していた一家が、十人町へ疎開して行つたので、両親に頼まれて私も長崎へ行き、三人で暮らしているうちに、あの様な目に会い

医専一年生 池崎雅裕

遺族 熊本県天草郡五和町鬼池一一六二一 池崎ツル（母）
新年の御挨拶を申し上げましたのも、昨日のように思われましたのに、早やお彼岸も過ぎ、桜も咲き、色々な花が一杯咲き出しました。

先生はお元気にお暮らしがございましたよ。私は左の眼が全く見えなくなり、右の方だけで新聞も読みますが、右も白内障で霞みますので、不自由致しております。アッという間に芍薬も一尺ばかり伸びました。主人の好きな白木蓮や薄紫のも、蕾がふくらんで一斉に咲き出します。百合もそろそろ大きくなり、アジサイ、椿、ダリヤも芽が出て来て、庭は花盛りとなります。

私は近頃物忘れがひどくて困っています。四、五日前、東京の次男の子供

三人（男）顔を見せてくれまして、嬉しうございました。年子三人で、幼い頃は嫁が可哀想でございましたが、成長してみると、長男が大学院、次男は医科へ、三男は文科へ、皆それぞれ進んで、仲よく勉強しております。私が庭に出来ますと、危ないと云つて手を取ってくれまして、嬉しうございました。また熊本の空港から車を借りて来て、下田や牛深を見物し、天草の海の美しさ、お魚の鮮しさを満喫して帰りました。

田舎はお近所の方々が、とてもいい方ばかりで、毎日お客様が遊びに来て下さいます。昔からの出入りの人や、老人クラブの人など来られますので、私は皆主人のお陰、お先祖様のお陰と思って、朝夕お念佛の日暮らしをさせて頂いております。また年金のお陰でお寺参りも心配なく、充分の事が出来ますので、毎日感謝の日を送らせて頂いております。

気候がよくなり、血压の方も落ち付きましたら、何とかして長崎へも行つてみたいと思つておりますが、部屋にばかり閉じ籠もつておりますと、足許がおぼつかなく、いつ実現出来るか分かりません。

したが駄目で、上の竹山に埋めてやりました。

猫にはそれぞれ個性があつて面白く、可愛がつておりましたので淋しくなりました。猫好きの人へ来られますと、すぐに出で来てエビセンペイをくれと鳴いてせがみます。「嬉しい、嬉しいをしなさい」と申しますと、膝に手をかけてもみもみしますし、「一生懸命に嬉しいをしなさい」と申しますと、胸まで手を伸ばしてもみもみしながら咽を鳴らします。嫌いな人が来られますと出て来ませんが、猫好きな人が来られますと、すぐに出で来て甘えます。猫が皆居なくなつて淋しうございますが、今後家中では決して銅がないことに致しております。

医専一年生 磯永利夫

遺族 北九州市小倉南区横代光田一五二二一四 磯永キクノ（母）

気候も日増しに凌ぎ良くなつて参ります。

新たに思い浮かべますと、利夫が原爆の犠牲になつて、長崎で亡くなつてから早や四十年の月日が流れました。全く夢のようです。

原爆投下後三日目に、私は小倉を発つて夜行列車で長崎に向かいました。浦上の手前のトンネルで一時間位避難した後、徐々に発車して浦上に着きました。駅前は一面に焼野ヶ原と化して、馬が一頭トボトボと何かを求めて歩いていました。悲惨な光景をあとに、一路亡き利夫の許へ向かいました。

下宿のあつた跡地や、救護所など、一日中探し求めてさまよいました。持参した水筒の水も飲み干し、市内の焼野ヶ原で水道管から勢よく噴き上げている所に辿りつき、長崎の水を腹一杯飲んで、夜行列車で我が家へ帰りました。

思いも新たに、四十年の月日も過ぎ去り、その間世の移り変わりで、色々な物事がありました。私も本年八十八才になり、身体は思つにまかせず、寝たり起きたりの日々をすごして居ります。長崎の地を今一度と思いますが、体がもう云うことをきかなくなりました。後には姉兄がまだいますので、よろしくお願い申し上げます。記念碑への道順の地図が、皆様も欲しいのではないいかと思

います。私の方も望みます。

四月十二日も北九州では終日雨で過ごしました。ではいつの日かお会いする日まで。

(調 附記) (六〇、四、一五)

記念碑への道順の地図が欲しいとのことでしたので、長崎市の地図を買い求め、長崎大学医学部からグビロケ丘を登つて慰靈碑へ行く道順は、私が描いて送りました。然し現在では、遺族の方々が老令となられ、グビロケ丘を登られるのが大変だらうと思いましたので、慰靈祭を「原爆記念講堂」で行つてることを書き添えました。

医専一年生 今村義徳

遺族 鹿児島市泉町一一一五今村病院 今村源一郎 (養父)

追憶

不運な義徳！被爆後四日目に絶命！

安全地帯の長崎市郊外の道ノ尾に居住して！当日八月八日は空襲を慮りて！

第二次大戦の閉戦日の八日には、毎月鹿児島市で戦災の経験を受けているので、当時は長崎での空襲を慮つて、念のため登校せず、宿の庭先で鉢巻き姿で洗濯中なりしに！長与駅発下り列車の轟音につれられて、歩いて二、三分で到着する道ノ尾に急ぎしが、死出の旅ともつゆ知る由もなくて！

宿の人々も少しも気すかないでいた由。被爆後漸く大学のグランド隣の浦上天主堂近くの溝川に辿りつき、氣息えんえんで、「道ノ尾駅東、森元方」と紙片に書いて手を挙げていた由、これを救護隊員が気付いて森元様方に運ばれ、森元様や近所の方々の手厚い御看護を受けて、旅の地で君が代を口ずさみながら！絶命！手帳には父今村源一郎と記して。

医専一年生 大久保彰

義徳は小学校三年生の秋、実母急死のため、私の家に引き取つて、養子として入籍した。私には一男四女があつたが、実子同様の生活で、小学校卒業と同時に、当地の名門で私等父子の母校である県立鹿児島第一中学校に入学し、人々みな生活をしていたが、三年生の秋急に発病、高熱のため当市の内科や外科

の診断を受けたところ、股間のタムシを搔いて爪から起こった敗血症と判明した。あらゆる治療で危うく一命を救い得て、その年は休学し、彼の趣味である魚釣りのため、モーター付きの小舟を求め、波の静かな鹿児島湾に連日出かけ、時にはその釣り舟に起居する程の魚釣りの玄人であった。

中学卒業の昭和二十年は、戦争末期で万事いろいろ統制の時代であったが、学校入学も実力試験より、今まで在学した学校の成績順を重要参考として、入否を決めた変則的な時期であつた。

義徳は初め私の母校である当地の第七高等学校に出願した。中学では数学、物理、化学は得意であったが、博物のような暗記物が不得意だったため、席次は上位ではなく、遂に七高は不合格であった。入学決定の職員会議では、「席欠は下位でも、数学や物理化学が好成績で理科向きだから、合格させたら」と

三回も会議にかけられし由、後日漏れ承わつた。

万一その際七高に入学していたら、目下当院の内科部長、外科、婦人科部長の一年後輩なりしならんと感に堪えず。死んだ子の年数えの嘆！

今祖先墳墓の地に、幼時亡くせし母や、最近九十余才の長寿で逝きし父と、同じ墓に安らげき永久の黄泉の旅路ならんと、切に御冥福を祈つて止まず。

被爆四十周年を前にして！

【註】私は昭和二年長崎医科大学入学の際は、三十二才の妻子ある晩学生で、妻は道ノ尾区長と小学校に奉転していたので、道ノ尾では色々父兄から親切にしていただいて、今でも文通を続いている程である。

(六〇、四、六)

医専一年生 大久保彰

遺族 長崎県西彼杵郡高田郷二五八 大久保イツ子(母)

頼りますれば、よくも今日まで生き長らえたものだと感謝しています。「お母さん、長生きして下さい」と云つてゐる彰の声が聞こえるような気さえして、今もつて死んだ子をなつかしんでいます。

四年ぐらい前に、彰の終焉の地コンピラ山をもう一度と、家族に手を引かれ、遺骸を見付けて下さった鍵原さんの道案内で、コンピラ山に登りましたが、付近一帯が見事に整地され、ずらりと家が建ち並んで、目的地にいくことが出来ませんでした。

鍵原さんの話では、自分達が建てた鉄塔がすっかり建て替って、全く見当がつかないとのことでした。不自由な足で登りました母の気持は、彰にも通じたことと、残念でしたがそのように、自分に云い聞かせています。今日では到底登れそうにもございません。

○ 爆死子の終焉の地探ねれば はいる道なし民家建てこみ

現在、私は家族の暖かいいたわりの中で、毎日を快適に暮らさせて貰っています。

(注) 鍵原さんは、当時銭座町の変電所の若手職員でした。そして彰は、送電線の鉄塔の近くで死んでいました。

医専一年生 大 楠 泰 正

遺族 長崎市女の都二丁目老友荘内 大 楠 琴 子 (母)

四十年前、長崎医大付属医専の若い医学徒は、学半ばにして原爆の犠牲になつた。

遺族達は、「生きていたら、今は立派な医者なのに」と、原爆と戦争を憎んでいた。八月と云えども夏休みの中、だがその頃若い医学生達は、国の要請で夏休みを返上して医学の勉強を続けた。動員学徒達がハンマーをふつたのと、少しも変るところはない。

昭和二十年八月九日！原爆は落ちた。爆心地に近い基礎医学教室は、一瞬の内に地獄の様相に變つた。この教室で講義を受けていた若い医学生は、全員死亡した。

教室のあちこちに白骨の山があつた。そこで私も数人の方と、どのお骨を拾つたらよいか、と一時は呆然として立ちつくした。間違つたら誰かが拾つて祀つて下さると信じて、一部のお骨を拾つて帰りました。

今は長大医学部のグビロが丘の慰靈碑の中に、安らかに眠つて居り、毎年八月九日の命日には、盛大な慰靈祭を行つて頂いています。八月九日の命日には、三十九年この方、欠かさずお参りして、あの子に会つて参りますのが無上の慰めとなり、はげみとなつて、今日まで暮して来ました。

静かに眠れ、と日夜念じて、今日まで過して参りました。今や八十の坂を半ば過ぎて、何をする気力もなく、唯々、「あの子がいたらなあ」と考えない日はなく、毎日を過ごしております。

御遺族の皆様も、いついつまでもお健やかにお過ごし遊ばしますよう、心から念じて筆を置きます。 合掌

医専一年生 大 隈 亨

遺族 佐賀県佐賀郡川副町早津江 大 隈 卵一郎 (父) 代筆

花便りの聞かれる好季節が又めぐつて参りました。私こそ御無沙汰ばかりで申訳ございません。

お申し越しの「忘れな草記念号」には、下手ながら何か一言でも思いますが、只今高血圧で入院加療中でございますので、切角の先生の御趣意に副い得ませず、心苦しく思つております。お赦し下さいませ。

長男亨は学業を果たし得ませんでしたが、二十一年に生まれた私の外孫(長女の長男)が、亨叔父と同じ医学の道に進み、三年前に佐賀市内に皮膚科・泌尿器科のささやかなクリニックを開業いたしました。私共遺族の慰めかとも思ひ、又これが亨へのせめてもの供養かとも思い返して、明るく生きることに努めしております。本当に有難うございました。

(六〇、三、一七)

医専一年生 角川 鞏

遺族 長崎市石神町一六一七 角川 澄子（姉）

れる方ではないかと思われる。

医専一年生 川崎 勝次郎

原爆後四年

遺族 長崎県東彼杵郡東彼杵町千錦宿一八三 川崎トシ（母）

- 双の掌に象るがにも思い出づ 齡十七にて逝きし弟
- 我が縫ひし学生服着けてゆきしまま 彼の日弟は遂に還らず
- 先に立ちて防空壕を掘りるたり 聞いいよよ烈しき日にも
- 生きてあらばうからに廻まるる日々ならむ良き医師ならむと今日も思へり
- 哀しみは我のみに非ずと思いつつも 慰靈の室に涙こみ上ぐ（八月九日）
- 哀しみと憤りに耐へし四十年 また幾年を生きてゆかむか

医専一年生 川上 允

遺族 福岡県筑紫郡那珂川町片縄四七一一 武田幸三（叔父）

日に増し暖かくなつて凌ぎよくなつて来ました。（中略）

当方は皆無事に暮しております。いつも原爆の事については御心配をおかけして済みません。この度は又、四十周年記念のため、御心労をおかけします。「忘れた草」の原稿をお送りしなくては相済みませんが、何卒よろしくお願ひ致します。

遺族代表者の事ですが、私も八十三才を迎えたので、次のように改めてトさいますようお願いします。
故川上允の遺族代表者、武田キク子（叔母）、キク子は私の妻で、住所は私と同じです。

（六〇、四、一〇）

（調附記）川上允君の遺族代表者は、以前は母親の川上クニ様であったが、数年前に他界される折に、遺言によつて二十万円を遺族会に寄贈されたので、そのお金で大きな石灯籠一基を建造し、グビロが丘の慰靈碑の向つて左側に建立した。その石灯籠には、毎年八月九日の慰靈祭の日に、誰か遺族の方から供えられた千羽鶴が懸けられている。

新しい代表者の武田キク子様は、多分なくなられた川上クニ様の実妹に当ら

吹く風も夏めいて、うつすらと汗ばむ頃となりました。先生には益々御健勝にて御活躍いただいておりますことと、心より感謝申し上げます。

折々に頂きますお便りは、九十路を迎える何かと心細く、意氣地を失せがちな今のにとりまして、御仏の灯りにも似た思ひが致します。

顧みれば早や四十年の歳月を過ごしてしまいましたが、あの日の想いは鮮やかにこそなれ、消えることはありません。「どうして長崎などへ行かせたのか。」「長崎などへやらねばよかつたのに」と、悔やみ続けた四十年間でございました。悔いてもどうにもならないことは、分つているのでございますが、凡人の浅ましさ、それしか救いがないような心地でございました。

長崎の地を踏むことも見ることも、恐ろしく忌わしく思えて、とうとう四十年間、訪れる心地がしないままになつております。

先生をはじめ皆様の御尽力で、慰靈碑が建てられ、毎年御供養を行つて下さつてゐることは、大へん嬉しく有難く思つておりながら、老いの身の片意地と思われるかも知れませんが、どうしても自分の目で、その地を見る勇気がつきません。毎年長男や嫁が代役をつとめ、お参りさせて頂いております。この日は私にとって、一年中で一番長い長い日であり、居ても立つてもおれない心地のする、苦しい日でございました。

けれども、一つ支えになりますことは、亡くなつた息子が、生前に小学校で教えた（ほんの半年程）お子達が、立派に成人して、いまなを墓参りに来て下さつてゐることです。帰りには私の家に立寄つて、お声をかけて下さるのであります。この方々に、息子に代わつてお札を申し上げることが、生き甲斐の一つと思つております。

なお、先生方の一方ならぬ御努力により、遺族金も戴くことが出来、息子の

供養も、心ゆくまでさせて頂いております。お蔭様で、子供や孫たちと共に、楽しく健康に過ごさせて頂いておりますことを、感謝致しております。

今後、許されます限り永らえて、皆様の御好意に報いたいと思つております。どうか先生方も、いつまでもお健やかに御活躍下さいます事を念じつつ、右御礼申し上げます。

医專一年生 北野陽一

遺族 山口県宇部市厚南区東和苑 北野伊志（母）

北野光子（姉）

あれから四十年の歳月は経ち、世の中はすっかり變つてしまいましたが、遺族の皆様方は如何お過ごしでいらっしゃいますでしょうか。折にふれ、「原爆さえ落ちていなかつたら」という思いは、何年たつても変りません。

終戦から数年は、ひょっこり弟が長崎から帰つて来るような氣でおりましたが、弟のお友達などに会つたりするのがつらくて、福岡県から山口県へ移つて來ました。

その時は、父母と私たち夫婦の四人だったのですが、それから四人の子供に恵まれ、私は子育てに専念させて頂きました。今はそれぞれ独り立ちして、家を離れております。

父は昭和四十一年に他界致しましたが、母は体は弱つて居りますが、数え年八十八才を迎えました。近いうち米寿の祝をするため、その準備を致しております。

四十年前、一人息子を思いがけず原爆で亡くした父と母の思いは、私には察しがたい程ひどいものでした。今は平和に生活しております。母は宇部へ来て、お茶とお花を教えたりして、趣味と実益に、というより、悲しみから抜け出す手段でもあつたのでしょうか。父は体も弱く、病院通いの日が多く、仏壇の前でよくお経をあげおりました。孫を可愛がる父は、少しはまぎれた

の子供四人は、お蔭様で希望通りの大学に入り、就職も結婚も自分で決め、皆さんに祝つて貰つて、家庭を持つことが出来ました。孫が四人おります。宇部では母と私達夫婦と三人で、静かに暮しております。

弟の陽一は、何一つ思うようにならなかつた時代に生き、かなえられなかつた自分の希望を、私の子供たちにかなえさせてくれたようで、もつたいない気が致します。今の子供たちは平和の中で、食べるのもいろいろ豊かですが、

戦争中の事を思い出しますと、学校に行きたくても、動員などで工場で働かされ、やつと思い通りの長崎医大に入学出来たと思ったら、原爆で死んでしまった。本当に可哀想でした。

弟は入学式の時、家から出た後一度は帰省したかつたと思いますが、一度も帰らないままでしたので、その間の食糧事情も悪く、汽車の切符も買えず、帰りたくても度々の空襲警報で帰れなかつたことが、本当に残念でなりません。あの時のひもじさなど、今の子供たちに分かれるだろうかと思うことがあります。又、何才になつても、子供は親にあまえたいのに、父や母への思いを想像すると、すべて我慢させられたことが、悲しくなります。

入学式には長崎まで母がついて行きましたので、長崎からの最後のハガキに、「お母さんと汽車に乗つて一人で旅行するのは初めてです」と書いてあります。母は昨年の暮に足の骨を折り入院しましたが、幸に大したことなく、今は何でも自分で出来るようになりました。用心のためまだ入院中ですから、私だけの弟への思いを記させていただきました。

（六〇、四、三〇）

医專一年生 小森巖

遺族 福岡県行橋市大字下崎七三三 小森増雄（父）

小森巖の遭難歴

かもしだせんが、主人の転勤で、私たちだけ山口県内を移り住みました。私も

学附属医学専門部一年に入学、二十年八月九日、講堂で受講中に被爆、倒壊家

屋の下敷となり、一時失神状態になりましたが、暫くして意識を取り戻し、外
部から漏れる明りを頼りに、間隙を縫つて這い出し、一命をとりとめ自力で裏
山を越えて市内片瀬町の下宿に辿りつきました。下宿が一部損壊の程度で居住
に支障がなく、交通機関が全面停止で動けなかつたので、数日下宿に滞在し、
十二日に汽車が開通したので、同級生の森山晃二君（重症）を助けて長崎を出
発し、松浦線に乗換え、中里駅で下車して森山君を家族に渡した後、数百米離
れた我が家に帰りました。うちでは十三日早朝に、長崎へ様子を見に行く
ことにしていましたが、その必要はなくなりました。

私の症状は背部に指頭大の赤黒い痣が数個あり、咽喉部全体が熱傷で爛れて
いましたので、飲食が困難で被爆以来何も食べていないとのことでした。然し
下痢症状があつて、腸チブス様に時々黒い便を排出するので、重湯をすすめた
が嘔下が出来ず、翌日隊の軍医の診断を求めて注射をして貰い、十四日に佐世
保市内の従兄に漸く連絡がついて来診してくれましたが、開業医でありながら
自分も六月三十日の空襲で病院が全壊し、嬉野に疎開して、注射器一つもな
い哀れな状態なので、注射も出来ずに放置し、十五日の夕方終戦の噂を聞き、
十六日の午前一時十五分、腹部が上方から順次に硬直して、息を引取りまし
た。

その他の家族の略歴

父、小森増雄 明治三十八年五月二十七日生。大正十一年六月、佐世保海兵
團に入団、以来二十三年余り引き続き海軍々人として在団して、昭和二十年八月
十五日終戦、退役。同十月佐世保を引揚げて、郷里行橋市に帰る。
母、小森一枝 明治四十年九月二十日生。
妹、元松栄子 昭和八年三月二十一日生、元松家に嫁し、男児一人の母とな
り、北九州市に在住中。

弟、小森修 昭和十年一月二十六日生。小学校教諭で、北九州市に奉職中。
弟の嫁、小森弘子 昭和十三年一月十五日生。

* * *

以上何れも健在で、終戦の年十月中旬に佐世保を引払つて故郷に帰り、父の
生業の農業の手助けをして生計を樹てることとしましたが、何しろ職業軍人と
いう過去にたたられて、正業を得ることが出来ず、艱難辛苦は言を待たず、昭
和二十七年十一月、追放解除で待望の地方公務員として、市役所職員に就職、
一応生活の道が開けてホッとしたとは言うものの、子女の教育には事欠く程の
ものであり、昭和三十九年四月には定年退職となり、老令期に入り労働力も衰
えて、農業も廃業の止むなき状態です。しかも吾等夫婦は老衰と持病の糖尿病
で、十数年来悩みがあり、又妻は十数年前から脳血栓で右半身不随となり、私
も六年前脳血栓発病、その後も肺炎や心筋梗塞の余病を併発しました。特に今
回は五十八年六月に私が先に入院、その一ヶ月後に妻も入院して、以来約二ヶ
年を病床に横たわって、全く寝たきりで食事も排便も看護人のお世話になり、
何日快癒するとも見込みがたないので、息子夫婦も諦めて小倉の生活を止め
て郷里に帰り、家屋管理の傍ら、一週二回ぐらい私達の身の廻りの世話をして
くれますが、金銭面の負担はかけておりません。私の恩給と亡くなつた息子の
遺族年金などで充分事足りております。

どうか先生はお体に御留意の上、一日でも長くお世話を下さいますよう、お祈

り申し上げます。

(六〇、四、一三)

医專一年生 柴田正人

遺族 長崎県諫早市八天町一一六 柴田正義（父）

被爆四十周年を迎えました。悲惨な犠牲者達は今日、世界平和運動の貴い礎
になつたものと思います。

原爆投下後三日目に、諫早市から救援の弁当運搬のトラックに便乗させて貰
い、大学の焼跡に着きました。只茫然として歩き廻りましたが、基礎のコンク
リートはまだ熱く、その晩は運動場の片隅で夜を明しました。近くの浦上天主
堂は音を立てて燃えていました。

その後数日は毎日毎日遺体探しに駆けずり廻りました。家内は三回めには腹をこわし、代りに長女がついて来ました。私はその後、半健康体のまま生き永らえて八十九才になりましたが、家内は八十一才で世を去りました。

中村代議士方のお世話で遺族給与金を受け、大いに助かつております。戦没者正人の親孝行と思い、感謝して戴いております。

(一六〇、四、二十四)

遺族 柴田寿子(妹)

先生にはお元気の御様子、何よりに存じます。先日からお便りを戴きましたが、あいにく父が三月三日に石段で転んで、鎖骨、肩甲骨、手の甲の骨を折り、ギブスをつけておりました。私も気にかかりながら看病に追われて、お返事が遅くなり、申訳なく思っております。

四月十六日に右手のギブスがとれ、思ったより早く元気になり、病院の先生もびっくりされた位ですが、これも父の強い精神力の賜物と思い、感謝しております。

お箸も使えるようになりましたので、早速本人に申しましたところ、長くは書けないが最後のつもりで、と云いながらやつとの思いで書いてくれました。まだ頭の方もしつかりして、昔の島原中学の寮生活の話などよくしてくれます。いつまでも長生きしてほしいと願つております。

医專一年生 嶋村治

遺族 熊本県鹿本郡植木町一一二 嶋村源藏(父)
原爆被爆四十周年を迎えて

広島と長崎に原爆が投下されてから、四十周年の歳月を迎えました。四十年経った今日が、まるで昨日のように思われます。

私も長崎で被爆致しましたが、奇跡的にも生き残りました。原爆で子供三名を奪われ、原爆の悲惨残酷さは、身にしみてどんなに忘れようとしても忘れられません。無惨極まる原爆で亡くなつた数万人の御方、未だに原爆症で苦しんで居られる人が相当沢山居ますが、私共被爆者は特に同情せざるを得ませ

ん。本当に可哀想で、これもお互ひが戦争犠牲者です。

私は元気な子供三名を原爆で喪い、住家も家財道具一切を灰燼にし、哀れな姿で終戦直後に郷里熊本県へ引揚げましたが、被爆者の苦しみを考えます時、被爆者対策としては、その苦しみを少しでもやわらげる為に、国家補償の精神に立ち、被爆者の願いに真にこたえる被爆者援護法が、早急に制定されることが必要な課題で、今中央の日本被団協を中心に、熊本県にも被爆者会の会員が二四六八名居りますので、一致団結して政府へ要望の請願書を再三提出致しましたが、未だ実現するに至りません。残念ですが諦めることなく、引き続き要請を続けることに致しております。

私の次男治は当時十九才で、解剖学講堂で小野直治教授の講義中でしたが、受講者一三五名は小野先生と一緒に殉難全滅致しました。私は登校した治が心配でたまらないので、翌朝直ちに駆けつけて方々探し廻りましたが、発見出来ず、夕方になつて一年生の遭難場所は解剖学教室と聞き、行つて見たところ、沢山な白骨が円卓形に並び、側にニューム製の弁当箱や金属製のバンドの留金が散在して、目も当てられず、涙が出て可哀想で可哀想でなりませんでした。

私は治の遺体がどれかの白骨の中に混つていると思い、現場にあった焼け残りニューム製弁当箱二個に、白骨片を一つ一つ拾い集め、本籍地に持ち帰つて、植木町の金蓮寺に預けて安置致しました。その後五十七年五月、植木町山坊の私有墓地に、嶋村家の納骨堂を建設して、その中に小野直治先生初め、医專一年生の殉難者一五五名の氏名を書き添えた供養塔を新設して、みんなの冥福を祈り、毎月命日には金蓮寺の住職にお願いしてお経をあげて貰い、供養專一に致しております。

私の孫の佳雄(今二十才)は、叔父に当る治が殉難したので、その後を継ぐと云つて、一昨年宮崎医大に入学しました。私はこの孫が立派な医師になって、人のため社会の為になつてくれるよう、念願し且つ楽しみにしておりま

前述のように、私は熊本県の原爆被爆者の会のお世話をして居りますので、その職責を果すために、会員一同が一丸となつて、再び長崎・広島のような戦禍が起らないよう、又、核兵器の廃絶や非核三原則を堅持することを議決宣言するように、日下会の実行委員として活躍し、県に請願申請中です。（後略）

（六〇、四、二七）

医専一年生 調 弘 治

遺族 長崎市本原町一一一九 調 純 子（母）

御遺族の皆様には、その後お変わりもなくお過しでございましょうか。

原爆が落ちて四十年、私もいつの間にか年をとつて七十九才になりました。

死んだ子の年を数えるのは愚かなことでございますが、十六才で死んだ弘治も、生きておれば五十六才の医師になつて、白衣姿で働いているだらうと思ひますと、辛い心地が致します。

八月九日が来ますと、大分、西宮、鹿児島からお参りに来た娘や孫達をつれて、朝早くからグビロが丘の慰靈碑にお参りするのを楽しみにしておりましたが、主人は年を召した遺族の方が山に登られるのは大変だうと申して、昭和五十六年からは、医学部長にお願いして、下の原爆記念講堂で行うようにして頂きました。皆様は大変お喜びのようですが、それでも年毎に、櫛の歯が欠げるよう、お年寄りの方のお姿が見えなくなるのが、何よりも淋しうございます。

遺族会のお世話ををして頂いておりました役員の方も、初めは七人おられましたが、四人お亡くなりになつて、今では三人になつてしましました。主人も八十六才になりましたので、いつまでお世話出来るか分からず、とこぼしております。

弘治の遺骨は、福岡県の片田舎にある主人の墓地に納めてあります。交通の便が大変悪いので、お盆の頃に一度お参りするだけでございました。所が今春偶然に、長崎市内にある滑石櫻原靈苑に求めましたので、一両年中に墓碑を建

てて、兄の精一の遺骨と一緒に此處へ移したいと考えております。

滑石は私共一家が、戦時に一年半余り疎開していた所で、櫻原靈苑は見晴しのよい便利な所にありますので、弘治達も定めし喜んでくれるだらうと、お墓の出来るのを楽しみにしております。此處でしたらお盆だけでなく、子供や孫達も度々お参りしてくれるだらうと考えております。私も年のせいか、腰や膝が痛くて、正座が出来ないので困っております。皆様もどうかお体をお大切に、いつまでもお健やかにお過し下さいますよう、お祈り申し上げます。

（六〇、五、二五）

医専一年生 関 家 雅 俊

遺族 愛媛県松山市御幸二丁目一二一三 関 家 貴美子（妹）

祈りをこめて

ようやく厳しかつた冬が去り、春もいつしか過ぎると、やがて八月九日、長崎からあの平和公園や、浦上天主堂の祈りの様子が報道される。十一時二分には、松山から私達も一緒に、ご冥福をお祈りするのです。

年を重ねて、今年はもう四十周年。今静かに、遠く長い長い道を振り返つております。

亡くなりました関家雅俊は、私の実兄でございます。医専一年生。希望していた医学の道に進めたことを、無上の喜びとして、それはそれは燃えていました。

すべておみくじ通り大吉で好調！一日も早く患者の手をとりたい、と便りにありました。短い生涯でしたが、幸せ者でございました。この歳月をへた今も、多くの人から慈愛深いお言葉を頂き、ご芳情に唯々頭が下ります。

昨年秋のことでした。兄が生前に最も尊敬し、親身になつて何かとお世話して下さった松山の桑原産婦人科病院長（東大卒の桑原慶人先生）が、ご多忙にも拘らず、奥様とご一緒に長崎を訪ね、お参りして下さいました。

兄もあるの童顔を綻ばせて、どんなに喜んだことでしょう。当時、先生の大先

輩でいらっしゃる内藤勝利教授は、長崎医大産婦人科に居られ、所望されて桑

原先生が助教授として就任されることになつてゐたのです。あの日の原爆さえなかつたら、兄も教えて頂けたのに、何という悲しい運命だったのでしょうか。

素晴らしい教授が、閃光に無残にも不帰の客となられ、誠にお氣の毒でなりません。

兄雅俊は、大正十五年四月に、長男として生まれました。八人の子宝に恵まれた父母、そのうち男子は三人。それが従兄妹同士結婚の宿命でしょか、四、五才になるまでに、四人の子供が次々に病死したのです。是非医者になりたいと言う兄を、父母はどんなに頼みにしていたことでしょう。その生活のリズムは、体のすべて、心のすべてで呼応していました。命綱とも言うべき長男が、喜び勇んで行つた長崎で、原爆死。

もしかしたら、どこかに逃れていて、ヒヨッコリと一想い続けました。いつかはーと、そんな願いを、どんなにみんなが持ち続いたものでしよう。

兄は杏の実や白桃に笑顔したあの日、あの味！鹿の子百合やレモンの香りも好きでした。又、よく手料理を楽しんでいました。善哉、カレー、焼き飯といつたものです。油絵、水彩画、写真にも興味津々。

昭和十七年秋には、ボート部選手として、神宮大会に出場しました。思い出

す顔は、みんな笑顔、悔いなしの日々だったのでしょう。でも非常な時勢を覚悟してか、ノートに書き残していた中に、常に絵心を持て、歌え、みんな仲良くなづらであります。そして自分の志をついで女医さんになつてくれ、と記されていました。一人も女医になれず、平凡な母親になつてしましましたが、後に続く孫の誰かが、医療の道に進んでくれたら、と思うこの頃です。

愛媛県には、長崎大学出身のお医者さんが沢山居られ、大いに活躍されているので、とても嬉しく頼もしいです。父は五十才近くまで、県下の旧制中学教員として、夏目漱石の『坊ちゃん』で有名な松山中学校を最後に引退、統いて印刷業を経営し、四十七年の夏まで二十年間頑張りました。こうして先立つ

て逝つた息子の分も、働いたのでした。

父は又、俳優の中村雅俊の歌やドラマにも見入つていました。きっと亡くなつた息子と名前が同じだから、会つているような気がしていたのでしょうか。

その父も五十一年三月に、とうとう病に倒れました。母はそれから五年後に、高血圧が原因で、この世を去りました。晩年は、雅俊が松山中学時代に習ったノート類を出して、今日で英語が終る、明日からは漢文、次は生物を勉強するなど、今は亡き息子が書つて歩いた道を、もう一度自分も辿りながら、想い出を温めていたようです。

慰靈祭の案内状を読むと、長崎への気持ちは募るばかり。「もう一度出席したい。調会長さんにも是非お札を申し上げたい」と、ふるい起つてみたものの、結果は病氣で、旅する自信を失つた身を嘆くのでした。生前父母が繰り返し言つたのは、「あの子が生きていたら、原爆さえなかつたら」と。

調先生は大事な「子息さんを一人も亡くされ、どんなにか心痛のことと、お察し申しております」。

今までに出版されております「忘れな草」を読んでいますと、惨状極まりない八月九日の長崎が、頭中にひしめくのです。みんなみんな掛け替えのない方ばかり、ご立派な人々でした。真剣に生きられました。手を合せて拝みます。そして心からお祈りします。どうか安らかにお眠り下さい。

昨年は長崎にお参りしようと、私の娘や妹と約束していましたが、二月に妹宅の義母が倒れて半身不随になり、六月には私が右手首骨折で通院、なかなか思うようになりませんが、何時も長崎は心の奥にあります。

今も尚、広島、長崎市では、原爆犠牲者が新しく名簿に記入されてゆきます。余りにも深い戦争の傷跡を切々と感じ、平和な世界を希望してやみません。　人　　合掌

医専一年生 田代 正

遺族 佐世保市福石町二〇一三 田代春子（母）

長崎に原爆が落されてから今年は四十周年に当るので、「忘れた草第七号」が出版されるとの機会に接し、拙い詩を添えてパンを執りました。

一口に四十年とは言うものの、刻みは早く又永く、一日として頭より離れる事のない憶いがあります。

主人の田代伊平も、警察署と医師会からの要請で、救護隊長として九日の夜に佐世保を出発し、翌十日朝、七時すぎに長崎に着きましたそうで、早速救護活動に当り、自分の手で長男正を焼いて、十二日にお骨を持って帰宅致しました。三日間、放射能の中をさまよい歩いたためか、二次放射能の影響もあって、二年後に他界いたしました。

二人の大きな柱を亡くした私は、やるせなく寝つかれぬ夜もありましたが、お蔭様で小さかった二人の男の子も、正の跡を嗣ぎ、医師として身を立てるようになりました。私もこの四月に八十二才の誕生日を迎えることが出来ます。憶えれば悲しみも、諦めと時が手伝って、平らな気持で心静かに来世に逝かれそうです。短歌のまね事で、八月には一首を詠み、仏前に供えて慰さめ、又なぐさめられて居ります。拙い詩ではございますが、記さして頂きます。

- 亡子に会いて闇に覚める枕辺の 確かなるセコンド耳朶に切なし
- 季めぐり今年もカンナ野に赤し 学徒と逝きし子の原爆忌
- 瓦礫野と化せし長崎たたしめて 夾竹桃のはらはらと散る
- お茶を好みし男の子なりしよ抹茶点て 今日は命日たっぷり供ゆ
- 季めぐり今年も芽吹く庭の樹よ 逝きし娘、息子、夫は還らず
- 去年は病み蟬に託せし原爆忌 詣らむ今年亡子は五十七才
- 眼裏に剣道二段の音子は笑み 十七才のままに顕つなり
- 真夜のテレビにはためく国旗おろがみて 平らなる身を謝して寝につく

(六〇、四、六)

医専一年生 田吉正英

遺族 長崎市西山町一―九五 田吉チエ（母）

次々に咲く春夏の草木をながめで居りますと、生命のよろこびを思います。

それにしても、この平和を知らずして爆死した若人のことを、残念に存じます。何事も思いつつ書けませんで、相すみません。

先生の深い愛情と御労苦を知りながら、お手伝いもせず、申しわけない事で御座います。つきましても年々老化と申すのでしょうか、意のままにならぬ有様で、自分ながら苦笑いたして居ります。お許し下さいませ。

参上すべきで御座いますが、最近はこの山道を用心して歩く程で、自重いたして居ります。そのうちに大楠さんと一緒に、出かけたいと存じます。拙い文で申しわけなく存じますが、御笑納下さいませ。 (六〇、四、二八)

追憶の影を求めて四十年

- 原爆で失いし子を追い語る 亡夫も去り逝き二十六年を経ぬ
- 紫の藤の花咲く路を行き 勤労学徒と通いし吾子よ
- かなめ垣幼き吾子が植えし枝 紅く燃えゐて成木となる
- 正英が我に齡を呉れしとや 八十歳は露々とせる
- 戰いを憎みしままに医学書を 防空壕に残したる吾子
- 八月の九日忘れじと訪ね来る 乙女も五十九才の老女となりぬ
- 原爆の焼け跡に落つる学生の 弁当箱の崩れたるまま
- 旨きものあたえぬままを原爆に 奪られし男の子いとほしき日よ
- 切々と若き命を歌いしか ケビロが丘の夏草の叢
- 赤児より年々伸びし写真帖 医専に入りしが最終となり

医専一年生 鶴武俊

遺族 大分市金池南一丁目二二一五 鶴喜代蔵（父）

あの呪わしく悲惨であった原爆の日から、早くも四十年を経過して、その記憶も風化されようとしていますが、心の傷跡は中々に消えるものではありません

ん。最愛の吾子、将来を託する支柱を失った親の痛手は、いつまでも癒えるものではありません。そんなうつろな気持で半生を過して來た四十年の歳月は、苦しく長いものでした。

心の張りであつた仕事も、第一、第二とも停年で辞め、子供達もそれぞれに親の手元から離れ、老人夫婦二人となつて間もなく、最大の絆侶であつた妻も他界して、独りぼっちになつた時の孤独感と寂寥感は、本当に何とも云えないものでした。

その後、年甲斐もないと思いましたが、矢張り頼れる者が欲しく、後添えを迎え、色々と世話を受けるようになり、いくらか心の余裕も出来ましたが、心を外らす仕事もなく、特別の趣味道楽もなく、ただ平々凡々としてほかに考えることもない現在、暇があれば時々ふつと想い浮かべるのは亡くなつた子供の事ばかりで、死んだ子の年を数える愚を繰り返すばかりです。

子供や孫達が時たま周囲の者達と訪れ、色々と世話したり慰めて呉れるものの、何の楽しみもなく、このまま朽ち果てて行くかと思う孤独感と淋しさはどうすることも出来ません。

ただ風洞の中のような生活の中に、唯一の心を癒やす楽しみは、年に一度、皆様が心を込めて催して下さる八月九日の慰靈祭に参拝することです。乗つた

氣分が平常にもどつて思うことは、日頃心に思つてゐる気持ちと現地に残つてゐる彼の魂とが、脳膜の中で合致して、そのような幻覚を起こすのでしょうが、私の心のどこかでは、年取つた父が遠路わざわざ、亡くなつた母こそ一緒にいるからではないかと思われてなりません。亡くなつた子に対して、最早や何一つしてやれない現在、せめて年に一度の慰靈祭位には参拝して供養してやるほか、今は手だてが無いのですから、ここの数年参拝を続けていますが、現在の心境は、八十路を越えて少々身体が弱つてゐるが、一年でも多くお詣りして、供養し、冥福を祈つてやりたい一念で一杯です。

亡くなつた子は旅費などくれないが、こんな嬉しい供養が出来るのも、国から沢山な遺族給与金を戴くお蔭で、本当に幸せだと心から感謝して居ります。

被爆後四十年、振り返つてみれば遠い遠い昔のように思われるが、苦渋に満ちた長い年月でした。然し今の平和な生活を思うと、どうかこれから先、二度とあのような悲惨な目には逢わないよう、平穏で静かな平和が続くことを、衷心より希い願い祈るばかりです。

医專一年生 土 橋 弘 基

遺族 長崎市愛宕二丁目四一一四 土 橋 清 子（母）

きびしかつた冬もようやく去り、弥生三月の声をききます時、身も心も何となく明るくなりました。

（六〇、四、一四）

調先生よりお手紙をいただき、被爆四十周年の記念に、「忘れな草第七号」をお出し下さるとのこと、ほんとうにうれしく有難く、厚く厚く御礼申し上げます。

あれから四十年の歳月が流れ去ろうとしておりますのに、よくもここまで生きのびて来られたものと、神仏や亡き弘基の守護を、感謝せずにいられません。有難うね。」と迎えてくれているような気になつて、「ああ、久し振りだつたね。今年も逢いにきたよ。」と駆けよつて、手を握りしめているような幻惑にとらわれ、一瞬目に涙する有様で、自分ながら可笑しくなります。

庭には私の好きな、ボケ、ヒヤシンス、フリージャ、匂いすみれなど、生きているところにあります。咲きほこっていますのに、人間は何と淋しく美しいものでございましょうか。「肉体は滅びても魂に存在している」といいますのに、姿の見えないことの悲しさは、言葉にはいつくされません。

私の思い出は、やはり十九歳のイガグリ頭の弘基でございます。時には白衣のお医者様姿を想像することもありますけど。

主人は昭和五十五年の青葉かおる爽やかな五月九日に、眠るように八十七歳

の生涯をとじて逝きました。私はそのころ元気で、主人の看病を心おきなくして見送りましたこと、何より有難く感謝しております。只今は八十四歳で膝や足が痛みますが、痛さを我慢すれば、歩行は差支えありません。自分でできることは、気を張つて心豊かに、老後をすごすことだと思っております。

緑に包まれた静寂なグビロが丘に、学業半ばにして逝かれた学友と共に眠る弘基よ、毎年盛大に慰靈祭をしていただき、多くの方に参拝していただく有難さ辱けなさは、言葉に云いつくされません。私は命のある限り、八月九日に参列いたしますのを、唯一の楽しみにいたしております。

*

同封のコピ一は、私が「おとしよりのひろば」に掲載したもので、菊岡は私の旧姓でございます。皆様が大変感銘して下さいまして、山口、富山、鹿児島などから、沢山お便りをいただき、今も文通しております。

美しくすこやかに老いたい

長崎県 菊岡 賴代（八十歳）

人生八十年といわれるいま、心も体も若わかしく年齢を重ねていくことは、何ものにも替えがたい幸せなことでございます。いい年をとりたい、ひとつ年をとるごとに、ひとつモノがわかつてくる、そんな年をとりたいのです。

考える。書く。読む。働く。辛抱する。笑う。理想的に上手に老いていく。美しくすこやかに老いていくことを、心から願わぬ人がありましょうか。

若いときの苦労は笑つて耐えますが、年老いてからの心さびしさ、みじめさはとても悲しいかぎりです。そんなとき、日曜版の記事でなぐさめられたら、いかがでしょうか。私は、わけても肥田先生のやさしいお心こもる言葉が身にしみてありがたく、ノートに記して守っています。

命ある限りすこやかに明るく、何とも善意にうけ、毎日を感謝の気持ちで過ごしたいと思います。みなさまのご多幸とご長寿を祈念いたします。

（六〇、三、二六）

医專一年生 朝 長 習 や

遺族 大村市上小路一〇一—二 村 部 準（兄）

原爆落下後満四十年、毎年八月九日が近づくと、当時偶々京都大学に在学中だった私は、夏休みに帰省して、一週間を楽しく歓談に過ごしたことを思い出します。

昭和二十年の夏には大村に帰っていましたところ、八月九日の朝は虫の知らせか、弟の習也が汽車通学で長崎に行くのを、春日神社の社頭で互いに手を振つて別れを惜しみ、家に帰り縁側に寝そべつて、弟は今頃授業を受けているだろう、と考えていた十一時過ぎに、長崎方面を覆う黒い雲（原爆のキノコ雲）と同時に、風圧（爆風）で座敷の欄間の一部が落ちて来ました。

九日の夕方になっても、十日の終列車の時間までも帰らない弟を待ちわびて、大村駅に行つてみたら、駅の外側まで罹災された人達が溢れていました。まるで地獄絵図を見るようでした。

習也の身が案じられるので、十一日には母と一緒に長崎に出かけ、先ず姉の嫁ぎ先である山里町（今は平野町）の高谷家に行きましたが、ここでは高谷の御両親、二人のお嬢さん、二人のお孫さん、合わせて六人が爆死していました。次に長崎医大の基礎教室を訪れましたが、何もない荒地に茫然と立ちすくみ、焦土と化した浦上一帯を通つて、穴弘法、西山を経て、被爆者達が収容されている市内の病院、学校、更には佐賀県の嬉野病院などを、八日間探して廻

りましたが、終戦のことは嬉野で初めて知りました。

次の浅田政子姉は、大浦下町にいたので、安心と考えていた処、次女の美智子（当時活水高女一年）と一緒に城山に疎開していて被爆し、八月十三日に死んだ美智子と、十八日に死んだ長男勝孝（当時医専三年）を見送り、残った長女良子の行末と弟習也の安否を気遣いながら、八月二十五日に政子姉も死亡しました。母や義兄たち身内四人で、野辺の送りをすませ、姪の良子を伴つて大村に帰り、故人の冥福を祈りつつ過ごしました、原爆以来一ヶ月半の経過が、ほんの昨日の事のように思い出されます。

弟習也の姓が私と違っているのは、私の曾祖父に当たる朝長家が永く絶えていたのを再興するために、習也が養嗣子となつて跡を継いだ為であります。

習也の思い出としては、高谷千治義兄の実兄である重治氏の話がある。九日の夜、重治氏が焼跡の整理をされている時、防空壕に物言う氣力もない学生が来て、翌日出て行つたのがどうも習也君だったらしい、との事だったが、義兄も姉も私も、確かにそうだったに違いないと今も考えています。

大村の家は昔のまま残っていますが、昔弟が植えた柿の木、青桐、その他が、五十年を越える古木となり、手入れしていた竹林も大きく成長しています。また弟と朝夕散歩した愛宕山、母や弟と参拝した春日神社など、家の周辺七〇〇メートル位の処に、昔のままの姿が残り、今は「生き人々との思い出を偲んでおります。

（後略）

医専一年生 中山 昭之

遺族 佐世保市浜田町二一一 中山 愛子（母）

お彼岸もすぎまして、そろそろ桜の季節となりましたが、先生には御元気の

御様子、何よりとお慶び申し上げます。

私は、今年の二月二十二日で八十六才となりました。お蔭様でからだはどこも痛いところもなく、元気に過ごして居ります。いつも御無沙汰ばかり致しまして、申し訳ございません。あしからずお許し下さいませ。

私、この度先生からのお便りで、四十周年にもなりますそうで、びっくり致しました。朝夕佛前にお参りしまして、主人と昭之の写真の前でお話しいたしますのが、私の日課でございますので、月日のたつのが分かりませんでした。

この度は「忘れな草、第七号」の出版をなさつて下さいますそうで、ほんとにお世話様でございます。私には孫九人、ヒ孫九人居りまして、時々たずねてくれますのが、何よりの楽しみでございます。

私宅は、父の代は海軍省の木材の御用達商をして居ましたが、主人の代から用達の方は弟にゆずり、小売に転向して今に続いて居ります。息子は東京医科歯科大学を卒業して、市民病院に歯科医としてつとめて居ましたが、眼を悪くし、手術を二度もいたしましたので、歯科医は眼が一番大切なのですから、断念して木材商になり、現在にいたって居ります。

私は現在息子夫婦に養われて、何の心配もなく、楽しく過ごさせてもらつて居ります。お小遣いも遺族会のお世話で、年金を頂きますので、その心配もなく、感謝して居ります。

昭之の事は、近所に小学校も中学校も一緒でしたお友達が、耳鼻科を開業しておられます。その方を見るのが一番思い出されてつるうございます。でも運命ですから仕方がございませんので、なるだけ思い出さないことにして居ります。尚、遺族代表者は、今迄通りでよろしうござりますから、よろしくお願ひ致します。

医専一年生 長谷 茂

遺族 長崎市花園町一四一五 長谷 弘（兄）

長崎市芒塚町二二八 内藤 孝子（姉）

あの忌まわしい原爆が投下されてから早や四十年、忘れようととしても絶対に忘れない、人類最大の悲惨事であります。

ひたすらに、國の為、人類幸福の為にと、その青春を打ち込んでいた尊い命を、一発の原爆で無惨にもたたき潰すとは、余りにも戦争の痛ましいあたりを

かぶつた方々に対し、戦争は絶対に此の世から無くさねばなりません。然るに今も尚、地球のあちこちに戦火が絶えません。

弟は付属医専に入学して、一ヶ月余りしかたっていませんでした。が、ドイツ語の辞書を戴いたとか、又、医学書が手に入ったとかで、とても喜んで朝夕勉学に励んでいました。今生きて居れば五十七、八才になりますが、多くの学友の方が、医学者としてこの世に貢献されているだらうと考へると、本当に残念でなりません。

当時母と二人で医学部辺りを探しまわり、遂に会うことも出来ず、くすぶり続けていた異様な臭氣のする原子野の惨状は、思い出したくありませんが、後世にかくも残酷な兵器を使つた戦争を、二度と繰り返さない為にも、是非伝えておきたいと、拙い筆をとりました。

橋 村 良 子 (妹)

涙と怒りの中に、四十年の歳月は流れ去りました。あの日の惨状は恐らく私達の命のある限り、脳裏から消え去る事はないでしよう。戦争の恐ろしさを、私達が率先して語りつながなければなりません。

兄の茂も今生きていれば五十七才、脂の乗り切つた働き盛りの医者で、医学の為、或いは社会の為に、貢献していることでしょう。

四十年前のあの一瞬の爆弾で、尊い生命を吹き飛ばされ、闇に放り出されて、本当に可哀想なことでした。

原爆投下以来、母が捜し歩いていたにも拘らず、全然音信がなく、消息がわかりませんでした。それから四、五日経つてからだつたでしようか。骨組だけになつていた医学部の教室のあたりで、捜し求めていた兄の姿は、小さな封筒に入ったお骨でした。大学の方から戴いた時の悲しさ、涙があふれて来ました。母はそのお骨を胸に抱きしめ、「茂ちゃん、茂ちゃん」と何べんも呼び、「さぞ苦しかったろうね」と、いとおしく泣きすがっていました。

当時私は十二才でしたが、兄がどんなに勉強し、向学心に燃えていたか、幼

な心に目に浮かんで来ます。家族の者からあきれられる程、暇さえあれば勉強日々の毎日で、食事の用意が出来て、「こはんよ」と母が呼んでも、なかなか応ぜず、時間を他の事に費やすのが、惜しいという毎日でした。

私は始終、事ある毎に子供や孫達に、戦争の恐ろしさ悲惨さを語り、二度と戦争をしてはならないと話しています。大学で亡くなられた先生方や若い学生の皆さん、どうか安らかに眠つて下さい。私達の力で、平和な社会を築かなければならぬと思っています。

(六〇、三三〇)

医專一年生 西 大 雲

遺族 東京都練馬区石神井町三一一三一八 西 大由 (兄)

弟へ

調先生から御連絡を頂いて、「忘れな草、七号」を作つて下さるので、何か感想を書くようになると、今こうしてペンをとつてみると、

「弟よ、お前が死んでから四十年にもなるというのに、私の瞳にはつきりと、お前の姿が浮かんでくる。

それは幼い日の姿であつたり、白衣を着たもつともらしい医者の姿であつたりする。

どこかでお前は今年五十八才になつている筈だ。

いつだつたか、だれかの本でよんでも、いたく感激した言葉に

『死ぬことは、この世から消えてなくなることではなく、その人間が生きていな」という事実を、証明するものなのだ。死ぬ人間の一生にしめ括りをつけ、その生涯を完成されるものだ。消滅ではなく完成だ。』というのがあった。

お前は十八才で生涯を完成させたことになる。人間はいつか必ず死ぬ。お前は与えられた人生を、最後まで立派に生きたと私は思う。

そして今もこうして私達と一緒に居る。」 (一九八五、三、一六)

*

*

*

東京もやつと春らしくなつて参りました。

扱て、先日は有難い計画をお知らせ下さいまして、深くお礼申し上げます。

弟のことは折にふれて想い出しあるものの、ついつい日常忙事にかまけて何一つ供養することもなく打ち過ぎて居ります。

私共の近状と申しましても大した変化もなく、馬齢を重ねているのみですが、目下学生部長をさせられておりまして、どうしても止めさせて貰えず、この四月からは、二学期目に入らせられることになつて居ります。いつの世でも同じでしようが、時々とぼけた者が居て困ります。

仕事のことは、昨年帆船日本丸の船首像を作り、テレビや新聞に何回も話題を提供して、世間をせまくしてしまいました。日本丸が長崎に寄港するようなことがありましたら、是非見て下さい。

福岡県築上郡大平村で医者をしている義弟大竹建三は、医者の不養生で且下別府の九大病院に入院中です。その伴の大竹壯一は、長崎大学医学部でお世話をになり、高松の精神病院に勤務中で、何とかやつて居るようです。以上が近況報告でございまします。

医專一年生 西 村 弘

遺族 長崎市北陽町六一五 西 村 正 (兄)

拝復 玉翰有難く拝誦いたしました。先生には日頃遺族会のことと大層お世話に相成り、心から感謝申しあげております。一向にお役に立つことができず、心苦しく存じます。

早いもので、あのいまわしい原爆投下から四十年になります。弟の弘が生き

て居れば、そろそろ還暦を迎える年頃になりますが、どうしても亡くなつた若い頃の面影しか浮かんで来ません。

私共七人の姉弟のうち、男は五番目に生まれた長男の私と、次いで生まれた弟と二人だけでしたが、私は大東亜戦争に飛行予備学生として海軍に入隊し、その当時は零戦搭乗員として、南方に転戦していました。

弟は佐世保中学から陸軍士官学校と長崎医大付属医専の両校に合格したそう

ですが、長男の私が最も危険度の高い海軍の飛行機乗りで戦地に征つており、せめて一人残った弟は医師にしたい、また軍医としてもお国に御奉公が出来るとの両親の意見をいれて、医専の道を選んだそうです。戦争の末期に内地に帰つた時、その事を聞いた私も、弟が将来医師になり、両親を守つてくれると心強く思い、はげしい空中戦にも、心おきなく頑張れたものでした。

しかし、人間の運命は皮肉なもので、当時消耗品と言われていた海軍のパイロットであつた私が生き残り、安全な筈の医学生であつた弟が原爆の犠牲となつて早く逝く結果となつただけに、両親の悲しみは如何ばかりであつたか、痛い程わかる今日この頃です。その両親も、父が昭和三十六年に、母は昭和四十九年の春に亡くなり、今では私が弟の供養をさせて頂いております。

毎年八月九日に執行していくだく大学の慰靈祭には、姉や妹も集まり、みんなで参列させて頂き、グビロが丘を訪れてそのあと、揃つて食事をして思い出話に一ときを過ごすのが、私共姉弟妹の大事な年中行事となつています。これも終始変わらぬ調先生の御熱意を中心とした、皆様のおかげと感謝しております。(後略)

医專一年生 橋 本 良 平

遺族 佐世保市塩浜町二一一六 橋 本 憲 二 (兄)

春暖の候、先生にはお元気でお暮らしのことかと存じます。皆々様のお世話をなされ、何かと御苦劳様でござります。私たち遺族はいつも感謝致しております。

実は私は医専一年生だった橋本良平の兄で、慰靈祭には毎年お参りさせていただいております。

母は五十九年八月二十日に死亡致しました。そのため遺族代表者には私がなりますので、どうかよろしくお願ひ致します。

医專一年生 藤原元輔

遺族 長崎市泉町四六九—二六 藤原元（父）

（前略）平素は私ら遺族のためいろいろ御尽瘁を賜り、厚くお礼申し上げます。

御賢察の通り、藤原直子は五女に当たり、私ども愈々老齢となりましたので、一、二年前から同居している次第でございます。毎度の御祭典にもお蔭様で、必ず参詣させて頂いております。（後略）

（六〇、四、三〇）

医專一年生

松田藤祐

遺族 佐世保市塩浜町三一六 松田和夫（弟）

先生、早いもので今年で丁度四十周年ですね。母も現在足が不自由なため、佐世保市営老人ホーム白寿荘にお世話になつて居ります。本人も出来る限り慰靈祭には出席したかったのですが、思うにまかせず、病床より黙祷を捧げて居ります。

私はあの日がめぐり来る度に、あの兄の最後の情景がよみがえつて来ます。

それは終戦の二日後、八月十七日午後五時頃でした。私は動員先の崎辺の空襲

より自宅へ帰ると直ぐに、共済会病院の兄の部屋へ駆けつけました。その時両親は、兄の看病に疲れはてて、ベットの側で眠りこけて居りました。

兄は私が来たことに気付き、さも待ちわびていたように、残された氣力をふりしぼつて、両親を呼んでくれと言い、私が両親をゆり起こすと、激しい内臓破壊による苦しみと嘔吐の中から、遺言が始まりました。

「お父さん、お母さん、先に逝く不幸をお許し下さい。和夫、平泉先生の武士道復活と菊地勤皇史、松浦伯爵賞（兄が中学校卒業の時に載いたもの）をやるから、しっかり勉強せろ。次に姉に、義兄が出征から帰つたら宜敷く言つてくれ。最後に高橋章文さん（小、中学校で一番仲がよかった友人）によろしく、又恩師石田先生によろしく言つて下さい」と言い続けました。

あまりの苦しさの中よりの別れの言葉を、父が見かね、

「藤祐もう言い残す事はないか」と問い合わせました。すると兄は、しっかりと頭を縦に振りました。その模様が、つい昨日の出来事のように目に浮かびます。

父はしつかりした口調で、「藤祐、すぐに樂にしてやるからね」と言い、「先生、注射をお願いします」と言った次第です。兄はこの父の言葉が聞きとれたのでしょう。

「天皇陛下萬歳！」「さようなら」と言い残し、息を引き取りました。

私達家庭はその数分後、今まで見たことのない、すばらしい兄の笑顔に接することができました。

兄は今天国で、残された我々を見守つている事でしょう。先生、たわいない事を書いてお許し下さい。先生も母も、残された当時の方々は、随分お年を召されました。が、私達兄弟姉妹はまだ五十才前後です。先ある限り慰靈祭には出席し、また子供達にも申し次ぎたいと思ひます。

あの様な間違いを二度と起こそぬ為に。

（六〇、四、一七）

医專一年生 三宅紀男

遺族 東京都練馬区南大泉一一一〇一六 三宅敏郎（兄）

ようやく桜の花が咲き始めましたが、膚寒い日もある昨今でございます。

母は満八十三才となり、足がやや不自由ながら、元気で暮らしております。

私は昨年十月、国立ガンセンター病院に入院し、先月ようやく退院したところです。従つて年賀状も差し上げず、大変失礼いたしました。

病院での治療の仕上げで、放射線による治療を受けましたが、弟は放射線を大量に浴びて死亡いたしましたのに、私は生きるためにそれを利用しました。その対比と因縁の深さに、感慨無量です。

扱て、この度の「忘れな草」のご出版に際し、ご案内を頂戴いたしましたが、父が存命ならば何か纏つたものをお送り出来るかと思ひますが、右のよう

な次第で、近況報告のみでご容赦下さいますよう願い上げます。

今年は四十周年ですので、昨年から妹達と話し合つて、慰靈祭にお伺いしたく思つていましたが、まだ病院に通院していますので、目下思案中であります。しかし、何時かは弟の足跡を訪ねてみたいと、念願しております。

なお、些少でございますが、寸志を同封いたしました。忘れた草の出版について、会議費の一部にでもご使用下されば幸せに存じます。（後略）

（六〇、四、七）

医専一年生 力 武 豊 和

遺族 佐世保市保立町二〇一一六 力 武 藤 代（母）

被爆四十周年を迎へ、又新たに当時の事を深く考えさせられます。思い出せば、あの悲惨な惨死、涙が浮び出て参ります。

下宿屋の方のお話を聞きますと、四年生の方が、「豊和君、今日は学校はやめた方がいいぞ」と云われ、その積りでいたそうです。ところが、一年生の友人が誘いに来られ、断りきれずに行つてしまつたそうです。

十一時二分に原爆が落され、苦しみながら下宿に帰る途中、道路で倒れていたらしいです。下宿屋の方が心配して探しあて、家まで連れて行つて貰つたそうですが、間もなく亡くなつたとのことでした。本人の苦しみは勿論、家族の者にも会わずに息を引きとり、如何ばかりか辛かつたことだらうと思います。

思えば思うほど、胸が痛むほどでござります。現在いてくれたら、開業も出来て、皆様のお役に立つていてることでしよう。

主人も昭和五十二年に、七十五才で亡くなりました。只今、私は淋しい日々を送つております。

○ 人の世の春をも知らず逝きし子を

胸にいただいて母は老いやく

先生、お元気でお過ごし下さいませ。

薬専三年生 石 田 憲 敬

遺族 熊本市二本木二丁目六一四 石 田 保 利（父）

長崎に原爆が落ちましてから、本年八月九日で丁度四十年になりますが、先生にはお忙しい中にも拘らず、記念事業として「忘れた草、第七号」を御出版、遺族に配布下さることを敬承、洵に有意義なこととお慶び申し上げます。

就きましては私も遺族の一員として、何なりと御協力申し上げたいのであります。

が、老年となつた現在では、智力も財力もない不具同然の私には、何の協力も出来ませんので、先生方のお蔭で昭和四十二年七月二十五日に文部大臣から載いた見舞金七万円、昭和五十年八月四日に厚生大臣から載いた弔慰金五万円、昭和五十年八月四日から五十九年十二月六日までに厚生大臣から受領した戦傷病者戦没者遺族等援護法による遺族給与金九百三十七万八千三百五十八円の内、使用残額が現在手許に三万円ありますから、この金を「忘れた草」の出版費の一部に贈呈したいと思います。基だ僅少ですが御使用下さいますよう、お願い申します。

尚、「忘れた草」に寄稿ご要望の感想文等は、老年の私には現在執筆能力がありませんので、同封の別紙（私その他の略歴）を御覧の上、よろしくお願ひ申上げます。

「忘れた草」刊行の御成功を期待して、返書と致します。草々敬具。

（六〇、三、一一一）

* * *

（調附記）石田保利様からは憲敬君の写真、検視証明書、死亡届、略歴、

外、保利氏及び同夫人の略歴を届けられたが、略歴は差支えのない程度に抜萃することとした。尚、検視証明書及び死亡届は、皆様のお手許にも同じ形式のものが保管されていると思ったので、省略することとした。

石田保利氏の略歴

石田憲敬君の父、明治三十一年二月十日生まれ、本籍は熊本県下益城郡城南町大字出水八七一番地、大正七年十二月に熊本歩兵第十三連隊に入隊し、一年間は中支那派遣隊に在隊した。大正九年十一月に除隊し、十年二月に長崎県職員採用試験に合格、その後二十二年間、知事官房、総務部、学務部等に勤務、昭和十七年九月に依願退官して三菱重工業株式会社に入社し、兵器製作所安保課長として駐在中に原爆を被爆した。以来療養に努める傍ら、爆死した長男憲敬と妻タミの冥福を祈念して現在に至る。



前列の向かって
左より一人目が
石田憲敬君
右が小曾根邦弘君

後列向かって
右が小曾根邦弘君

石田タミ夫人の略歴

石田憲敬君の母、明治三十年十二月十四日に生まれ、熊本市立高等女学校卒業後、小学校専科正教員免許証を授与され、以来七年間宇土郡不知火小学校に訓導として勤務し、大正十一年四月に石田保利氏と結婚、大正十二年三月に長崎県より小学校本科正教員の免許証を授与され、昭和十三年三月まで瀬戸、浪平各小学校に勤務、その後大日本国防婦人会長崎支部鉢鼎分会長として出征軍人遺家族の援護等に尽力中に、被爆、療養のため熊本県宇土市、更にその後熊本市に転住、昭和四十七年五月十七日に黒髪町の自宅に於て、原爆病に因り死亡した。

薬専三年生 岡 本 省 三

(六〇、三、一)

遺族 下関市栄町三一二五 岡 本 知 定 (父)

彼岸も過ぎて漸く老人の春となりました。老生（八七才）はいくら元気と云つても、目は薄く、耳は遠く、腰は痛く、諦めて居る次第です。

處で、原爆投下日も四十年目が近くなりました。此度先生のお骨折りで、第七号「忘れな草第三号」には、同窓生と一緒に写った写真があり、「第四号

尚、「忘れな草第三号」には、同窓生と一緒に写った写真があり、「第四号」には、父上が書かれた思い出の手記、並びに、戦争末期に母上宛に出した書翰が掲載されている。

大正十二年八月二十一日、石田保利の長男として熊本県宇土郡花園町大字花園二三五番地に於て生まれ、長崎市の浪平小学校、長崎中学校を経て、昭和十八年四月に長崎医科大学付属薬学専門部に入学し、二十年九月に卒業予定のところ、その直前、八月九日午前十一時二分に投下された原子爆弾によって被爆死亡した。

被爆の状況は、昭和三十年に長崎大学医学部同窓会から発行された「追憶」の中に、当時の清木美德薬學専教授が詳しく書いておられるので、それを参照されたい。（追憶、二〇五頁）

尚、「忘れな草第三号」には、同窓生と一緒に写った写真があり、「第四号

一九一頁」には、父上が書かれた思い出の手記、並びに、戦争末期に母上宛に出した書翰が掲載されている。

毎年夏が来ると、蝉の啼き声に八月九日の悲惨が胸に迫つて来ますが、時は流れ、御遺族の方々も段々故人となられて、人生の無常が蘇つて来ます。

同封隨筆「痛恨が蘇る」と題して、拙文をお届け致します。何分老人無学、思いの半分も書くことが出来ません。御笑読下されば幸甚です。尚、「勵哭の人」と併せて送りましたから、よろしくお願ひ致します。

勵哭の人

昭和二十年八月九日午前十一時二分、長崎に原爆が投下されて四十年が来た。私は当時の悲しみを忘れようと生き延びて来たが、来る日々、なかなか容易には忘れられない。

子供を長崎医大で失った八月十三日、小野田の田辺製薬より通知を受け、十六日に長崎に行った。浦上駅に下車した刹那、まだ整理出来ていない死体が空地のあちこちにあり、道路には駄馬の死体がそのまま放置されて悪臭を放ち、誠に凄惨な様相である。

漸く廢墟の事務室で、事務員より被爆者遺体のある場所を教えて貰った。裏山の段々芋畑に遺体が並べられ、腰の廻りに僅かに土が覆つてあつた。これを見て、生まれて初めて凄惨の実感が湧いた。

数時間あちこちを捜して漸く子供の死体を見付け、吹きだまりに残った木片を集め、数時間かかるて遺体の一部を焼き、箱に納めた時は既に陽は西山に落ち、鳥が空で啼き叫んでいた。

そろそろ帰途につこうとする時、私の悲しみを更に深める一場面に遭遇した。それは我が子の遺体を捜し求めてさまよい歩く年輩の御夫婦の姿であった。胸に遺骨箱を抱き、我が子の名を呼び続けていたが、なかなか遺体は見つからず、夕闇は迫り、さては地に伏して勵哭し、いつまでも立ち上がる所らしい。その親の心情を察すると、痛恨という言葉の通りで、私は只々合唱するよりも仕方がなかつたが、やがて両親は闇の中に消えた。因みに、当時の勵哭の両親も、もはや他界されたことと思う。

痛恨が蘇える

潮に乗つて流れて行く。嫌な記憶は忘れ去りたいと思うが、毎年八月九日が来ると、また記憶も新たになり、も早や三十九回も繰り返した心の矛盾を覚えるのである。

私は御計画の「忘れな草、第七号」に、拙文「痛恨が蘇る」と題すらお粗末な一編を書いた。何か残つたものはないかと、子供の本棚を捜しているうちに、奥の方から一冊の大学ノートを発見した。それこそ誠にお粗末なノートで、その一部に數十日間書き続けた日記を見付けた。それは昭和十九年十月頃のもので、その内から十月九日（爆死十カ月前）の記事を原文のまま書いてみた。

『六時起床、団体生活に於いて、或る者（同輩）の如く個人的の行動をとるのはどうかと思う。皆さんの前でその人の行動を指摘して兎や角云うのは、慎しむべき事ではないだろうか。徳島の生徒が、雑炊屋に於て雑炊の皿を一つごまかしたという話も、我々は愉快に朗らかにやつて行こう、という話で終わつた。偶々清木先生が来られ、父に会つた様に感じた。清木先生は本当の父の様な感じがする。』

因みに子供は當時、学徒動員で、同僚と一緒に小野田市の田辺製薬に動員中で、食べたい盛りの若者が、来る日も来る日も雑炊で過ごし、一言の不平不満も云わずに作業を続け、やがて十ヵ月後の原爆に露と消えた。只一椀一杯の雑炊をごまかした一人の人と、この事実を朗らかに納めた若者達の心情は、誠に痛恨の極みである。

薬専三年生 小曾根 邦 弘

遺族 長崎市虹ヶ丘町二〇一五 小曾根 邦治郎（父）

私も八十七才になつた。珍しい長寿である。然し流れは弛むことなく、私も

今年、被爆四十周年に當たって、「忘れな草、第七号」に遺族の現況を添えて出版される由、会長様よりの御連絡を頂きました。大変有難いことと深く御礼申し上げます。つきましては、以下簡単ながら、近況を御報告申し上げます。

私はあの昭和五十七年七月二十三日の大水害によりまして、東望にありますた拙宅は災害を受け、四十五年間住みなれた矢上の家を拂らい、滑石に移り住んでいましたが、罹災の疲れがもとで、老妻は六十七才を以て他界しました。

お蔭様で、大変安らかな往生でした。ついで今年正月、孫が虹ヶ丘町にささやかな家を建てましたので、現在はそこに住んでおります。

私は六月に肺炎にかかりましたが、幸にこれも案する程に至らず、只今は殆んど恢復いたしまして、只今は九十三才ですが、百才以上まで健康で、社会の為に奉仕させて頂きたく思っております。そして母校の創立百周年には、必ず元気で出席させて頂く積もりであります。（後略）

（六〇、五、一、）

薬專三年生 橋 本 慶治

遺族 大阪府東大阪市高井田元町一一一二一九 橋 本 源治郎

（父）

陽春の候と相成りました。大変長らく御無沙汰致して居りますが、その後御

一同样にはお変りなくお過ごしの御事と、お慶び申上げます。

お便りいただきました「忘れな草」につきまして、慶治はいつも申しております。長崎の風土と人情の厚い事を、便りがある毎に喜んで書いておりました。又、下宿屋の息子さんとは、兄弟のように思つておりまして、その地で亡くなつたことは、本人も満足に思つてゐること思います。

私は風邪をこじらせまして、今床に就いて居ります。週一回、息子の栄修が往診してくれますので、心配はいりませんが、何さま八十七才の高令でござりますので、思うように字を書くことも出来ませんので、家政婦に代筆させました。何卒悪しからずお許し下さいませ。

最後に皆様の御健康と御多幸をお祈り致します。

（六〇、四、九）

薬專三年生 村 山 直 行

遺族 福岡市博多区中呉服町二一七 村 山 ト ヨ

（母）

時候の変動がひどく、暖かかつたり寒かつたりで、風邪引きばかりでござい

ます。先生には相変わらず御元氣にて、御老体にも拘らず被爆者の為にお骨折りいただき、誠にありがたく感謝のみでござります。私もお蔭様にて何とか無事に過ごしております、米寿の祝もすますことが出来ました。

直行は小学校の折から習字、絵、作文など優秀で、新聞紙上にも掲載され、褒美も沢山戴きました。又中学卒業の時には、品行方正、学術優等、身体強健により、県知事賞を拝領し、西日本辯論大会では、一等賞として、市長盃及び優勝カップを貰いましたが、その時は私の前に手をついて、「お母様のお蔭でこんなのを戴きました。」と申しました。私は思わず嬉し涙にくれ、今でも時々眼に浮かんで来ます。

直行が長崎に行く前に、「思い出の箱」と書いて、「これだけは疎開して下さい。」と云つていましたので、原爆で死んだ時開いて見たら、中には十七才から十八才までの間に詠まれた和歌が、七冊のノートに書かれており、一冊に二百句もあって、私は涙が出て読むことが出来ませんでした。

その外に掛軸が一つ入つていて、それは家にあつた先祖の銅像が、軍部からのやかましい命令で取り上げられたため、銅像に書いてあつた漢字の字を、一間位の長さの紙に毛筆で立派に書いたのを軸にしたものでした。直行はそれを家の宝として、「思い出の箱」に入れていたのでした。涙ばかりであります。

直行の書いた和歌には、こんなのがありました。

- 人の世をわたるにつけて己が身を 願りみてこそ真なりけれ
- 大君のために散り行く若桜 名こそ誠の大和武士たれ
- 共々に母を背負いて行かむとぞ 想ひし母の淋しくぞあり

沢山の内より、身に思い浮かべるのを書いてみました。風邪具合が悪いので、乱筆で申訳ありません。お許し下さいませ。

先生、いつまでもいつ迄もお元氣にしていて下さいませ。

（六〇、四、一九）

薬専二年生 福田 登

遺族

長崎市愛宕四丁目五六九—一〇 福田 正

(兄)

一人で暮らしております。

(六〇、四、三)

陽春の候、先生には何かとお世話かけます。又この度も「忘れな草」を出版されるそうで、大変な事と存じます。

登も被爆して早や四十年たちました。月日の経つのは早いものです。

母も九十二才になり、昭和五十九年八月九日の慰靈祭の際は、是非連れて行つてくれとせがまれ、連れて行つたものの、続絆が始まる頃には涙を流しておりました。途中で帰りたいと申すので、連れて帰りましたが、それから床についてしまいました。

登の若かつた頃を見ては、現在の様になり、私共もそれに相槌を打つている次第です。四十年たつた長崎の復興を見ると、あの頃とはまるで嘘の様です。多くの犠牲者のためにも、我々は生きている限り、原爆罹災の方々の御冥福を、心からお祈り申し上げたいと存じます。

平素は御無沙汰ばかりで申訳ございません。何卒御身を御大切にお過ごし下さい。

(六〇、四、二)

薬専二年生 安本道男

遺族 山口県大島郡橋町安下庄 安本春子 (姉)

野も山もすっかり春景色になりました。

先生には御元気にて御活躍のことと、およろこび申し上げます。

原爆が落ちまして、四十年、月日のたちますが早く感じられます。あの時、弟達三人は召集で戦地でございました。三男は京都大学在学中の召集でございました。四男の道男は長崎医大におりましたので、父母も安心しておりましたのに、何とも云えない悲しみでございました。

現在、長男と次男は東京に、三男は大阪に、妹は嫁いで下松に、それぞれ家庭を持つております。父母と私は三人で暮らしておりましたが、母は去る五十年に亡くなり、父は五十五年に次々にくなりまして、道男の姉である私は、

眼科看護婦 小崎タケノ

遺族

熊本県天草郡大矢野町中七六二二 小崎七郎 (兄)

長崎に原爆が投下されて最早四十年を経過し、過去の出来事として私達の記憶から忘れ去ろうとしています。この四十年を振り返って考えますと、本当に長かつたようでもあり、又短かつたようにも感じられます。この間、殆んどの人々が、相當に苦しい思いをなさつた期間もあったことと察します。現在の豊かで平和な時代に、かくも早く復興するとは、予想もしませんでした。

私は亡くなつた小崎タケノの長兄で、妹は八人兄弟の末子です。国民学校卒業後、校長先生の推薦で、長崎大学付属看護学校に入学しました。在学中に盲腸炎の手術を受け、休養のため暫く帰省したのみで、三年生になつてからは、眼科に勤務していたようです。

原爆が落ちた時は、病気のため、看護婦寄宿舎で休養していましたが、物凄い音と同時に建物と共に吹き飛ばされ、寝巻一枚で何處をどうあるいたのか、ただ人々の行かれる後を追つて行きながら、水のあるのを見たら、どんな水でも飲んだらしいのです。そのうち歩行困難となり、山中に倒れているのを救助されましたが、その時は足にカスリ傷があり、着物は破れ、全身泥だらけになつてゐるのを親切に介抱して頂き、着物も絆のモンペに着替えさせて貰い、長崎市長の被爆者証明書を戴いたそうです。その後、口之津の旅館に一泊、翌日鬼池に渡つて旅館に二泊しましたが、ここではとても親切にして頂き、わざわざ重湯を作つて食べさせて頂いたそうです。

(六〇、四、三)

四、看護婦・事務職員遺族の手記

愚妻が迎えに行きましたが、一見してこれが義妹かとビックリしたそうです。

歩行も出来ず、言葉も意識もはつきりしないのに、長崎市長の証明書のお蔭で多数の方々から親切にされ、漸く故郷に辿りつくことが出来ました。妹は皆様の御親切に対し、感涙にむせんでいたそうです。

この様にして無事に生家に帰れたものの、食事も水も咽を通りらず、全身が焼けるように熱いので、水で冷やしてやりましたが少しもよくならず、意識はどうにか少しもどつて、鬼池の旅館にお札状を差上げて下さいとか、お父さん、お母さん、お姉さん、お世話になりました。先立つ不孝をお許し下さいなどと云い、更に佛様の方に向かせて下さい、と云つて合掌させて貰い、「さようなら」を最後に、静かに眠るよう息が絶えたとの事でした。臨終の場に居られた方々は皆感泣されそうです。時は昭和二十年八月十八日午後四時でした。

私は二十年十月に復員して、先ず佛間に行くと、二個の遺骨箱が並んでいました。今一つは次男の遺骨で、弟は戦場で米機の銃撃で即死したそうで、同郷の戦友に守られて復員していました。

この戦争で、生死の確認されない方が大勢居られるのを思う時、私の弟妹は生家の墓地に眠ることが出来たのが不幸中の幸せと、二人の冥福を祈つて居ります。

合掌、（六〇、四、四）

眼科看護婦

西 下 美 代

遺族 長崎県南松浦郡新魚目町榎津郷一一〇一一 西 下 ス ミ

（姉）

私は、当時大学病院の看護婦をしていました西下美代の姉です。八月三日、私と妹は、長崎から五島へ帰る予定でした。処が、郷土の看護婦見習の人が残っているから、私も残ると言つて美代は残りました。

九日に原爆が落ちたので、私はすぐ長崎に向かいました。着くとあたり一帯は焼け野原で、土の中から手だけ出している人、頭だけ出している人、動めている人、水と叫ぶ人、黒焦げの人、肉が爛れて骨が見えている人などが横たわっていて、まるで地獄を見るようでした。このような状態だと、どうするこ

とも出来ないと判断して、一旦五島に帰りました。

十三日にはまた長崎に行きました。大学病院に行く道には、まだ人や馬の死体が方々にころがつていて、目もあてられない様な無惨な有様でした。病院に着くと、人が一杯で、妹を捜していると、張り紙があつて、生存者の中に妹の名前がありました。妹は防空壕の中から出されたばかりで、焼野原に一人横たわっていました。妹を見付けると、私は嬉しさのあまり、涙を流しながら抱き合いました。被爆した時、妹は眼科の診察の準備をしていたそうで、友達が食堂で食事をしていたから行つてみて、と云うので行くと、被爆した人を山のように積み上げて焼いていました。四時間ぐらい捜したが、友達は見つかりませんでした。

当時、新興善小学校が病院になつていて、大学の焼跡にいる負傷者たちをトラックで運んでいたので、妹も一緒に新興善に移りました。着いてもすぐには診察が受けられず、翌日の昼頃になつて初めて診て貰いました。私も負傷者の看護を手伝いましたが、三十人ぐらい一緒に行つた人が、四、五日後には三人しかいませんでした。

妹は、材木で負傷した右足だけが動かない状態でしたが、日に日に病状が悪くなり、熱にうなされて、うわごとを云うようになりました。それによると、防空壕の中で五日間ご飯も食べず、眠らないで、色々な人を治療したそうです。父が五島から来て、先生に病状を聞くと、駄目などの事で、五島の家に連れて帰りました。

長崎にいた一週間、一睡もしていない私は、家につくとそのまま寝つてしましました。後で聞いたことですが、妹は注射のお蔭で一時的に意識を回復し、自宅に帰つたことを知り、喜んで亡くなつたそうです。尚、妹の足は水で冷やしたり、色々治療したけど、ウジがわいていたとの事でした。私が目を覚ました時は、葬式も何もかもすべて終わっていました。

私の母は、「娘の友達の所は恩給を貰つたが、うちには申請書を何回出しても

貰うことが出来ない」と云い続けながら、四年前に他界致しました。私も黄疸が出たり、気分が悪くなったりしたので、原爆手帳を申請しましたが、親姉妹では保証人になれず、知人が亡くなったり、名前が判らない有様で、手帳が貰えず、昭和五十年にやつと貰うことが出来ましたが、今日現在も病氣のために、しばしば病院に通う状態で、当時を思い起すと、一晩中眠れない事もしばしばあります。

皮膚科看護婦 脳 黒 サ エ

遺族 長崎市中園町一六一五 鳥 飼 則 子 (姉)

○ 汝が靈の静かに眠るこの丘は 彼の日のごとく蟬時雨なり

「もう来年は卒業よ。新しい気持で頑張らんば」と、生き生きとした眼で語つてくれた妹が、原爆で殉死してから早や、四十年が経つてしまいました。

時どき里帰りする、郷里鹿児島の生家の佛壇には、黄ばんだ額縁の中に、いつも微笑んでいる唯一の妹の白衣の写真がありますが、それを見るたびに、現在の妹の姿をあれやこれや想像しては、胸が熱くなる思いにかられています。

○ この海のはたてに遠きラバウルに 兄ら戦かう眞日のまぶしさ

当時一人の兄は出征しており、人手不足で忙しい両親を助けて、畑仕事や養蚕に精出していた私に、村の祭が近づくと、母はよく赤飯やお煮しめ、甘酒等を、寄宿舎生活をしている妹に届けさせたものでした。

長崎に着いて、寄宿舎に近い裏門の守衛さんに、連絡を頼みますと、程なく

質素な不斷着の妹が、笑顔で走り寄つて來るのでした。その笑顔を見ると、はるばる立ち通しで一睡もしないで、夜汽車に揺られてきた疲れや何もかも、一辺に吹き飛んでしまいました。

或る面会の日に、妹が何か言い出しにくそうに、口ごもつて云うのです。根掘り葉掘り尋ねてみると、寄宿舎の布団を火で焼いたので、婦長さんに姉さんからあやまつてくれ、とのことでした。都會の言葉を知らない鹿児島弁丸出

しの私は、一時はどうしようかと途方に暮れましたが、勇気を出して婦長さんに妹の不始末をあやまりました。婦長さんは何とか理解されたと見え、笑顔で何度も領いて下さいました。その時の嬉しかったことは、昨日の事のように今でも忘れません。

妹は生前に一度だけ、休暇で帰つて来たことがありました。長崎で覚えた歌のかずかず、赤い花なら曼珠沙華ー。うつとりする歌声を、五右衛門風呂の火を焚きながら、聞かせてくれました。「うまい、うまい、」と誉めると、益々

調子に乗つて、次から次と歌うので、お蔭で湯にはいつておられない位熱くなりました。

サエの分骨を家に迎えて、母は何日も何日も泣き続けていました。余り泣く

ので、力付けるために母を叱つたこともあります。心ゆくまで黙つて泣かせてあげればよかったですのに、と後悔しています。

私は三年後に、縁あって長崎に嫁いで来ました。瀕死の身体で避難したであろう穴弘法山も、緑にいろどられ、慰靈碑の丘もあの日が近づくと、蟬時雨で心が洗われる思いです。

どうかサエちゃん、安らかにお眠り下さい。

眼科看護婦 松 本 幸 子

遺族 長崎市平間町間ノ瀬一九九九 松 本 政 市 (父)

その時、原爆被爆で電柱一本もなし。
足で通行も出来ない、木の家もなし。

青い物もなし。石垣も上の方にとんどでしまい、今の若人に話してもわからな
い。

毎日、朝から涙でこまります。ごめん下さいませ。 (六〇、三、一一)

(調記) 松本政市氏は今年八十六才で、奥さんのキン女は八十三才とのこと、字もたどたどしていましたが、私が判読して原文に忠実に書きました。

看護婦生徒 福島スギエ

遺族 長崎県南高来郡千々石町八五四〇四 福島スズヲ (姉)

月日の過ぎ行くのは早いもので、今年は早や被爆四十周年、あの時の惨状は本当に見た者でないと分かりません。

私の家は長崎から遠い千々石ですが、一人の妹が大学病院で看護婦として勤めていました。ピカッと光つてドーンという音がして間もなく、長崎の空らしい所が真赤になり、だんだん一面に広がつてきました。するとその内、長崎は大変だ、全滅だ、という情報が伝わってきました。あつちにもこつちにも被災者が帰つて来られました。家でも不安になりました。待つても待つても何事もありません。

そのうち、諫早に被災者がどんどん送られているという事を聞き、早速行つてみました。所が男女の区別もつかないように焼けただれているのを見て、思わず目の上が熱くなりました。もしかしてこの中にいるのではないかと思い、二三ヶ所で名簿と照らし合わせてみましたが、見つかりませんでした。仕方がない、とその日はあきらめて帰りました。

その頃は丁度主人が出征して、老いた母だけでしたので、私一人では心細く、近所の人二人に付添つて頂いて、夜になつて被災地に向かいました。長崎まで道の遠いこと、遠いこと、やつと着いてみますと、その惨状は本当に云い表わす事は出来ない位です。そこにもここにも眞黒い死体がころがつていて、あちらでは何人かの遺体を集めて焼いていました。

そういうする内、家の妹はその日が寄宿舎の当番という事を聞き、関係者らしい人に尋ね尋ねして、寄宿舎に行つてみましたところ、そこに三体のお骨がありましたので、これを確認してそのお骨を拾い、又夜道を空襲を避けながら帰つた次第です。四十年たつた今日でも、命日が来る毎に、あの日の事が思い浮かばれて、原爆のこわさが身にしみます。どうか一度とこんな事の起こらないよう、呉々もお願ひ致します。

亡くなつた妹の信子が、何より念願していた長崎医大看護婦養成所に、私は伴われて入所したのは、四月初めでした。

戦時中なのに島は平和でした。八月十日には帰省できるから、との嬉しい報せに接したのは、八月初めで、母は先ず御馳走の事ばかり考える毎日でした。何もしない静かな数日でしたのに、びっくりする情報の流れたのは十一日で、それも郵便局からでした。長崎は「全滅」したとのことでした。私は半ば夢遊病者のようになり、帰宅して家族に、「信子が死んだ。」と云うのが精一杯でした。しーんとした時間が流れたのは、すぐ帰省する筈の信子の死が信じられないのと、夢遊病者のような私に驚いたからでしょう。

翌十二日午後には、父と共に焼野が原と化した医大跡に佇んでいました。次の日の夕暮れまで、行き交う人はまばらで、皆無口でした。しかしあれから四十年、信子、安心してね。世界は平和になったのですよ。帰省したらどんな遊びをしたかったの?あなたが居る間は、私も勤め先を休む積りでしたよ。悲しい夢だったのね。信子!信子といつも心配していたお父さんは、七十才で亡くなりましたよ。

では、明るいニュースをお知らせしようね。お母さんを初め家族は皆元気ですよ。お母さんが明石にいる関係で、九日の慰靈祭には私がいつも代拝しています。

兄さんの家族も元気で、三人の兄妹はそれぞれ良い職場に勤めています。みんないい子供達ですよ。私は二十六年に結婚して、子供は男二人です。喜んで下さい。長男は医者で、長大精神科に勤めています。あなたが婦長(?)で息子と逢つたら、どうだつたでしょうね。あなたに見て貰いたい孫も一人いますよ。それともう一つ、うちの次男にはまだ嫁がいません。天国からいい嫁さん候補を教えて下さいね。孫は小柄でもハリキリボーリで、テレビのキン肉マン

看護婦生徒 前田信子

遺族 長崎市十人町六一三 浦田良子 (姉)

月日の過ぎ行くのは早いもので、今年は早や被爆四十周年、あの時の惨状は本当に見た者でないと分かりません。

せに接したのは、八月初めで、母は先ず御馳走の事ばかり考える毎日でした。

せに接したのは、八月初めで、母は先ず御馳走の事ばかり考える毎日でした。

が大好きですよ。

あなたは何か好きですか。今すぐ知らせてね。医大も建物がすっかり変りま

したよ。殿堂とも云つていい位にー。

八月九日の午前十一時二分には、また会いますね。あなたから先に、しゃべって下さいね、今日の浦上は静かです。一人で歩きたいですね。信子に会える日を、何より楽しみにしています。

看護婦生徒 光 永 良 子

遺族

長崎市南高来郡千々石町甲一九六 光永幸康（兄）

原爆が落ちてから四十年になりました。妹の事は一日も忘れたことはありません。妹は頭が良く、親い兄弟思いの女でした。

八月九日の日は産婦人科に勤めていて、書類を運んでいる時に原爆の光をあび、爆風でガラスが割れたり、窓が壊れたりして大騒ぎになつたので、皆と一緒に穴弘法の丘に逃げたそうです。其處には先生はじめ、婦長さん、学生さん、看護婦さんたちが大勢居られ、市内は火の海だつたと云つておりました。穴弘法では、日頃親しかつた同郷の三浦久子さん（看護婦生徒一年生）に会いましたが、三浦さんは大怪我をしていました。妹は三浦さんを助けながら、千々石の家に帰るために道ノ尾の近くまで歩き、やつとのことで汽車に乗り込み、諫早で下車して三浦さんの治療を町の病院に頼み、自分は島原鉄道に乗つて愛野で下車し、それからは歩いて、千々石の自宅に帰着いたのは夜中の十二時頃でした。それから被爆後の悲惨な情報を話してくれましたが、病院の皆さんのが亡くなられて可哀相だ、と泣いておりました。

翌日は祖母に、三浦さんにあげるユカタや毛布を下さいと云つておりましたが、起き上ることが出来ず、千々石のお医者様にいろいろ治療して頂きましたが、だんだん弱つていって、八月十八日午前二時に息を引きとりました。

三浦さんはその後元気になられて、今は熊本に住んでおられるそうです。妹の良子は怪我も火傷もなかつたのですが、一週間余りで亡くなりました。多分

原爆の放射線を沢山あびていた為だらうと思います。

看護婦生徒 湯川明子

遺族

福岡県筑紫郡那珂川町恵子ときわ台一二一早田方 湯川 萩（母）

この度、原爆被爆四十周年記念誌発行について、感想や追憶を募集中とのことでしたので、拙い文ながら少し書いてみました。

四十年という長い年月も、過ぎてみれば早いものでござります。その間先生方には大変お世話になり、お札の申上様もございません。毎年の慰靈祭も、自宅で供養を致しますので、出席出来ませず、ただお花をお供え頂くようにお願いして、失礼しております。

娘の明子は昭和二十年三月末、私の養女が亡くなりました時、五日間の休暇を頂いて帰省しましたが、帰る日には、土産にカンコロを焼いたり揚げたり、豆を炒つたりしながら、「長崎は敵にねらわれていると皆云っています」と悲しそうに申しますので、「長崎も五島も危いのは同じです。決して慌ててはいけませんよ」と云つて送り出したのが、最後の別れになろうとは、夢にも思いませんでした。

戦争が愈々酣戦になつた七月に、明子から久しう振りに便りがあり、食物が乏しいから何か送つてほしいと云つて來たので、いろいろ集めて送りましたが、その頃はもう船の便も危くなつていましたから、果して届いたかどうか分りません。

長崎に原爆の落ちたのを知つたのは、瓊浦中学一年生だった次男が終戦の翌日、「ピカドンでやられた」と云つて、頭から顔にひどいヤケドを負つて帰つて来た時で、「姉ちゃんはどうなつたか分らない」と申します。これは只事ではないと直感しましたが、それでも明子の死を信することは出来ませんでした。それが明らかになつた時の悲しみはどれ程だったか、改めて申すまでもありません。

九月末になつて、やつと氣をとり直しましたが、遺骨もないでの、幼い時の

写真を父のお骨の中に納めて、お葬式を済ませました。いま形見に残っているのは、戴帽式にいただいた帽子と看護服を着て記念に撮った写真が一枚ある限りですが、いつもそれを見ながら、明子と語り合っています。

戦争とは何と怖く愚かなものでしょう。いま世界平和を唱えながら、戦いを続いている国があり、核を作っている国もあり、物騒な世の中をほんとに悲しく思います。戦争反対と声を大にして叫びたい気持ちです。今私は老人特有的状態で体調をこわし、一人で心細いときは子供の家に行き、孫たちに囲まれて静かな余生を送っております。これも偏見に先生方のお陰と、常に感謝いたしております。有難うございます。

*

(六〇、三、二六)

私は昨年の秋、一寸した手術をしたものですから、まだ娘の家で養生かたがた、安らかな日々を送っております。もう少し気分がしつかりしたら、五島南松浦郡新魚目町似首へ帰らなくては、と思つております。

男子事務職員 梅津 梅吉

遺族 長崎県西彼杵郡時津町浦郷一八三 梅津 統(次男)

あの日私は物理療法科の雇員として、玄関二階裏側の深部治療室で勤務中に被爆した。不気味な爆音に腰を浮かしかけた時、赤紫の閃光を感じ、身近かに爆弾が落ちたと観念して、咄嗟に机の下に蹲まり、「ああ、これでおしまいか」。ふと家族の事が脳裏をかすめた途端、何かに叩きつけられたようだつた。気がついたら何も見えない。手探りで室外に這い出し、階段を伝つて地下室へと急いでいる内に、視界が開けたようだ。途中何人かの人体らしい物を乗り越えたような気がする。

地下室の廊下に座り込み、初めて全身傷だらけで、血が噴き出しているのを知つた。止血をと思つたが、誰もかまつてくれない。やつとゲートルを解き、顔と胸に巻きつける。無性に水が欲しい。玄関脇の水道の処へ行こう。だが先程のように今度は歩けない。水欲しさの一念で、這いつながら玄関脇へ辿りつ

き、蛇口を捻ると勢よく水がでた!! 改心の笑みを洩したように思う。埃りと血で口の中はベトベトだ。嗽いをすると真赤な水が吐き出される。何かザラザラするので指を入れると、頬に刺さったガラスの破片が内側にとび出してい。指先で思い切りなでると、何個かボロボロと取れた。だがそんな事は問題でなかつた。ゴクゴクと血と共に存分に水を飲んだら、急に部長先生や同僚達がどうしているか気になり、玄関のロビーへ入つて行つた。

そこには鮮血に染つた部長先生が、杖をつき仁王立ちになつて、学生達を指挥している姿が、神々しく見えた。声をかけるより早く同僚の施さんが飛んで来て、私を抱え先生を呼んだ。「おお、梅津君か」と云つて側に来、私の傷を改めながら、「此處にも火が廻つて来た。施君、裏山へ背負つて非難していくくれ」と云われた。施さんに背負われ、裏山の芋畠に寝かされた。空は暗く太陽が赤かつた。

どれくらい経つたろうか。ふと傷の痛みで目を覚すと、看護婦が傷の手当をし、部長先生に脈をとられている。強心剤を打たれ、身動き出来ないまま仰向けに転がつていると、大粒の雨が落ちて來た。側で休んでいた部長先生が、自分の上衣をかけてくれた。陸軍中尉の襟章のついた軍服だつたようだ。

何時間か後、施さんに呼び起された。仮小屋に移ると云つて又背負われ、谷間の段々畑に板を立てかけ、藁を敷いた上に部長先生と共に寝せられた。家族が全滅しているとも知らない私は、意識もうろうとした中で、只管家からの迎えを待ちわびていたようだ。突然青白い閃光に驚き目を覚すと、敵機の照明弾による偵察らしい。大分夜も更けているらしい。施さんが煙草を廻し喫みしている。私にも一息すわせてくれた。運命が完全に狂つてしまつた、長い長い一日であった。

文字通り裸一貫となつた私に、何故か四十年たつた今日まで、あの深部治療室の窓ガラスの破片だけが、体内に温在されている。懷かしいと云つてい代物だろうか。

孫達が無心に遊んでいる。ふと、この子等が、またその子等が成人した頃、再びあの惨禍が繰り返されないだろうか、と思う。いや、絶対にあつてはならない。願わくは、吾が世代だけの苦しみとして、未来永劫に留めたい思いがしかしきりである。

* * *

私は大学職員の遺族であると同時に、私自身も大学職員（四ヶ月在職）として被爆した一人です。自分の事だけ思いつくままにペンを執りましたが、こんなもので良いでしょうか、取捨選択、自由にして下さい。

男子事務職員

大浦 浩

遺族 長崎市岩見町二一六一九 大浦 尚（次男）

故人の思い出やその記録

私は戦前平戸で親子五人生活していました。父はその頃、女学校の国語漢文の先生で、三人の男の子を全部医者にしたかったようです。兄は努力の人、弟は生来頭が良い方でした。次男の私は幾ら考えても何も出来ない、頭の悪い子供でした。後で判つたのですが、私は脳の栄養が足らなかつたそうで、そのため父は非常に心配して私を可愛がつてくれました。

その後兄は長崎医科大学に進み、弟もその付属医専に進みました。脳天ホワイラ（脑袋壞了・中國語で、頭の悪いこと）の私は魚雷製作所の工員として、戦時中は何となくやっていたのですが、これからが大変です。兄も弟も医学生だったので、兵役を免がれましたが、私は現役兵として戦場へ召されました。

肉親の者は皆心配して、「生きて帰つて来いよ」と云いましたが、父などは

「生きて帰つて来れば、家も嫁もちゃんとしておく」と云々、云つてくれました。

九死に一生を得た私は、本当に生きて復員したのです。サイパン、ラバウル、ニューギニヤと転戦して多くの戦友を失ない、同じ防空壕で七人も戦死し

私もガスでフラフラになつたこともあります、人間の一生は生れつき神様が決めておられる感じがします。無事に復員した私を待つていたものは、家でもなく、嫁でもなく、ただ親兄弟の亡骸だけでした。父の遺体の中には今もガラスが入っています。それを見た時、原爆の物凄いことが解りました。

兄は医学生だけあって、「兵隊にいったら女と遊んだらいかんぞ」と注意してくれましたが、帰つて来た私を慰めてくれたのは、墓から見える夏の人道雲と街の女でした。墓に行つたとき大声で、「おい、かあちゃん」と叫んでいる私を見て、側を通る人が変な顔をして見て行きました。弟は背中にガラスが埋まり苦しんでいる父を背負いながら、兄を探し廻つたそうですが、弟も二ヶ月後に帰らぬ人になりました。（中略）

私はそれから一年位後に、ラバウルから復員し、今は若い頃の日雇や重労働も忘れ、夢だけで生きています。その後、人様のお世話で銀行の用務員として勤務しましたが、定年に退職し、今はまた夢を売つて歩いています。

今は私のお客様は、長崎市内の官庁街の皆様です。やっぱりお客様は神様でした。私の残り少い人生を、今は楽しく生きて行くつもりです。戦前戦後を考える時、何となく今は疲れを感じますが、父や兄弟の五十年忌を経るまでは、元気で行く予定です。何にも分らない私ですが、一筆書いてみました。よろしくお願い致します。

男子事務職員 瀬戸口 国久

遺族 長崎市立山町八七六 瀬戸口 栄（長男）

父の思い出

「さよなら、元氣で」と、応召見送りに来てくれた父と、佐世保重砲営門前の別れが、永遠の別離となつた。済州島山中の部隊本部で服務中の八月九日は、大変な悪夢に悩まされ、頭の重い朝を迎えた。十日ほど後には、長崎は特殊爆弾で草一本も生えていないそうだ、という噂も流れてきた。夢はやはり虫の知らせであつたのか、と内心思つたことであつた。

原爆当日、父は馬町の楠井助教授宅へ事務連絡のためお伺いしていたそつ

で、対談中に警報が発令されると、父はすぐに医大へ向つたとのことで、きつと電車の中で被爆したに違いないと自分は思っていた、と先生が来宅の折に申されていた。余程急いで職務に馳せ参じたものと思われる。

さて、私は終戦の年の十一月に復員、自宅に辿り着いてみると、壊れた家中に白木の箱が置かれ、遺骨の中に見覚えのある焼けただれた鎖つきの懐中時計、財布の口金など、父の物であることを確認し、大切に保管している。

父は定年後も嘱託として、従来と変ることなく勤務していた。恐らく時局がら男子職員の不足のためであったのだろう。或る年の夏の夜のこと、八時過ぎ頃に帰宅した父は、鞄を玄関に置くや否や、医大まで行つて来ると言ふ。わけを尋ねると、医大方面が火事のようだとのこと、戸外に出で見ると、北の山の端の空が朱に染つっている。十時頃に帰つて一人で食事していた父に聞くと、医大から少し離れた所だったとのこと。团扇で蚊を追ひながら、黙々と食べていた。当時まだ勤務の経験がなかった私には、それ程まで気を使わねばならないものか、と思われてならなかつた。

昭和十四年に学校を終えた私は、明治の世から続いた最後の短期現役を満期除隊し、九月に西彼杵郡雪浦村立小学校へ赴任した。二十才の秋であった。その年の大晦日の夕食時のことである。父が私に、「お前はいつまで休みなのか?」

「一月七日までです。」

「明日は式（四方挙）はないのか？」

「あるけど、校長先生が来んでもいいから、ゆっくり休んで来なさいと言つてくれなつた。」

「子供が式に登校するのに、お前が出席しないことがあるか、明日は必ず出席しなさい」

という。校長先生の言葉を説明したが、父は頑としてきき入れないので、止む

なく翌朝五時の車で出かけることにした。父は

「校長さんの言葉に甘える様なお前は、碌な先生にしかなんぞ!!」

とも付け加えた。登校すると校長先生は驚きつつも、大変喜んでくれたことを思い出す。嚴父という言葉は今は死語に近いが、文字通りの父で、子供の頃は只々怖い存在であつた。

私の教員生活の最終校は、計らずも山里小学校長だった。その四年間には度々医学部横の道を歩きながら、父を偲ぶことが出来た。旧正門を通つて突き当たりが木造の庶務課の建物で、電話は三二〇〇番、これらの記憶も今は懐かしく思い出される。

せめて今は、原爆被災殉死の諸靈に対し、敬虔な気持で御冥福を祈る次第である。

男子事務職員 早 田 一 喜

遺族

福岡県中間市太賀二区三組

高 村

誠（娘婿）

四十年前を思い起して

私は大正十五年生れで、昭和十八年に大分県立日田林工学校を卒業し、十九年一月から南支派遣軍司令部に軍属として勤務したが、二十年三月に現地広東で徵兵検査を受け、甲種合格で四月一日に独立工兵隊に入隊した。

広東と桂林の中間地点にいたので、広島や長崎の原爆も、八月十五日の終戦も知らずに、広東地区の航空燃料を武漢、南京、北京、朝鮮半島等経由で輸送していた。

東支那海は制海権が無く、米軍の潜水艦が出て来ると日本も最後だと思い、珠江では竹のロープで船を引いて上り、昼は米軍の空襲があるので夜に行動したが、夜も匪賊の夜襲があるので、昼夜眠る時間もなかつた。

私が終戦を知ったのは九月中旬で、広東で武装解除を受け、建築隊に配属されて、日本軍が使用して施設の補修工事に着手し、二十一年六月に郷里日田に復員した。

さて、広東に居る間に、「広島と長崎にとんでもない爆弾が落され、七十五

男子事務職員 地本鶴松

遺族 長崎市稻佐町三一四地本正人（長男）

年間は生物は何も住めず、草木も成長しない」と、誰云うともなく話が広がつたが、誰も真実を知るものはなく、沖縄の占領されたことも知らずに、不安な氣持で一杯だつた。

復員後、二十三年より国鉄長崎保線区関内で、国鉄工業の下請工事のため、諫早に住むようになり、現在の妻と結婚、医大の折れた煙突や片足の鳥居、その他浦上の惨状を現実に見て、なるほど一発の爆弾で七万人余りの人々の命が失なわれたのだということが分りました。

妻の家でも両親、弟、妹の四人が爆死し、義弟の一博（次男）は鎮西中学生だったが、この惨事を歩いて諫早にいる祖父母に知らせに行き、帰る途中長与付近で死亡したそうです。この事は祖父の紋次郎さんが、涙ながらに話してくれました。

義弟で長男の武治も、二十二年六月二十一日に原爆病で死亡し、三男の清治は小学生でしたが、両親と共に爆死致しました。

このように早田一家の惨状は、とても筆舌には尽せない程で、只々茫然とするばかりだったと申し、私が色々聞いても話してくれません、話すに忍びないのでしょう。ただ一人次女マツエの遺体が、現在も不明で、誠に残念です。被爆をまぬがれたのは妻（ツヤ子、長女）と妹（三女、フジエ、千葉県市原市に在住）だけで、只々父母や弟妹の冥福を祈るのみです。

この様な惨事が二度と起こらぬよう、又絶対に戦争をしてはいけないと、つくづく思います。被爆家族や遺族は、恐らく永遠に原爆のことを忘れないでしょう。

戦後生れの日本人が、全人口の半分を占め、戦争を知らないの方が多い今

日、この悲惨な事実を、若い世代の人々に伝えるべきだと思います。

どうか全人類に永遠の平和が与えられるよう、併せて原爆犠牲者の御冥福を祈ります。

（六〇、三、二十五）

原爆が投下されてから、早や四十年の月日が過ぎました。私は昭和二十年に復員して、ここ長崎に帰つてまいりました。當時、医大のすぐそばの山里町にありました自分の家の焼跡を見て、ただ茫然と立ちすくんだ事が、つい昨日のように思われます。私が召集された時に見送つて下さった方々の顔や色々の思い出が、次から次へと脳裏をかすめ、これから先どうやって生きて行けばよいとか、絶望のどん底へ突き落された様な思いでした。

やつとの思いで、中新町の親類の家に行つてみると、私の妹だけが助かっておりました。妹は当時学徒報國隊員として、茂里町の兵器工場で働いており、あの日はそこで原爆に遭い、親類を頼つてお世話になっていたのです。妹の元気な姿を見て安心したのも束の間、私は父と母の死を知らされました。母キマ（旧姓末次）は元大学の産婦人科婦長をしておりましたが、退職して山里町の自宅で助産婦をして居りましたので、ひょっとして助かっているのではと思つておりましたが、六弘法山付近まで逃げのび、そこで息を引き取つたということです。

父は大学の売店の主事をしていたそうで、私が帰つた日の翌日、父の旧友の方から、小さなボーラー箱に入った遺骨になつて、私の許に戻つて参りました。その方は、金庫の前にあつた父の机の側から、そのお骨を拾つて来て下さつたそうで、今でも本当に感謝しております。父の遺骨を胸に抱きしめた時、その後を思うと、ぶつつけようのない怒りと悲しみで、涙が出て止りませんでした。

原爆の為に肉親を亡くし、焼野原で味わつたあの絶望感や、当時の悲惨な状況を、自分達の生々しい経験として語ることは、大変つらいことです。しかし、人類がこれから先、二度とこのような過ちを繰り返さない為にも、我々が多くの人々に語り継いでいくことは、大切なことであると思います。またそれ

が、原爆によつて亡くなられた多くの人々や、今も尚原爆症と戦つておられる方々に代つて、果さなければならない大事な務めだと思います。

原爆はもちろんのこと、その憎むべき恐ろしい兵器を生み出す戦争というものが、一日も早くこの地球上から無くなり、人類がみな平和に暮せる日が来ますことを、心から念じてやまない気持ちです。（六〇、四、一六、）

男子事務職員 中 村 嘉 長

遺族 長崎市入船町二〇一六 中 村 豊（兄）

いま、私の母（中村ユクヨ）は九十四才で病床に伏しています。ボケ症状もひどく、子供の見分けさえつかず、三、四日毎に発作が起り、手がふるえ、話すことも出来ない状態を続けています。私は母が元気でいた頃の話をもとに、被爆した弟嘉長の想い出を記しました。

嘉長は昭和五年十一月六日に生れ、当時は十四才と九ヶ月でした。昭和二十年に勝山小学校を卒業し、国鉄に勤めたが、僅か四日で行くことをやめています。これはボイラーの掃除で、鼻孔や眼の縁まで煤で真黒になる毎日に、辛抱しきれなかつたのでしよう。

戦時のこと、警察や憲兵の追求を心配した中村芳菊（義姉）が、上筑後町時代に隣家に居られた内田信久先生（衛生学教室の助教授、原爆死）にお頼みし、研究室で働くこととなり、毎日喜んで出勤していたとのことです。造船所が空襲された以後は、義姉も休むように注意し、当日の朝も話したが、「心配しないで」と云つて、兄の邦臣に配給された靴をはいて、家を出て行つたきり帰つて來なかつたのです。

翌日からは、母や姉（マサエ）、弟（邦臣）、妹（範子）らが、飽浦から廢墟の中を歩いて、長崎医大の付属病院を中心には嘉長を探し廻つたが、骨すら拾うことが出来なかつた。母は、嘉長は付属病院で働いていたとばかり思つていたそうです。

母は配給のことを心配して、九月四日に死亡届を出しているが、これには

二十年八月九日午前十一時、坂本町二〇番地に於て死亡、と記されています。

私は二十年十一月に復員し、初めて嘉長のことを知らされたのです。四十五年頃になって、市の原爆対策課にいた篠崎金吾（妹範子の夫）から、長崎医学部同窓会発行の「追憶」の中に、衛生学教室の研究室内で死亡した内田信久先生と、一四、五才の少年一人（氏名不詳）という記事のあることを聞き、私達は、「これが嘉長だ」と判断して、長大医学部にお話をし、それ以降は慰靈祭に御案内を受け、銅板名碑にも氏名を刻んで頂きました。

母は居間に、帰つて来なかつた嘉長の童顔の写真を飾り、毎月九日には和尚さんにお経をあげて貰い、八月九日には平和記念像と長大医学部の慰靈祭にお詣りしていました。

私が応召したとき、嘉長は十二才、今生きて居れば五十四才となつていますが、私のアルバムには童顔の写真が貼られています。

高令の母は、あと僅かでこの世を去るかも知れません。私は母が生きている間に、嘉長の死んだ所だけでも知らせることが出来たら、と思っています。

衛生学教室の氏名不詳の二人の内一人は、中村嘉長少年であった、と証言してくれる人は居ませんか。私達の長い間の願いです。（六〇、四、三〇）

（調附記）私は原爆当時は病院に居たので、基礎教室の事は詳しくは知らないが、中村嘉長君は確かに衛生学教室内で爆死したものと思う。その理由は、（一）母親の証言で、内田助教授の推挙で毎日喜んで大学に出勤していた事、（二）昭和三十年に長大同窓会から発行した「追憶」によると、当時衛生学教室には大倉教授、福田助教授、内田助教授、木下雇員、外に研究補助員二人（氏名不詳）がいたが、六人とも全部死亡した事、（三）衛生学教室は木造の建物で、同じ木造の講堂で受講していた付属医事二年生も、全部死亡した事。

「追憶」は大学が責任を以て出版しているから、記事に誤りはない筈だから、嘉長君が爆死した研究補助員二人の中の一人であつたことは、確實と思われる。

尚、私は昭和四十三年から五十二年迄に五冊の「原爆思い出の手記集、忘れな草」を編集発行したが、四十五年発行の第三号までは、死亡者名簿に嘉長君の名はないが、四十六年以降の名簿には同君の名が記載され、遺族代表者は姉の篠崎範子となつてゐる。この事は、大学当局が嘉長君の原爆死を認め、私もこれを承認した為で、この事は中村豊氏の手記とも一致しているのである。

男子事務職員 山 口 静 夫

遺族 長崎市東小島町一三一三 山 口 紗 子（姉）

生 田 照 二（弟）

追 憶

昭和二十年八月十日の夕方、六時過ぎ頃であつたと思う。熱気の中を大学の正門の前まで行くと、あの大きな門が動いて浮き上つてゐた。私は子供の頃父が勤務していたので、幾度か訪れたことがあり、あたりの様子は或る程度解つていた。しかし、建物がすっかり焼け落ちていて、兄が勤務していたと思われる處に、一つの骸があつた。

私は肉親の直感で、それが兄ではないかと思つたが、その時は判然しなかつたので、後日家族の者と相談してから、と思って家にかえつた。その後たずねてみたが、その時はすでに見当らなかつた。誰かが持ち去つたのであろう。それが今でも残念である。

すっかり焼け落ちた中で、唯一白壁の図書館の書庫が焼け残つてゐた。ふと中を覗いてみると、静寂の中で本が書架に並んだまま、真赤な炎をあげて焼けていた。それが夕闇と白い壁に映えて、異様な生きものの様であつた。焼け灰に化した本の列が、その姿のまま並んでおり、本の背文字が読めるくらいであつた。それが時折り一陣の風に吹かれると、まるで魂もあるかの様に、あたり一面に舞上つた。それは何か幻想的な悲しい光景であつた。

父山口林一と兄静夫は、二代に亘つて大学付属図書館の司書に勤めました。この追憶文は、山口綱子に代つて、弟の生田照二が書きました。（六〇、四、二八）

女子事務職員 片 岡 ア ヤ

遺族 長崎市三原町九五〇 片 岡 義 勝（長男）

世界平和と何処の国でも云われますが、何と実行が難かしいのでしょうか。四十年経つても不安な状態が続いていることは、本当にどうなつてゐるのかと考えさせられます。

私は直接に被爆したから仕方がありませんが、子供達の時代には、絶対にあつてはならないことです。いつもその事ばかり気になります、何故なら、私自身小学四年生の時に被爆し、母は大学病院に勤めに行き、そのまま帰つて来ません。ひょっこり帰るような気がしていましたが、子供三人残され、どんなに辛い悲しい思いをして來たことでしょう。今でも何処かに生きていれば、など考えることがあります。その頃は勉強もあまり手につかず、今日までまだ心の傷が残つているようです。小さかつたので、母の記憶があまりなかつたので、今考えると、もつともと母の事をしつかり覚えておればよかつたなど、いろいろ思います。

この原爆というものがどれ程怖いか、誰もが、世界中のあらゆる人が知つてほしい。まだまだその怖さは残つてゐるということを。新聞などで、被爆された方々の体験を読むと、何とも哀れというか、可哀そうではがゆさを感じ、原爆というものがこの世の中で一番恐ろしいことです。これからは何としても本當の平和が來て、安心して生活出来るようにして欲しいものです。

私の家の庭には、被爆した百年以上にもなる大きな杉の木があります。現在も半分は枯れた状態で、残り半分は成長して、一年中緑の葉をつけています。毎日その木を見るたびに、良く耐えているなあと眺めています。四十年経つても一生懸命耐えているようで、勇気が湧いて來ることもあります。私はこの杉の木の側で被爆したので、もしかしたら、それで助かつたのかも知れないと思います。私は腰痛や皮膚の弱さなど、健康に自身がありません。又、子供達の事も心配になります。体が健康でなければ、心も不安で、何とか

明るくしようと努めています。もう二度とこのようないふうに、一人人が協力し合って、世界中に平和が伝わってほしい。そのことを毎日神様にお祈りしながら、これから的人生を明るく生きていこうと思っています。

(六〇、五、一〇)

女子事務職員 中島マサ子

遺族 長崎市竹ノ久保町二二一五 中島盛一(兄)

私の戦後四十年、ヨブ記を支えに

旧約聖書ヨブ記一一〇に、「主が与え、主が取られたのだ。主のみ名は賛ほむべきかな。」とある。

私は終戦の年四月一日に、相の浦海兵團衛生三等兵として四十二才で応召し、霧島海軍病院勤務中に、家族十名を原子爆弾により一瞬に奪われた。娘マサ子は、長崎医大の会計課監査係員として勤務中に爆死し、同年六月に大村連隊に入団したばかりの長男(二十才)と、私と二人が生き残った。

復員して家も人もない原子野に立ち、途方にくれ、神も仏もあるもんかと呟いた。その時助けにきていた妹のシスターが、冒頭のヨブの言葉を慰さめ顔に口にした。絶望寸前の私は、日頃の信仰を見失い、心中大浪の抵抗を感じた。宿を西山町一丁目の従姉妹宅に借り、防空壕の遺品整理に、竹の久保まで約八キロを大八車で往復し、日暮れの桜町の坂道あたりで、偶然に出会った友人に、「ああたも生きとつたですか。」と懐かしく挨拶し、妹の慰さめの言葉を話すと、「そうですたい、そうですたい。」と、互いに頷きあう心の奥では、まだ信仰の火種が消えずにはいる自分を、愛しく見つめているのであった。

翌春、長男は旧東京帝大に復学した。上京を前に、今後の二人の生き方を話し合う。子は別居を望み、父に再婚をすすめる。自ら父の代理を受け、婚約を成立させて帰京した。私は息子の選んだ妻を迎え、第二の人生を歩き始めた。

召集解除後、私は直ちに職場の長崎医大本館に向った。本館焼跡で動転した

のは、私の配下八名の庶務課員が、各自の机の下で白骨になっていた。私はしばし慟哭默祷を捧げ、私の責任の重大さを痛感した。

斯くして被爆後の事務整理が待たれており、残務処理から復興事務の慌しい日が連日続いた。仮設の大学本部は長崎商工会議所、長崎高商、新興善小学校と移転し、大村海軍病院から佐世保海軍病院諫早分院に於て、学生の授業並びに診療が開始されるに至り、諸般の大学業務の復旧が緒についた。

茲に於て私の生活も、諫早分院内の公務員宿舎に落ち着いたのである。無一物から出発した家庭の経済的負担は、妻に重荷をかけて心苦しかったが、幸に精神的靈的にすべては円満に運び、長男も卒業後は就職地を東京に求め、嫁探しは両親に一任し、嫁姑の仲もうまく計らってくれた。

諫早での勤務中に、古屋野学長が国立嬉野病院長に就任され、私は同病院事務長に懇請されて、文部事務官から厚生事務官になった。

国立嬉野病院で、天皇陛下の公式訪問があり、病院施設の御案内のため、御先導を申し上げた。その後国立別府病院勤務を経て、次期の転任地を長崎市に願い出て、国立長崎療養所に転勤した。ここを最後に、三十七年の公務員生活に終止符を打った。

昭和三十五年、父祖の地である現住所に帰郷して、自適の生活に入る。病気入院も数度、胃や心臓等で家族に心労をかけたが、古稀、喜寿、傘寿は子等五人が心を合せて祝い、喜びを与えてくれた。

昭和四十九年春、勳五等瑞宝章に叙せられ、五十年春には五名の息子のうち一人が希望して神父となり、長崎教区司祭に叙階されたことは、何より平和な喜びであり、神に感謝した。弟妹三人も感激し、

○ 原子野の猛暑に語りしヨブの故事
○ 若人らヨブも羨む子等仰ぐ

と詠んでくれた。

今、成長した子等五人は、夫々一家をなし、孫も曾孫も一人も欠けることな

く育ち、八十二才を恵まれた日々に、ヨブの信仰の真実をつくづく味わいながら、神に賛美と感謝の中に過ごしている現在である。（六〇、四、一）

女子事務職員 平 石 喜美子

遺族 長崎市万屋町五十九—四〇一 平石義男（兄）

あの日、二十年八月九日は、真っ青の空き抜けるような日本晴れだった。西部軍高射砲第一三四連隊睦（むつ）八〇六四部隊第三中隊の安保（あほ）陸地（旧、香焼島）では、起床と同時に八吋高射砲に飛びついた。

午前八時十分頃だった。野母半島の遙か遠い上空に、南から西へ飛行する敵機B29一機を発見したが、間もなく西の水平線の彼方へ消え去った。やがて、長崎の街では空襲警報も解除され、市民はひとまず安堵の胸をなで下していた。

しかし陣地では、雲一つない青空に、ジリジリと照りつける猛暑をものともせず、朝食抜きで引き続き、戦闘態勢が敷かれていた。学徒出陣に角帽を捨て、軍服に身を固めた私たち幹部候補生は、北九州小倉の高射砲部隊から、幸いにも故郷の長崎部隊に転属し、勇気百倍、「撃ちてし止まん」の闘志は、ますます天をつく氣概に燃えた。

特別観測指揮の任務につく私は、十六時対空双眼鏡の中に、敵B29一機をとらえた。

「高度一万メートル」

北の方向・浦上上空、方位零度から長崎市中へ、超高空で侵入するゴマ粒ほどのB29一機が、飛行雲の尾をひきながら飛来する。

突然パッと、白い三つの落下傘が双眼鏡に写った。安保陣地から見て、稻佐山と金比羅山の中間（浦上）の上空に、白い三つの落下傘が音もなく落下する。指揮中隊長（宮川三雄、陸軍中尉、陸士五十一期）の命令で、私はこの落下傘を追つた。

一方、私の周囲にいる四名の観測兵が、目測でB29の進行を逐一報告した。

「敵機長崎上空侵入。」次で「県庁上空。」「本部（南山手町）上空。」「深堀上空。」「野母半島。」やがて「野母半島通過。」と秒刻みに連呼する。その間約二十三秒から二十五秒ぐらい。白い三つの落下傘が、私の対空双眼鏡の概略照準より精密照準に移る時（午前十一時二分）、一瞬の閃光が「バツ」と光った。今思えば、子供の頃の遊びで、輝く太陽を鏡で反射させる、あのまばゆい光の巨大な固まりのようだ。やがてドーナツ型の大きな炎の輪の中から、キノコ型の光る炎が、ニヨキニヨキと青空を突き刺すように、物凄い勢いで噴きあげ、「アツ」という間に、炎は高度二千、三千、四千、五千メートルと、急上昇する。照りつける太陽は稻佐山の上空にあつたが、一瞬の閃光はやがてキノコ型の炎となり、太陽を呑み込むように覆い包むと、長崎市中はもとより、陣地も次第に薄暗い夕暮れ時のように暗くなつた。

B29が落下傘を投下し、自らは野母半島の彼方へ逃走するまで、約二十秒。あの恐ろしい原子爆弾（ピカドン）で、一瞬にして火の海と化した。ふるさと長崎が悪魔の業火の真つただ中にのまれ、数万の人が焼け死んだ。くやし涙と閃光で、全身は異常にヒリヒリ痛んだ。

あれから四十年、いま長崎のあの呪火の爪跡に夏草は茂り、平和は訪れた。が、長崎の人たちは、たとえ四十年、五十年と時がたとうとも、決して、「あの日、あの時」を忘れる出来はない。合掌（六〇、四、二九）

女子事務職員 福丸きみ子

遺族 長崎市西山町一丁目四三 福丸正子（義姉）

原爆後四十年をふりかえつて

あの日は朝からよく晴れた暑い日であった。私はまだ一才にならない末の子を背負い、古賀の国道に面した郵便局の裏に、知人を訪ねていた。用向きを話していたその時、妻い光とガラスのわれる激しい音など一気がつと背中の子を前に抱き、部屋の一隅で子の上におおいかぶさっていた。

どのくらい経つただろうか、道に出ると消防団の人達がいて、「危ないから

移動しないように」と告げていた。

「あれは何かしら」。誰かの声に指さす方を見ると、大きな異様の形をしたもののが、くつきりと空にうかんでいた。これは唯事ではない。家に留守居させている二児(七才と三才)のことが心配になり、国道から小径に下だり、懸命に走り始めた。足がもつれてなかなか進まなかつたが、やつと疎開先の農家につき、無事な子供の姿を見てほつとした。

それから何時間かたち、夕方にかけて、負傷者を乗せたトラックが何台も通り過ぎていった。諫早・大村方面の病院に収容することであった。

人伝て、次第に長崎の様子がわかつて来た。十一時ごろ、アメリカの新型爆弾が落されて、浦上方面は全滅、多数の死傷者が出了。火災が発生している等々、その夜長崎の方向の空は赤く焼け、縁先は拭いても焼け残りの紙、綿、布地が舞い落ちた。

不安な夜が明け、あたりが白みはじめた頃、国道は大変な有様だった。手廻りの荷物を積んだ荷車を押す人、その家族の一団、ぼろぼろの着物に髪ふり乱し、放心したよう歩く人、皮膚がむけて赤い傷口をさらけ出した負傷者たち、夜を徹して長崎から歩き通して来た人々の列だった。長崎の山里町に住む肉親を探すため、国道に出たが、目を覆いたい光景におののくばかりだった。

「きみ子さん、私達が古賀でこんなに恐怖で右往左往している時、あなたは長崎医大の一室で、あの一瞬、遺体もわからぬように既に亡くなっていたのですね。同居の期間は短かかったのですが、あなたが浦上教会の近くの自宅から医大まで、非常時の引締った服装で勤務する姿を、はつきり憶えています。

あの日、お父さんは、浦上駅と自宅の間の路の上で、亡くなられたものと思われます。お母さんは自宅の風呂場で、伏せたまま亡くなつておられました。あれから四十年、世の中は平和になりました。山里町の家のあたりは、整然とした住宅街に変わり、長崎医大も立派に建ち、悲惨だった当時を偲ぶことは出来ません。

耐えることのみ多かつたきみ子さんの青春、人生の楽しみも知らずに、二十三才で逝つたきみ子さん、無念の死をとげて平和の礎になられたことは、決して忘れません。どうぞ安らかにお眠り下さい。」　　合掌

(六〇、四、二六)

編集後記

調 来 助

被爆四十年に当る今年の記念事業として、私は「忘れな草、第七号」を計画しましたが、この度は学生の遺族ばかりでなく、学内全員の遺族から手記を募集しましたところ、教官の遺族から八通、事務職員の遺族から一一通、看護婦の遺族から八通、学生の遺族から一〇三通、合計一二〇通の手記が集りました。原稿を読んでみると、殆んどの方が、「若しあの子が生きていたら、今頃は還暦を過ぎて、子供や孫も出来てているでしょう」とか、或いは、「立派な医者になつて、学界や社会の為に貢献しているでしょうのに」などと、亡き子の年を数えて悔んでおられる様子が、目のあたりに見るよう想像されるのであります。

親御様方のお年は、七十才代の方は少く、殆んどが八十才代で、中には九十才代の方も數人見られました。

私は昭和四十五年に、遺族の方の年齢と健康状態を、アンケートによつて調べたことがあります。年齢は十二月末現在で調査したので、今八月現在では、一つ位若い方があるかも知れませんが、数え年では逆に一つ位多い方もあります。今八十才以上の方を列記すると、次のようになります。

(敬称略、名簿順)

【八十三才】山根 登美、高木 ミチ、三村 静、山田 邦子

犬塚 藤子、高橋 セイ、朝長 レイ、中島金之助

原 千里、阿部タマエ、力武 春次、渡辺 イヨ

【八十四才】三村 伸一、溝口 サダ、川崎 秋子、足立 ツユ

岩永 ムメ、生島 クラ、永井 チヨ、池崎 ツル

立石シメ子、土橋 清子、中島キクエ、三宅カメノ

溝口 勇三

【八十五才】大場 テル、東 誠次、荒牧 タツ、森 サク

田尻 ユイ、高比良達磨、野口 ムメ、米 トメ

【八十六才】花田 静枝、古坂 健造、亀井 ユキ、大楠 琴子

北村マサヨ、調 来助、中山 愛子、藤原 元

山下 信康

【八十七才】大池小三郎、津和 ハツ、石井 真一、中瀬佐武朗

磯永キクノ、北野 伊志、鳴村 源藏、松田 クラ

【八十八才】森内 貞吉、児玉 治重、岡本 知定、橋本源治郎

村山 トヨ

【八十九才】穗坂 宗次、江口虎三郎、菅原 チヨ、中山 フク

大隈卯二郎、川崎 トシ、河野 米子、柴田 正義

江島 広

【九十才】浅山 富雄、前川 熊一

平山 ナツ

【八十一才】糸山 綾子、江口トモエ、高橋 萬二、竹本 春枝

池田 クニ、佐藤ヒロ子、松尾タカ子、井田佐太郎

田代 春子、鶴 嘉代藏、峯 ヨシ、若杉 キヤ

【八十二才】片山 繼子、小曾根邦治郎

【九十七才】片伯部ハル

【九十二才】肥後 シゲ、高平 繁一、山崎 寿一

【九十八才】 中島スエノ

以上で丁度一〇〇人になります。但しこれは昭和四十五年のアンケートによるもので、中には私の記憶違いで、既に故人となつておられる方があるかも知れませんし、反対に記載洩れの方もあるでしようから、正確とは云えませんが、九十才以上の方が十四人（一四%）も居られるのを知って、大変心強く思いました。まだ百才の方はありませんでしたが、中には百才を目標に頑張つておられる方もあるようですから、今にきっと目的を達せられることと、御健祥を念じております。

これまで「忘れな草」の名号には、「旧長崎医科大学原爆犠牲職員並に学生とその遺族の名簿」が巻末に掲載されていました。昭和四十二年に銅板に犠牲者を彫刻した時は、確かに八七四名の犠牲でしたが、その後の名簿では次のようになっています。

年 度	教職員	事務職員	看護婦	学 生	総 数
昭和四三年	四一	一〇五	一〇七	五二	八八四
ク 四四年	四一	一〇五	一〇九	五二〇	八八五
ク 四六年	四二	一〇六	一〇九	五三一	八八九
ク 四九年	四二	一〇六	一〇九	五三五	八九二

以上のように漸次増加して八九一名になっています。増加の最も多かったのは医専の生徒で、それは昭和二十年七月一日に入学式があつて、八月九日に原爆で死亡したので、まだお互いに馴染みが浅く、学籍簿は原爆で焼失したため、死亡者の判明が遅れたものと思われます。

名簿の改訂が必要と思われますが、十年余り調査を放棄していたので、その間に他界された人、住所が変更になった人、後継者が不明になつた人などが多

くて、今では全く收拾のつかない状態になり、連絡をとるのに大変困っています。そのためこの度は、比較的確実と思われる学生遺族の方一五〇名に案内状を差上げました。手記を戴いたのは一〇三名で、あとは手紙が返送されたり、御病氣か御老体のためか、その便になつてしましました。

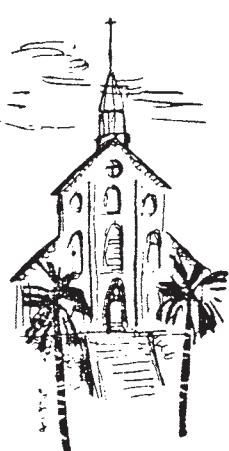
それでも御熱心な方は、毎年のように慰靈祭にお詣り頂いております。長崎市内、長崎県下は勿論、他県からも毎年御参列いただく方があり（鶴様、永井様、松尾様、関家様、鳴村様、池田様、糸山様、その他）、昨日は身内に急病人が出来て慰靈祭にお参り出来なかつたからと云つて、わざわざ四国の松山市から親子連れで来られた方もあります。グビロが丘の慰靈碑に花や果物をお供えいただき、暫らくは去り難げに、熱心に礼拝しておられました。

私も徒らに馬齢を重ねて今年八十六才になりました。遺族会長をお引受けして二十年になろうとしています。もうそろそろ誰かに代つて頂くようになると想い

ますが、慰靈祭だけは盛大にやつてやらないと、犠牲となつて亡くなられた角尾学長はじめ、八九二人の御靈に対して申証ないと考えますので、体力の続く限りは続けてお世話を致したいと思っております。

どうか皆様もくれぐれも御自愛の上、原爆の日にはお子様、ご兄弟の御供養大切にお過しのほど、衷心よりお祈り申し上げます。

（六〇、八、一〇〇）



忘 れ な 草

第七号

原爆被爆四十周年記念

昭和六十年九月十日 印刷
昭和六十年九月十五日 発行

(非売品)

編集

長崎市本原町一一二九
長崎市本原町一一二九
調査助来

發行

長崎市江里町三番二号
旧長崎医科学会
原爆犠牲学徒遺族会
大同印刷有限公司

印刷

長崎市江里町三番二号
大同印刷有限公司

